

靈界物語 第五四卷 眞善美愛 巳の巻

出口王仁三郎

凡例

【】……底本で傍點が振られている文字列

(例) 【ヒ】は火なり

「ス」を現す記號(丸にホチ)は「」に置き換えた。その他、文字コード(ユニコード)に無い文字は「ニ」に置き換えた。

底本

『靈界物語 第五四卷』愛善世界社

2006(平成18)年02月03日 第一刷發行

底本をもとに若干の編纂を加えてある。詳細は次のウェブサイト内に掲載してある。

『王仁三郎ドット・ジエイピー』(オニド)

<http://onidodo.onisavulo.jp/>

現代では差別的表現と見なされる箇所もあるが修正はせず底本通りにした。

第三章 懸引かけひき（一三八九）

第四章 理妻りさい（一三九〇）

第五章 萬違まちがひ（一三九一）

第六章 執念しふねん（一三九二）

第二篇 戀愛無涯れんあいむがい

第七章 婚談こんだん（一三九三）

第八章 祝筵しゆくえん（一三九四）

第九章 花祝かしく（一三九五）

第一〇章 萬龜柱まきばしら（一三九六）

第三篇 猪倉城寨いのくらじやうさい

第一章 道晴別みちはるわけ〔一三九七〕

第二章 妖瞑酒えうめいしゆ〔一三九八〕

第三章 岩情がんじやう〔一三九九〕

第四章 暗窟あんくつ〔一四〇〇〕

第四篇 關所せきしよの玉石ぎよくせき

第一章 愚戀ぐれん〔一四〇一〕

第二章 百圓ひやくゑん〔一四〇二〕

第三章 火救團くわきうだん〔一四〇三〕

第五篇 神光増進しんくわうぞうしん

第八章 眞信しんしん〔一四〇四〕

第一九章

流調りうてう

〔一四〇五〕

第二〇章

建替たてかへ

〔一四〇六〕

第二一章

鼻向はなむけ

〔一四〇七〕

第二二章

凱旋がいせん

〔一四〇八〕

附録ふろく

神文しんもん

〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕
〔 〕

序文 じよぶん

抑靈界物語は神代に於ける神々の神示に由りて著されたるものであつて、現代の所謂學者の歴史でもなく、又歴史家の歴史でも無い。世の腐儒者や興國的氣魄なき歴史家や、デモ宗教家の所説は、徹頭徹尾憶測と受賣のみにして、一として歴史の真相を傳へ、且つ之を眞解し得たものは絶無と謂つても可い位である。況んや宇宙開闢の真相に於てをやである。試みに今日朝夕發刊せる新聞紙の記事を見るも、同日の出來事を記者自ら實地に臨み之を目撃して、直に紙上に掲載するに當り、各新聞記者の眼識の程度如何に由つて其觀察點を異にし、同一の出來事を報道するに甲、乙、丙、丁各その見解を異にして筆を採るを以て、その矛盾と誤謬の多きことは一般識者の感知する處である。現に一昨年のおほもと事件の記事の如きは、一切無根と虚構とに由つて充され、一として其真相を報道したる新聞紙の無かつたのを見て、思ひ半に過ぐるものあるを覺るべきである。又前後二十有餘年間、大本に日々出入し親しく教祖に接し口づから教示を承はり、且つ日々

の御行動を實地目撃し乍ら、未だ教祖の御心意の奈邊にありしかを知らざるもの
而已なるを見ても證明することが出来る。又瑞月が教祖と共に大神の道に舍身的
奉仕の誠を竭したるを見て、之を何か神慮に背反せる行爲の如く見做し、甚だし
きは邪神の憑依せるものとして、永年閒排斥と侮蔑と壓迫とを一生懸命に試み、
以て自分等の行動は全部神に叶へるものと信じ妄動を續行し居たる如きは其好適
例である。一昨冬始めて本書の口述を爲せる折も、重要な位置にある役員の一部
分は之を以て取るに足らざる悪言となし、極力妨害を加へむと爲したるものさへ
あつた位である。之全く神意の存する所を知らず且つ自分の暗迷なる眼識によつ
て身魂相應の解釋を試みむとするが故である。

又現代の學者、宗教家、歴史家は本書を以て支離滅裂、つかまへ所の無い物語
と成し又は放膽なる斷定に失せる作物と批難し、傍若無人と譏り、怪亂狂妄見る
にたえざる悪書と貶し、相手にも爲て呉れないであらう。永年大本に出入し乍ら
大本の主義精神の主要點が分らない處まで、現代人は癡狂癡呆の度が強くなつて
居るのだから、瑞月が神示に由れるこの物語に對して我不關焉の態度に出たり、

又は反對の擧に出づるものたるべきは當然の歸結として、既に已に覺悟の前である。

本書は現代の學者、宗教家、歴史家の思潮を憂慮せる熱誠慷慨の餘聲として、將た又神明の攝理の一分として編述したもので、今日の有識者の所説に對して一歩も譲らない事を信ずるのである。今日世界に流布せる國々の歴史は、空々漠々として殆ど雲を掴むが如く、如何なる史家も之を史上に於てその真相を捕捉する事は出來得ないのである。

頼りなき口碑や、傳説や、その他の先入思想を全然放擲して、柔順に神の御聲に耳を傾け眼を注ぐ時は、遠き神代の世界の史實は言ふも更なり、中古近古に於ける歴史の真相をも幾分か捕捉し得らるであらうと信ずる。我國の歴史と雖も、その大部分は神武聖帝以後の歴史であつて、太古神代の事蹟は束ねて之を筑紫の不知火の海に投ぜられたのである。之史家が神ならざる以上は史眼暗くして盲目の如く、書契以前の史實を映寫し得ざるがために歴史の真相が傳はらないのである。瑞月が茲に神代の事蹟の一分を口述編纂したる所の本書に對し、世の驕慢な

る學者の眼には時代錯誤の世迷言を陳列したものと見えるであらう。天は蒼々と
して永久に高くして廣く、地は漠々として際限なきに似たり、虚空の外に心身を
おいて神代の史實と神の意思とを顯彰し、一瞬に轉廻して宇宙の眞相を示さむと、
神示のまにまにこの物語を著はしたるその苦心、之を酌むものは大本信徒を始め
とし、世上果して幾人あるであらうか、或幹部役員たりし某氏はこの物語を評
して、……靈界物語は譬ば砂利の山の様なもので、吾々は其澤山の砂利の中から
自分の之と認めただけかに包める砂金を採取するの考へを以て之に對するのである
……と話してゐられた。瑞月はこの意外にして不遜なる某氏の談を聞いて、未だ
神の權威の大本幹部たりし識者に容れられず、了解されてゐない事に嗟嘆せざる
を得なかつた、大神の神格を精靈に充し豫言者に來らしめて、萬民救治のために
明示されたる神書に對し、餘りに無理解にして且つ學者の鼻の高きには感心した
のである。輕侮嘲笑の的となるであらうとは豫期しては居たものの、大本幹部の
口から斯様な言が出るとは一寸面喰はざるを得なかつた。

然し乍ら天下一人の具眼者が現はれて、一度心を潛め眞面目に臨まむか、必ず

や一節毎に深遠微妙の眞理を藏し、五味の調度宜しき彌勒胎藏の神意と、神智や苦集滅道の本義を發見し、肯定し、歸依するに至るであらう。本物語の目的は靈界現界の消息を明かにし、諸人が死後の覺悟を定め、永久に天國淨土の悅樂に入るべく、仁慈の神の御賜として人間一般に與へられたものである。現界に用ゐては大は治國平天下の道より、小は吾人が修身齊家の基本となるべき神書である。昨大正十一年の秋瑞月は筆録者を始め、天聲社に於ける編輯者は、この物語に對して何處までの信仰を有するかを試みむため、神示に従つて……萬々一本書の中に於て教典として採用すべき金玉の文字あらば拔萃して之を別刷となし宣傳用に宛て、熱誠なる宣傳使や信者に頒つべし……と言つた。そして是等の人々の感想や著眼點の奈邊にあるかを探らせられた。然るに驚くべし、全卷皆神より見れば金玉の文字、人間の作物でないものを、眞面目に取捨選擇し各之を數ヶ月熱心調査の結果として餘に示された。直に神明に伺ひ見し所、神は大に笑はせ玉ひ、……人間の盲目と無鐵砲には呆然たり……との御言葉であつた。瑞月もこの神示には大に面喰つたのである。故に定めて拔萃に盡力されし人々は驚かるること

ありませう。大本神諭に示されたる如く、矢張り靈魂の因縁相應より口述者と雖も分らないものと歎息したのである。

之を思へば人間は自我心を出さず、何事も聖慮に素直に柔順に仕ふるより外に途はないと思ふ。この神書を以て普通の稗史小説又は單なる滑稽物語及び心學道話の一分と見てゐる位の程度では到底この書の眼目點をつかむ事は出来ない。ア日暮れて途いよいよ遠しの感に打たれざるを得ない次第であります。

かむながら幸はひまして世の人に
さとらせ玉へ是の神書を

大正十二年正月元旦

「至高の藝術表現の榮光、文學の光明の輝きは單純である。單純より善い物はない、實相の誇張や缺乏を矯正し得るものは單純を除いて外にない。衝動の澎湃を持続して智力の奥底に滲徹し凡ての樂旨に音節を與ふるのは平凡な力でも無ければ、極めて突飛な力でもない。けれども動物の動作の極めて正しく、しかも無遠慮奔逸なものや、森の木立、路傍の草の云ひ知れぬ感じを文學に表はすのは藝術の瑕瑾無き勝利である。それを完成したものを見たらば、即ち國家と時間とに超越した一大藝術家を見たのである。大詩人は一定した著しい文體を持たず、思想と事物との水脈は増加することも無く減退することも無く、彼自身が自由なる水脈である」

とワルト・ホイットマンは言つたことがある。瑞月王仁はこの物語が單純であり、一定の文體が具はつてゐないと言はれやうが少しも意に介せない。否吾々はワルト・ホイットマン氏の意志に賛するものである。神の著せしものは凡て單純であ

り且つ一定の文體なきを以て却つてその博き文想到に感嘆するものである。瑞月は決して物好きで口述するのでは無い。只吾口を通じて著はされたその作物に優美、原因、結果を描いて幕のやうに自己と人ととの間に邪魔物を垂れないやうと勉むる而已である。神の著述には斷じて邪魔物はない筈だ。又決して美しい幕さへも張られて無い物だ。神示に由りて吾々が語る所は正に斯くあるべき物なるが故に語るのみである。吾々が今表白する所のものは佯らず、飾らず、惟神のままである。凡ての立派な藝術作品は必然即ち止むに止まれぬ要求と絶対の眞實を持つてゐなければ成らぬと云ふ觀念を持つて居なければ成らない。本書も亦、吾大本の信仰に對し現代を救ふの道として止むに止まれぬ場合が差迫つた爲に神勅によつて編述することになつたもので、決して瑞月王仁や眞澄や隆光、明子、介昭氏等の物好きで作つたものでは無い。何れも神の命のまにまに著者は病軀を起して、止むに止まれず着手したもものなることを御了知の上御愛讀あらむ事を希望する次第であります。今日の處では未だこの書が地方によると、役員や信者に讀まれない所も澤山あるやうなり、大本に於ても變性女子の遊戯的作物として輕視し、一回

も本書を手にしにしない方が在るのは實に遺憾の至りであります。本書は古き神代の物語と云ひながら、時代に先んじた文語や文學的形式を採用してゐるのは、都合だと言つてゐる人があるが、それでは表現の範圍を擴めることは出来ない。豫言的精神に充された本書は、所在形式美を盡して朝日に輝く雲の様に虹色を呈して虚空に架つてゐる程の覺悟を以て進んでゐるのである。又従來人の云はなかつた新しい事も云ひ、人間の表現の限界を擴張せむが爲に、原始的法則に歸らざるを得ない場合も稍多くある。即ち人間の感情そのものが自ら流れ出た言葉に、惟神の詩韻が現はれるものである。人にして若し言はざるを得ないものを持つて居るならば、石が地に落ちる様に、何事もなく單純に、率直に、自然に洩れ出づるものである。石が落ちて來るには決して二つの形式は無いのを見ると、凡て現はれ出たものの根底には、必然なるものが潜んでゐるものであると思ふ。記して以て總説に代ふ。

大正十二年二月十八日

第一篇 神授の繼嗣

第一章 子寶（一三八七）

叛將ベルツに荒されし 見るかげもなきビクトリア

王の住家は漸くに 治國別の宣傳使

其一行に助けられ 九死の中に一生を

得たる心地の初夏の空 塵も芥も根底より

吹き拂はれて太平の 再び御代となりにけり

ヒルナの姫は復元の 位に居直り忠實に

アーチヂュークに仕へつつ 神を齎りて城内は

云ふも更なり國中も いと安らけく平けく

治まりしこそ芽出たけれ。

叛將のベルツ及シエール其外の一派は國法に従ひ、反逆罪として重刑に處すべ
き所なりしが、治國別、松彦、龍彦、萬公の斡旋に仍り、大赦を行ひ、兩人は百
箇日の閉門申付けられ、門口は四人の守衛をして嚴重に守らしむる事となつた。
刹帝利（太公）は追々老齡に及び、世が治まるにつけて、前途の事を思ひ出し、
嗣子の一人も無きに胸を痛めて居た。ビクトリア王はアーチ・ダツチエス（太公
妃）との間に五男一女があつた。アール、イース、ウエルス、エリナン、オーク
ス、ダイヤ女といふ子供があつたが、王は或夜の夢に……五人の男の子が自分を
放逐し、ビクの國を五分して各覇を利かし、國內を紊した……といふ恐ろしい夢
を見たので、ビクトリア姫に向ひ、深夜ソツと五人の實子を殺さむ事を謀つた。
そして……今度腹にある子が男であつたならば、それも殺して了ふ、もし女であ
つたならば助けよう……とまで言つた。ビクトリア姫は之を聞いて大に驚きつつ
も、ワザと素知らぬ顔をして、……何程諫めても言ひ出したら後に引かぬ氣象の

ビクトリア王は、到底五人の子を助けることはせまい、そして又自分の腹に出来た子が男であつたら如何しようか……と大變に心配をしてゐた。併し乍らワザと素知らぬ顔をして、胸に萬斛の涙を湛へてゐた。それからソツと五人の男の子に父の決心を囁き、……一時も早く身を以て遁れよ……と命じたのである。五人の兄弟は大に驚いて、ビクトリア姫よりいろいろの物を與へられ、夜に乗じて、城内を抜け出でビクトル山の峰續き、照國ヶ嶽の山谷に穴を穿ち難を避け、獵師となつて生命を保つてゐたのである。ビクトリア姫は月盈ちて生み落した、慌て調べて見れば女の子であつた。ヤツと安心して、ダイヤといふ名を付けた。ダイヤ姫は七才になつた時、母に向つて、自分の兄弟のない事を歎いた。そこでビクトリア姫は五人の兄があつて照國ヶ嶽に獵師となり隠れて居ることをソツと物語つた。ダイヤ姫は之を聞くより五人の兄に會ひたくて仕方がなく、十歳になりし折夜祕に城を脱け出し、纖弱き足に峰をつたつて、照國ヶ嶽の谷間に漸く辿り着いた。行つて見れば、可なり大きな土窟があつて、獸の皮等が干してあつた。兄の四人は獵夫に出て不在であつたが、五人目の兄オークスが一人番をしてゐた。發

覺を恐れて、如何なる人間も此處へ來た者は、一人も、打殺して歸さない事に五人は定めてゐたのである。そこへダイヤがへトへトになつてやつて來たので、オークスは目をギョ口つかせ乍ら、

オークス「お前は何處から來た者だ」

と尋ねた。ダイヤは涙を拭き乍ら、

ダイヤ「ハイ、私はビクトリア王の娘ダイヤと申します。お母さまに承はれば、

……父上に祕密で、十年許り前から、此照國山に五人の兄さまが獵師をして隠れ

てゐられる。お父さまも年よりだから國替をしられたら歸つて來い……と云つて

隠してあると仰有いましたので、私は兄さまに會ひたくて會ひたくて仕方があり

ませぬので、兩親に隠れて尋ねて參りました」

と云つて、ワツと許りに泣き伏した。オークスはよくよくダイヤの顔を調べてみ

ると、どこともなしに自分の兄に似た所がある、又母にも似てゐる。併し乍ら四

人の兄が歸つて來たら何と云ふであらうか、假令親兄弟と雖も命を取ると定めた

以上は、此可憐な妹を殺しはしようまいか……と大變に心配をし、聲を曇らせ乍

ら、

オークス「お前は如何にも妹に間違ひはない、よう来てくれた。頑固一片の父王は夢を見たと言つて、吾々五人の兄弟を殺さうとなさつたのだ。それを母の情けに仍つて命丈を保つてゐるのだが、お父さまはまだ達者にしてゐられるかな」と尋ねて見た。ダイヤは涙乍ら、

ダイヤ「ハイ、お父さまは極めて御達者でムいます。そしてお母さまは私の七つの年に兄さま達の事が苦になつて、それが元で病氣にかかり、亡くなつて了はれました。跡へヒルナ姫といふ小間使がお父さまの妃となつて、今年で一年になります。私はお母さまは亡くなる、兄さまはゐられないし、城内に居る氣がしませぬので、お後を慕うて参りました。モウ城内へは歸りたくありませんから、何卒此處に何時迄もおいて下さいませ」と両手を合せて、涙と共に頼み入る。

オークス「ああそれはよう尋ねて来てくれた。併し乍ら兄が歸る迄、お前は此葛籠の中へ隠れてゐてくれ、そして兄の腹を聞いた上、若も助けるといつたら、公

然と兄妹の名乗をさすなり、叩き殺すといつたら、氣の毒乍らお前を此葛籠に入れておいて、兄の行つた後で、何ツ處へ送つてやるから……」
ダイヤ「何分宜しく頼みます、兄さまに會うて殺されても満足でムいます」
と啼噓泣く。

オークス「モウ兄貴の歸る時分だから、サ、之へ入つてくれ」
と葛籠の中へダイヤを入れて素知らぬ顔をしてゐた。そこへ兄のアール、イース、ウエルス、エリナンの四人が兔や狸を捕獲してイソイソと歸つて來た。オークスは出で迎へ、

オークス「兄さま、今日は大變早うムいましたな」

アール「ウン、此通り兔と狸が都合好く取れたので、今日は何だか氣が急いで、お前の身に異状が出來たやうな氣がしてならないので、急いで歸つて來たのだ」と云ひ乍ら、足装束を了ひ、廣い穴の中へ這入つて腰を下ろした。

アール「俺の不在中に變つた事はなかつたかなア、どうも氣が急いで仕方がなかつたのだ」

オークス「ああさうでゝいましたか、實の處は妹が尋ねて來ました。けれ共吾々の規約に従つて叩き殺さうと思つたが、餘り不愜なので、化者の眞似をして追つ返してやりました」

と云つて、兄の意見を探つてみた。

アール「吾々に妹があるとは、ハテ合點が行かぬ、さうすると自分の出た後で、兩親の間に出來た子であらうかな」

オークス「母が吾々が逃出す時に孕んで居つた、それが出産したのが女で、ダイヤと云ふ妹なんですよ」

アール「お前はなぜそんな者を追ひ返すのだ、俺も一遍會つてみたいのだが、ハテ困つた事をしたなア」

イース「モシ父にこんな所を悟られたら、澤山な軍勢を伴れて、又攻めに來るか知れない。歸なす位なら、なぜ可愛相でも殺さなかつたか」

アール「ヤ、殺すには及ばぬが、何故妹を止めておかぬのか、城内の様子も分るであらうに、何時迄も父が長生する筈もなし、お母さまさへ達者であれば、吾々

は後へ歸つて、ビクの國を治める事が出来るのだが、妹が歸つたとすれば、コレヤ大變な事が起つて來る、一時も早くここを逃げ去り、どつかへ身を隠さねばなるまいぞ」

と心配相に言ふ。

オークス「妹の言葉に仍れば、お母さまは三年以前に亡くなり、お父さまは極めて壯健で、ヒルナ姫といふ腰元をアーチ・ダッチェースとなし、大變な元氣だといふ事だから、吾々兄弟の望みは到底達しますまい」

四人の兄は慈愛深き母が亡くなつたと聞いて、一時に聲を上げて號泣した。

オークス「兄さま、モシ妹が此處へ尋ねて來たならば、貴方は大切にしまりませう、但は殺す考へですか」

と四人の兄の顔を覗いた、四人は聲を揃へて、

「妹に怨みもないのだから、斯うなれば兄妹六人が何處迄も一つになつて、仲よく暮らし、時節を待つて目的を成就させやうだないか」

此言葉にオークスはヤツと安心し、

オークス「實は此葛籠の中に妹を隠しておいたのです」

と言つたので、直ちにアールは葛籠を開き、妹を勞り、外へ出して五人がよつてたかつて、頭を撫で、背を撫で、兄弟六人しがみ付いて嬉し涙にくれてゐた。そして兄妹は此處に淋しい山住居を續けてゐたのである。

さて刹帝利の奥の間にはヒルナ姫、治國別、タルマン、キュービット、エクスが小酒宴を開き乍ら、四方山の話に耽つてゐた。キュービットは治國別に向ひ、左守「三五の神様のお蔭、貴師方の御盡力に依りまして、叛將ベルツも漸く降服を致し、あの通り閉門を申付けられ、あ、これで一安心致しましたが、刹帝利様は御老齡の事なり、御世繼がないので大變に心配を致して居られます。何とかして子を授かる法はムいますまいかなア」

と心配相に尋ねた。治國別は此處ぞと、膝を進め、

治國「刹帝利様には、アール、イース、ウエルス、エリナン、オークス、ダイヤ様といふ五男一女があるぢやありませんか。其方を禮を厚くしてお連れ歸りになれば、立派に御世繼が出来るでせう」

左守「ハイ、仰の如く六人のお子様がムいしましたが、今は其お行衛が分りませぬので、實の所は刹帝利様もお年が老つて子が戀しうなり、心祕にお尋ねになつて居ります。併し乍ら、どうしても其お子様は行衛は知れず、假令行衛は知れても御歸り遊ばすことはムいますまい」

治國「刹帝利殿、拙者が六人のお子様を貴方にお渡し申せば、貴方は如何なさいますか。昔のやうな考へを起して、皆殺して了ふ心算ですか」

刹帝利は涙を拭ひ乍ら、

「實の所は惡魔に魅入れ、悪い夢を一週間も續けてみましたので、敵が吾子となつて生れて來たものと信じ、五人の男子を一人も残らず打殺さうと、残酷な考へを起しましたが、それをどう悟つたものか、夜の間に城内を逃出して了ひ、どつかに潜んで計畫をなし、何時自分を亡ぼしに來るか知れないと思つて、夜の目も碌に寝た事はムいませぬ」

治國「それは貴方の御心得違ひといふもの、貴方のお子様は實に温良な方で、今はみじめな生活をし乍らも、國を思ひ、王家を思ひ、少しも恨んではゐられませ

ぬよ。貴方が今改心して、六人のお子様を城内へお招きになれば、キツと孝養を盡されるでせう」

刹帝「まだ此世に生きて居るでせうか。但は生きて何か悪い事を企んで居りは致しませんか……と心配でなりません」

治國「決して御心配なさいませぬ。私が引受けませう」

刹帝「治國別様のお言葉なれば、決して間違はありますまい。何卒此世に居りませぬれば、一度會はして頂き度いものでムいます」

刹帝「宜しい、二三日私にお任せ下さい。キツとお會はせ致しませう」

刹帝利は半喜び、半不安の態乍ら、外ならぬ治國別の言葉を力とし、一切を任して了つた。左守、右守を始めタルマン、ヒルナ姫も一同に頭を下げ、治國別に、

「何分宜しく頼みます」

と涙と共に頼み入る。治國別は自分の與へられた美しい館へ歸り、松彦、龍彦、萬公と相談の上、六人の子女を迎へ歸る事を謀つた。

茲に三人は治國別の命に依つて、ビクトル山を越え、照國ヶ嶽の山谷を指して

旅装を整へ、六人の子女を迎ふべく、草鞋脚絆に身を固め、奉迎といふ各手旗を
翳し乍ら、誰にも知らさず秘に尋ね行く事となりぬ。

(大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 松村眞澄録)

第二章 日出前(一三八八)

治國別の命令で ビクトリア王の御子達を
照國嶽の山谷に 尋ねて迎へ歸らむと
館を後に龍彦や 嬉しき便りを松彦が
萬公司を伴ひて 音に名高きビクトリア
山野を渡り谷を越え 猿の聲におどされつ
岩の根木の根踏みさくみ 迂る足許危くも

木々の梢を掴まへて 道なき路を辿り行く

荆棘茂る山の中 アール、イースや外四人

潜む土窟にやうやうと 息もスタスタ着きにけり。

オークス、ダイヤの二人は土窟の入口に日なたぼっこりをして、獣の皮を干したり、洗濯をしたりして、乾くのを待つてゐた。忽ち三人の姿を見るより、驚きの眼を睜り、山刀を手にして、何者の襲来かと身構へした。よくよく見れば、
『刹帝利の御子奉迎』といふ手旗を各翳してゐる。オークスは雙手を組んで、暫し思案にくれてゐたが、心の中に思ふやう、

オークス『あの手旗には自分等を迎へに來たやうに記してあるが、父と云ひ、近侍の頑固連か自分達の所在を探り、奉迎と伴はつて、召捕らへに來たのではあるまいか。之はウツカリ名乗る譯には行かぬ』

と心を定め、妹のダイヤに目配せした。ダイヤはオークスの意思を早くも悟り、さあらぬ態にて細谷川の水をいぢり、あどけない態にて、ワザとに遊んでゐた。

そこへ近付いたのは迎ひの三人、松彦は両手をついて、

松彦「一寸お尋ね致します。貴方は、ビクトリア城の刹帝利様のお子様では無いませぬか」

オークスはワザと空呆けて、

オークス「俺は此山に昔から住居をしてをる山男だ。そんな尊い者ではない。此谷には左様な方は一人もみえたことはないから、外を尋ねて貰ひたいものだなア」

松彦「ヤ、何と仰せられましても、貴方はお子様に間違ありません。サ、何卒私と一緒に城内までお歸り下さいませ。キツと貴方のお爲に悪い事は致しませぬ」

ダイヤは側へ寄つて来て、

ダイヤ「どこの方か知りませぬが、妾はここに二人夫婦暮しをしてゐる山男山女でムいます。決して左様な者ぢやありません。外をお尋ね下さいませ」

松彦「何と仰せられても、吾々の目では刹帝利様の御子女に違ひはありませぬ。左様な事を仰せられずに、吾々の申す通りに城内へ御歸りを願ひたい」

ダイヤ「ホホホ何とマア分らぬ人だこと、木樵の娘が墮落して、村の男と手に

手を取つて、斯様な處へ逃げ來り、山男山女となつて、戀を味はつてゐるのに、
恐れ多くも刹帝利様の娘だなどは、勿體ない罰が當りますぞや。妾が左様な尊
い方の娘なれば、どうしてこんな所へ出て來ませうか、誰がこんな不便な山住居
を致しませうか。よく考へて御覽なさいませ」
松彦「貴女は今、ここへ男と驅落をしたと仰有るが、比較的體は大きうても、ま
だお年は十才か十一才位にしか見えませぬ。そんな事云つたつて、此松彦は騙さ
れませぬよ。刹帝利様が大變後悔遊ばして、六人の子女を戀慕ひ……あああの時
は悪神に誑惑されて居つたのだ。追々年はよつてくるなり、あの六人の子女が居
つてくれたらどれ丈嬉しいだらう……と、朝夕お悔みなさるので、新參者の吾々
が、王様の命令を受けてお迎ひに參りました、何とお隠しなされましたも間違ひ
ありません、そして四人の御兄弟はどちらへお出でになりました。何卒それを御
知らせ願ひたいものです」
オークス「決して決して、何と仰有つても、左様な者ぢやムいませぬ。外を尋ね
て下さいませ」

と言つてる所へ四人の兄は猪を擔いで、きつい谷路を下つて来た。餘り足元に氣を取られて居つたので、三人が此處に来て弟妹と話をしているのに氣がつかなくつた。入口の前に猪を下ろし、汗を拭ひ拭ひ、三人の男が地上に平伏して見るのを見て、四人は驚いた。

アールはオークスに向ひ、

アール「オイ、此處へ来てゐる三人の男は何者だ」

オークス「ビクトリア城の刹帝利様から、お迎へに来たのだ。貴方は其御子女に違ひないからお迎ひに来たのだ……と云つて聞かないのですよ。親方何う致しませうかね」

アール「どうも斯うもない、吾々の規定通り實行すれば可いぢやないか」

オークス「それは一寸待つて頂きたうムいます」

アール「ナニ、グツグツしてゐると發覺する虞がある、此奴等三人をやつつけて了へ」

と言ふより早く一同の兄弟に目配せした。一同は猪突槍を持って、物をも言はず

三人に突いてかかる。オークス、ダイヤの兩人は雙方の中に割つて入り、

「兄さま待つて下さい……お兄さま暫く」

と兩人が制止するを聞かばこそ、四人の兄は、

「エエ邪魔ひろぐと其方も犠牲にするぞ」

と云ひ乍ら、バラバラと三人を圍んだ。三人は大木の幹を楯に取り、天津祝詞を

一生懸命に奏上するや、猛り狂うた四人は身體痺れ、其場にドツト尻餅を搗いた。

そして首計り振つてゐる。

アール「其方は吾々六人を刹帝利の迎へと伴り、甘く城内につれ歸り、生命を奪

はむとの企みであらう。左様な事を眞に受けて、うまうまと計略に乗る様な吾々

でない。サ早く歸つたがよからう」

と手足も動かぬくせに流石は刹帝利の胤丈あつて、氣丈夫なものである。松彦は、

千言萬語を費して、刹帝利の眞心や或はホーフス（宮中）の様子を細々と述べ立

てた。四人は漸くにしてヤツと安心した。

アール「それに間違なくば、吾々兄妹は茲でラートを開き、其結果御返事を致し

ませう。少時しばらく御猶豫ごいうよを願ねがふふ」

松彦まつひこ「ヤ、早速さつそくの御承知ごしょうち、可成なるべくは早くラートをお開ひらきの上うへ、吾々われわれと一緒にいっしょにホーフスへ御歸おかへり下くださいませ」

アール「然しからば暫しばらくここを遠とほざかつて貰もらひたい、決けつして逃にげも隠かくれも致いたしませぬ」
松彦まつひこは「宜よろしい」と四五十間許しこじつけんり傍かたはらの山腹さんぶくに退しりぞき、六人ろくにんの様子やうすを監視かんししてゐた。
六人ろくにんは聲こゑを祕ひそめて、相談會さうだんくわいを開ひらいた。

アール「オイ、弟おとうと、お前達まへたちはどう思おもふか。あの三人さんにんは父ちちの家來けらいだと云いつたが、どうも體からだの様子やうすを考かんがへてみると、モンク(修道師)の様やうだ。あんな事ことを云いつて、父ちちの命めいを受けうけ吾々われわれの兄妹きやうだいの此處ここにゐる事ことを恐おそれて、甘うまくゴマかし、連つれ歸かへり、牢獄らうごくへブチ込こむ考かんがへではあるまいか、ここは餘程考よほどかんがへねばなるまいぞ」

イス「あれは決けつしてモンクではありますまい。父ちちの命いのちを受けうけてやつて來きたグレナジャーでせう。さうでなければ、吾々われわれ猪武者いのししむしやが六人ろくにん居ある所ところへ、只ただの三人位さんにんぐらゐで來こられるものぢやありませんか」

オークス「兄上様あにうへさまのお考かんがへも一應いちおうもつと尤ながも乍なら、私わたしが夜前夢やぜんゆめを見みましたのには、或尊あるたふと

い神様のプロパガンデストが三人吾々をホーフスへ迎へ歸り、大切にしてくる事をみましたが、夢の事だから當にならないと思つて、實の所はお話もせずに居つたのです。そして所が夢にみたと同様のモンクがやつて來ました。キツと間違ひありますまい。そんな事仰有らずに三人に従つて歸らうぢやありませんか、父も老年に及び、餘程氣も弱つて居りませうから、滅多な事はムいませぬか」

アース「あれ丈頑固な迷信深い父上だから、何とも安心する譯には行かぬまい。のうウエルス、お前は何う思ふか」

ウエルス「ハイ、私の考へでは、どうも當り前の人間とは思ひませぬ。又父の命令で來たのとも考へませぬ。妖幻坊といふモンスターが此邊を徘徊するといふ事は、昔から聞いて居りますが、其奴が化けて來たのではありますまいか。ホーフスだと思つて泥田の中へでも突つ込まれるやうな事はありますまいかな。コレヤ、うつかりして居つたら、どんな目に會ふか知れませぬぞ」

アース「ヤ、決してモンスターではあるまい。兔も角危きに近よらずと云ふ事があるから、ここで能ふ限りの抵抗を試み、どうしてもゆかねば住家を變へるより、

仕様がないぢやないか」

エリナン「兄上に申し上げます。私はどう考へても、彼等三人は妖怪でもなければ悪人でもない、オークス云つた様に、父が改心の結果吾々を迎へに來てくれた者と考へます。取越苦勞をせずに、兔も角跟いて行つたら如何でせう。怪しとみたら又其時の處置を取れば可いぢやありませんか」

ダイヤ「五人の兄さま、私はどうもあの方は本當だと思ひます。一層の事、歸らうぢやありませんか」

アールは思ひ切つて、

「エ工怖い所へ行かねば熟柿はくへぬと云ふ事だ、運を天に任して歸ることにしようかい。併し乍らヒルナ姫とやら云ふハイエナ・イン・ベテコーツが扣へてゐるから、餘程氣をつけて歸らなくてはなるまいぞ。サア思ひ切つて歸る事にしよう」

といよいよ評議一決して、三人を手招きした。三人は喜んで六人の前に驅け來り、松彦「いよいよ御歸りと決定した様子でムいます。吾々も大慶に存じます。サ、

歸りませう。お察しの通り、拙者は三五教のプロパガンデストでムいます。實の所はビクトリア城は右守司のベルツの爲に殆ど落城せむとする間際に、吾師の君はるくにわけせんてんしわれらをつれて現はれ、お救ひ申し、城内は稍小康を得た所でムいます。刹帝利様も貴方方の命を取らむとした事を非常に後悔して、吐息を洩らしてお歎き遊ばしたので、吾師の君が、貴方方がここにゐられる事を看破し、刹帝利様にお話になつて、吾々を遣はされたのでムいます。必ず御心配遊ばすな、サ、歸りませう」

此言葉に六人の兄妹はやつと安心し、松彦、龍彦、萬公の後に従ひ、八男一女の道連れは山を越え、谷を渡り、漸くにしてフオール・ゾンネン・アウフ・ガンダの時刻に治國別の館にソツと歸り來たりける。

（大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 松村眞澄録）

あかつき そら あかね
曉の空は茜さし、百鳥の聲は千代千代とビクの國家の繁榮を祝し、又ビクトリア王が親子對面の慶事を壽ぐ如く、今朝は何となく勇ましく鳥の聲さへ聞えて來る。

はるくにわけ
治國別は神示に仍つて、今朝未明に松彦一行の歸つて來る事を悟り、門口の戸を開け放ち、湯などを沸かし、座蒲團を並べて待つてゐた。そこへ八男一女はイソイソとして歸つて來た。五人の男兄弟は熊のやうに顔一面に鬚ムシヤムシヤと生やしてゐる。一見した所では、どうしても人間らしく見えなかつた。而して永らく山住居をしてゐたので、體中苔が生えたと疑はる許りに垢がたまつてゐる。松彦「先生様、お蔭に依りまして、漸く六人の御兄妹をお迎へして歸りました」
はるくに
治國「ああ三人共御苦勞であつた。サアサア六人様、こちらへお上り下さい。そして湯を沸しておきましたから、お兄さまから順々に湯浴みをして下さい」
アール「イヤ、何共御禮の申上やうがムいませぬ。父が大變御厄介に預かつたさうでムいます。其上又吾々兄妹をお救ひ下さるとは、貴方方は神様のやうに存じます」

と荒くれ男に似ず、嬉し涙をハラハラと流してゐる。

治國「御禮を云はれては恐れ入ります。何事も神様の爲に御用をさして頂いたので、
で、いますから、御心配なく御湯をお召し下さいませ。オイ萬公、御湯場へ御案内を致せ。そして垢をおとして上げるのだよ」

萬公「ハイ承知致しました。サ、アールさま、貴方からお入りなさい。背中を流しませう」

と云ひ乍ら湯殿へ案内した。松彦、龍彦は代る代る六人の兄妹を湯浴みさせ、親切に洗うてやり、それからスツカリと鬚を剃りおとし、ホーフスから預つた六人の衣類を着替へさせた。何れも斯うなつてみると、氣品の高い貴公子然たる男計りである。ダイヤ姫は女の事とて、男が背を流す譯にもゆかず、只一人湯浴をなし、念入りに身體の垢をおとし、ラブロックを整理し、美はしき小袖に身を纏ひ、ニコニコし乍ら治國別の前に兩手をついて、再生の恩を感謝した。

萬公「ダイヤ姫の姿を見て、肝を潰し、
萬公「ヤア、これはこれとは許り花の吉野山、女は化物だと聞いてゐたが、コラ

まアどうした事だ。小北山のお菊から比べてみると雲泥の相違だ。何とマア立派なシヤンだなア、エへへへ

松彦「オイ萬公、ヤツパリお菊が戀しいか、困つた男だなア。それではモンクになつても駄目だぞ」

萬公「イヤ、もう文句も何もありません。素的滅法界惚ました、ああ惚た惚た。

われ乍らよう惚たものだ」

松彦「アハハハハ、彫刻師か井戸掘の検査のやうに言つてゐやがるな。困つた男

だなア。それぢや何時迄も萬公で行かねばなるまい」

萬公「萬公の同情を寄せて、此姫様をお迎へして來たのだから、何れ此……何で

せう、お兄さまがあるのだから、刹帝利家を繼がれる筈はなし、どこかへを

なさるお身分だから、ねえ松彦さま、モウお菊は思ひ切りますワ、エへへへ」

松彦「アハハハハ、身分不相應と云ふ事を知つてゐるか、本當に困つた奴だなア」

萬公「門閥や、財産や、地位や、名望や、そんな物が何になりますか。そんな物を

を以て神聖なる戀愛を制肘せられちや堪りませぬワ、キツと私のものですよ。貴

方だつて、萬公にやるのは惜しいでせうが、そこは部下を愛するといふ神心を以て、私に媒介して下さるでせうなア。否キツと子弟を愛する慈悲深いお心から、周旋をして下さるだらうと固く信じて居ります。刹帝利様だつて、一旦ない者と定めてムつたから、つまり云へば拾ひ者ですワ。さうだから、キツと吾々がお迎へにいつた御褒美として、貴方方の周旋の如何に仍つて、萬公に與へると仰有るでせう。キツと拔目なく、先生、頼みますで……」

ダイヤ「ホホホホ、あのマア萬公さまとやら、御親切に能う云つて下さいます。併し私には既に業に夫がムいます。年は十一才でも女として一人前の心得は持つて居りますからねえ」

萬公「これはしたり、貴方の夫といふのは何方ですか。まさか兄妹同士、そんな馬鹿な事はなさいませう……」

ダイヤ「ハイ、先生様にお願ひ申し、父に掛合つて頂いて、左守司の息子ハルナさまと、二三年したら結婚するやうに願つて頂きたいものでムいます。私はハルナさまが一番好きなのでムいますからねえ」

萬公まんこうは首くびを頻しきりにふり、

萬公まんこう「折角せつかく乍なら、ハルナさまは駄目だめですよ。既に業すでに業すでにカルナ姫ひめといふ立派りっぱな奥おくさまが出来できました。そして貴女あなたとは年としが違ちがふのですからそんな事ことは思おもひ切きつたが宜よろしからう」

ダイヤ「あれマア、ハルナさまとした事ことが、一年いちねんの間にチヤンと奥おくさまを持もたれたのですか。私わたし、どうしませう」

萬公まんこう「ハハハ、さうだから、それ文年だけとしの違ちがふ男をとこにラブしても駄目だめだと云いふのですよ」

ダイヤ「ハルナさまと私わたしと年としが違ちがうといつても、僅わずか十年じふねん許ばかりですよ。貴方あなたは三さん十年じふねんも違ちがふぢやありませんか。そんな方かたと夫婦ふうふうになったら、世間せけんの人ひとがお半長右衛門はんちやうゑもんだと云いつて笑わらひますがな。ホホホホ、あのマアいけ好すかないお顔かほ」

とプリンと背せなか中なかを向むける。

萬公まんこう「ヤア此奴こいつア失敗しくじつた。どうしたら年としが若わかくなるだらうかなア。なぜ二十にじふねん年ねんも後あとから生うまれて来こなかつただらう」

松彦「アハハハハ」

龍彦「オイ萬公、馬鹿な事を云はずに、早くお客さまの御飯の用意をするのだ。」

貴様は之からボーイを命ずる。早く臺所へ行つて禱がけになつて活動せぬかい」

萬公「へー、承知しました。併し、これ文澤山のお客さまだから、萬公一人では

手が廻りませぬ。炊事に女がなくてはなりませんから、一つダイヤさまに手傳つ

て貰ひませうかい。それが厭なら、龍彦さまも水汲みなつとして貰ひませう」

治國「イヤ、松彦、龍彦は大變な御用がある。之から種々の準備を整へホーフス

へ参り、刹帝利様にいろいと御相談に行かねばならぬ。御苦勞乍ら萬公、お前

今日丈一人でやつてくれ。ダイヤ様は女の事でもあり、暫く手傳つて頂けば此方

も都合が好し、お前も喜ぶだらうが、どうも萬公では險難で、さうする譯にも行

かず困つた者だ」

萬公「先生、そんな御心配はいりませぬ、私も男です。滅多に不調法はしませぬ

から、何卒、假令半時でも一緒に仕事をさして下さい。きつい山坂を荊を分けて

往來し、ヤツと此處迄歸つたと思へば、三助をやらされる、又炊事まで命ぜられ

る……といふのだから、チツと御推量下さつてもよささうなものですな」

ダイヤ 妾は山中に於て不便な生活をし乍ら、六人分の炊事をやつて來ました経験がムいます。妾一人が、そんなら炊事場を預りませう。萬公さまはお休み下さいませ」

萬公 滅相もない、お年のいかぬ若い姫様に、コーカー・マスターをさせては、男が立ちませぬ。又刹帝利様に聞えてもすみませぬから、夫婦……オツトドッコイ男女共稼で、コーカー・マスターを勤めませう。ねえ先生、それで差支ありませんまい」

治國 ダイヤ様さへ御承知なればよからう。併しお前は飯炊役、ダイヤ様はバトラーになつて貰はう」

萬公 工工仕方がない。君命に従ふ事に致しませう」

と萬公はいろいろの食料品を集め、炊事に纏がけで取掛つた。ダイヤは火を焚き、茶を沸し、チャンと準備が整うて、膳部を運び、一々毒味を了り座敷に竝べた。之より一同は朝飯を喫し、ゆるゆると山中生活の話や、又は宣傳使の苦勞話や、

愉快な話を交換し、ビクトリア城内の戦争談などを始めて、一時許り面白可笑しく時をうつした。

治國別の内命に仍つて、松彦、龍彦兩人は、衣紋を繕るひ、ホーフスに参入した。内事司のタルマンは二人を叮嚀に向へ、奥の間に通し、茶菓を響應し乍ら、六人の子女の消息を待ち兼た様に尋ね出した。

タルマン「大變にお待ち申して居りましたが、お子様の消息は如何でムいましたか」

龍彦は早速六人を無事に連れ歸つたと云つては、餘り興味が無い、ここは一つ内事司をぢらしてやらうと、徒好の龍彦はワザと心配相な顔をして、ナフキンで唇の唾をふき乍ら、咳拂を七つも八つもつづけ、言ひにくさうにモチモチして揉手をし乍ら、

龍彦「エー、折角、参りましたが、中々以て、容易の事ではありません。夫れは、意外にも深山幽谷で荊棘茂り、鳥も通はないやうな難所でムいましたよ」

タルマン「へー、成程、大變お困りでムいましたらうな。そして御子女は無事

に御歸りになりましたか」

龍彦「サ、そこが、ウン、何です。誠に早、骨を折りましたよ。

月光の友は次第に雪と消え

光明は三日の月のあとへさし

藪醫者は験より變を見せるなり」

タルマン「エ、何と仰せられます。御子女はゐられなかつたのでムいますか」

龍彦「へー、居られるはゐられました。それがサ、中々容易に、ウンと仰有らぬ

ので、猪突槍を以て吾々三人を十重二十重に取圍み、蟻の這ひ出る隙間のなき迄

に、攻め來る其猛烈さ。僅に血路を開いて雲を霞と逃げ歸り候……といふやうな

爲體でムいましたよ。あああ、是非もムいませぬ」

タルマン「向ふは六人さま、十重二十重だとか、蟻も這ひ出る隙間もない……と

か、そんな御冗談仰有らずに、早く吉報を御聞かし頂きたいものでムいます」

松彦はニコニコし乍ら、黙つて二人の問答を聞いてゐる。そして時々「プー」と嘖き出してゐた。タルマンは氣を焦ち、膝をすりよせ乍ら、タルマン「エ、焦らさずに早く言つて下さい。キツと勝利を得られたのでせう」龍彦「吾々三人がヤツと格闘の結果、到底生捕にして歸る譯にも行かず、首をチヨン切つて、漸く凱旋致しました。やがて首實檢に供へませう。毛は熊の如くに顔一面に生えて居りますから、御見違ひのない様にお檢めを願ひます。今治國別さまの館で假令首丈でも疎には出来ませぬから、輿を作つて昇いで参りますからよくお檢め下さいませ」タルマン「左様な事を誰が御願申しましたか、以ての外ほかにの亂暴らんぼう、首計り持つて歸つて何になりませぬか。貴方は人殺の大罪人、これから、何程神徳の高きモンクだと云つても、許す譯には参りませぬ、覺悟をなされ」
と顔色を變へて怒り出した。龍彦は平然として、龍彦「アハハハ、大きな體を引抱へて歸る譯にも行かず、首丈持つて歸れば大變輕便だと思ひ、刹帝利様の意志に従つて、ビクの國家を亂さむとする、惡逆無道

の御子女を亡ぼし歸つたのが、何がお不足で△るか。六人の子供が顔さへ見せてくれさへすれやよいと仰有つたでせう。別に胴體を見せいとも、手足を見せいと仰有らなかつたでせう。さやうな不足は、吾々は聞く耳は持ちませぬ、アハハハハ

タルマンは餘りの事に呆れ果て、眞青な顔をして唇を慄はせ乍ら、恨めしげに龍彦の顔を睨んでゐる。ここへ、レーブ・アン・ルームにあつて、治國別の返辭を待つてゐた、左守右守はどうやら龍彦の聲がする様だと、ドアを排し、廊下を傳うて此場に現はれ、見ればタルマンは顔色土の如くなつて慄うてゐる。二人はニコニコとして笑うてゐた。左守のキュービツトは此體をみて、……ハハア、タルマンの奴、豫言者だ、宣傳使だと威張つてゐるから、懲戒の爲に油を取られてゐるのだ、此奴ア面白い……と思ひ乍ら、三人の前に現はれ來り、左守「今喫煙室に於て様子を聞けば、どうやら、不成功に終つた様子で△います。が、イヤもう何でも結構で△います。アールさまさへ連れて歸つて下さらば、ビクの城中は磐石の如くで△います。ヤ、誠にお骨を折らせました、何卒治國別様

へ宜しくお禮を申して下さい」

松彦「漸くの事で、いろいろと事情を申上げ、お一人丈お連れ申すことに致しました。やがて治國別様が駕籠にお乗せ申して御送りになるでせう、何卒御受取り下さいませ」

左守「有難うムいます。さぞ刹帝利様も満足遊ばす事でせう。そして其お一人と申すのは何方でムいますか」

龍彦は松彦の返答せぬ内に、

龍彦「アイヤ、餘り顔一面に毛が生えてゐるので、男とも女とも兄とも弟共見當がつきませぬ。何だか知りませぬが、エ、一人丈やうやうと引張て歸りました。何卒、よくお調べ下さいませ」

かく話す所へ駕籠に昇がれて萬公が先に立ち、やつて來たのは總領息子のアルであつた。松彦は、

松彦「ヤ、今お歸りになりました。サ、皆さまお迎へ致しませう」

と玄關口に出迎へた。駕籠は玄關口に横づけとなつた。中から又ツと現はれた、

髭をそりおとし、立派な衣装をつけた貴公子は總領息子のアールであつた。タルマン始め左守右守はアツと許りに驚いて、暫し言葉も出なかつた。

治國「皆さま、此方が御總領のアールさまでムいます」

左守右守は俄に嬉し涙がこみ上げて来て、只一言も發し得ず、左右の手を取つて、刹帝利の居間へ案内して行く。タルマンもヤツと胸を撫でおろし、

タルマン「龍彦さま覚えてゐなさい。キツと御禮を申しますから……」
と云ひ乍ら、アールの後に従ひ、奥の間に姿を隠した。治國別は萬公を伴ひ逸早く刹帝利にもあはず、吾住家に残した五人が氣にかかるので歸つて行く。

（大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 松村眞澄録）

第四章 理妻（一三九〇）

刹帝利ビクトリア王を始め、アーチ・ダツチエスのヒルナ姫はアールの歸つて

來たのに狂喜し、いろいろと優しき言葉をかけ、其無事を祝し、且刹帝利はアールの手を固く握り、自分が惡神に誑かされ、最愛の子供を残らず殺害せむとした事の不明を涙と共に謝した。アールは意外に父の心の柔ぎし事や、又吾れを憎み玉ひしは惡神の爲に唆されたる事を悟り、少しも親を怨む心なく、久し振の面會を喜び、父の高恩を謝し、且山中生活の苦しかつた事や、妹が一年前に尋ねて來た事、其外三人の宣傳使が迎へに來てくれた經緯などを細かに物語り、嬉し涙にかきくれた。左守右守を始め内事司のタルマンも死んだ者が歸つて來たやうに喜んで、早速に神殿に拜禮をなし、直會の神酒を頂いて王家の萬歳を祈つた。それから治國別の館へ數多の家來を遣はし、五人の兄妹を城内に迎へ取り、且治國別一同を招待し、祝宴を開き、神恩を感謝した。ヒルナ姫はアールに比ぶれば、親と子程年が違つてゐた。され共アールはヒルナ姫を眞の母の如くに尊敬し、ヒルナ姫も亦アール兄妹を吾子の如くに勞はり、陰になり陽になり、親切を盡した。刹帝利は年老い餘命幾何もなきを悟り、アールをして家を繼がしめ、弟妹五人にはビクの國を六つに分け、各其領分を定め、アールの王家の藩屏となつて國家を

守らしめた。イスにはプリンスを授け、ウエルスにはキングスを授け、エリナ
ンにはカウントを授け、オークスにはヴィコントを授け、ダイヤ姫にはバアロン
を與へ、國の四方に領地を分つて、永らく國家を守らしむる事とした。
先づ第一に兄のアールに妃を迎へる必要が迫つて來た。左守右守は四方に奔走
して適當な配偶を求めたが、どうしてもアールの氣に入る女がない。幾度も候補
者を定めてアールに見せたけれ共、アールは首を左右に振つて之を拒絶するのみ
であつた。而して俄にアールは境遇の變化と食料の變化とに仍つて、身體に變調
を來し、顯要な元の身分になつたものの、やはり窮屈な貴族生活が厭になつてた
まらず、こんな事なら歸つて來るぢやなかつたに、兄妹六人が睦まじう山住居を
して勝手氣儘に獵をして、簡易生活を營みたいものだ……と煩悶を續けて居た。
遂には精神に少し許り異状を來したと見えて、隙ある毎に城内を脱け出で、只一
人田舎をうるつくのを以て樂みとしてゐた。刹帝利や左守右守が何程諫めてもチ
ツとも聞入れなかつた。終には刹帝利も困り果てて治國別に教を請うた。治國別
は暫くアールの好きな様にさしておくがよからうといふ意味を答へた。外ならぬ

治國別の言葉であるから、刹帝利以下の最高幹部連は、アールの好きな儘にして
おいた。アールは立派な服を脱ぎすて、ホーレージ・キヤップを頭に戴き、ベリー
スを被つて、城内を脱け出し、漂然としてビクトル山の麓のパイン林の木陰に獨
り休んでゐる。そして空行く雲を眺め、ああああと溜息をつき乍ら、兔でも通つ
たら獲つてみたいものだと思へてみると、そこへ熊手を持ち、背に籠を負うて枯
松葉を掻きに来た、頑丈な二十歳許りの不細工な女がやつて来た。女はハンナと
云ふ首陀の娘であつた。アールの姿を見て、尊き王子とは知らず、其傍に籠をお
き、枯松葉を頻りに掻き集めて籠に捻ぢ込んでゐる。アールは側へ寄つて、
アール「コレお前はどこの女だか知らぬが、俺にも一つ手傳はしてくれないか、
其熊手を一つかして貰ひたい」
と云つた。ハンナはアールを見て、不思議な顔をし乍ら、
ハンナ「ハイ、お貸し申さぬことはありませんが、一寸見れば貴方はどこ共なし
に威嚴の備はつた御人格、どうも普通のお方とは思へませぬが、なぜ斯様の處に
お一人お出になつて居りますか」

アール「イヤ、俺はそんな尊い者でない。子供の時から手癖が悪うて、親を泣かせ、近所に迷惑をかけ、家を放り出され、行く所がないので、此パインの枝で首でも吊つて死なうかと思ひ、此處迄やつて來たのだ。併し乍らお前が松葉搔きをしてるのを見て、羨くてたまらず、それ故手傳はしてくれないかと頼んだのだ」

ハンナは……何處ともなしに氣品の高い男だなア……と思ひ乍ら、……此人の言ふ事が果して本當ならば誠に氣の毒なものだ、何とかして助けてやる工夫はあるまいか……と、同情心にくれ乍ら、熊手をそこに投ずて、アールの側によつて、ハンナ「モシ、どこのお方が知りませぬが、貴方は夫れ程までに御決心をなさつたのならば、どうです首吊りをやめて、私と一緒に暮す氣はありませぬか、私は賤しい首陀の娘でムいですが、兄が跡をとつてをりますから、親の跡を繼ぐ身でもなし、此様な不細工な女でも嫁入口は澤山に言つて來ますが、どうも私の氣に合はないので皆斷つて居ります」

アール「お前はそれ程澤山嫁入の申込があるのに何故、俺のやうな極道息子のすたれ者と夫婦にならうと云ふのか、どうも合點のいかぬ事を云ふぢやないか」

ハンナ「私は普通の男は嫌です。極道の味も知らず、世間の味も知らない坊ちやん計りでは、到底圓滿な家庭は作れませぬ。夫れよりも十分落ちて命をすてる所まで決心した人なら、世の中の酔いも甘いも知つてるに違ひありません。どうです、捨てる命を存らへて、私と一生暮すお考へはありませぬか。私は此通り體が丈夫でムいますから二人前働きます。假令貴方が病氣になられても困りませぬ。女の方から結婚を申込んで、はしたない奴とお笑ひでせうが、私は貴方のやうなドン底へ墜ちた方と、夫婦になりたいと、朝夕神に念じて居りました。相當に財産も親から分けて貰つて居りますから、メツタに難儀はさせませぬ」

アール「成程お前は感心な女だ。併し随分容貌は悪いのう」

ハンナ「容貌が悪うてお氣に入らねば仕方ありません。併し乍ら貴方もよく考へなさいませ」

アール「イヤ、俺は容貌は決して好まない。お前の様な立派な心を持つてる女が欲しいのだ。俺も今まで澤山な美人を嫁に貰つてくれと、實の所言はれたのだが、何だか氣に入らぬので、内に居つても面白からず、又嫁の話かと、うるさくて堪

らず、此處迄やつて来たのだ。併し、親の財産をスツカリ使ひ果し、おまけに生殖器病を煩ひ、體中に牡丹餅疥癬をかい、誰も彼れも俺の側へはよりつくものはない。それにも關らず澤山嫁人の申込があるのだから困つてゐるのだ。此處へ来て見れば、又前から結婚を申込まれ、毎日日日結婚攻めに會つて、此廣い天地に身をおく所がないのだ。何卒モウ云ふてくれな。私のやうな者を夫に持つた所で末が遂げられず、お前に苦勞をかけねばならぬからなア」

ハンナ「貴方が其様な業病をお煩ひになつてると聞けば、猶更見捨てる譯には行きませぬ。何卒私に世話をさして下さいませ。キツと貞節に仕へますから」

アールはハンナの言葉に……何とマア親切な心の美はしい女があるものだなア……と首を振つて感に打たれてゐた。女は又もや熊手を手にし、枯松葉を集めながら、

ハンナ「モシ貴方、どうしても私の言ふ事が聞けませぬか、私は貴方の美貌に戀着してるのぢやありませんか、貴方の今後のお身の上を案じて此通り熱心に申上げるのですから、何卒ウンと云つて下さい。貴方が何程極道でも業病人でも私は覺

悟の前です。何れ貴方を夫に持つと云へば、親兄弟や親戚が小言を申しませうが、それも覺悟の前です」

と熱心に口説き立てる。アールはこれこそ自分の女房にすべき者だと心に決し乍ら、猶も念の爲に心を試しむと忽ち大きな口をあげ、ワザと涎をたらし乍ら、「あああああ」と唾の眞似をし出した。ハンナは之を見て、俄に心氣興奮し、唾になつたのかなアと、心配し乍ら思ふ様……どこの人かは知らぬが、本當に氣の毒なお方だ。益々自分が身を犠牲にしても此人を助けてやらねばなるまい……と後へまはり、背中を撫でたり、神を祈つたりして一刻も早く病氣全快せむ事を願つた。アールは其間に帶をといひ、松の枝にパツとかけた。女は驚いて抱きとめようとする。アールは聲を限りに、

アール「ヤ、お女中、私の體は疥癬かきだ。お前に傳染ると大變だ」

と叫ぶのを、ハンナは、

ハンナ「イエイエ、何程疥癬が傳染らうが、貴方の命の瀬戸際を、どうして見逃す事が出来ませう」

と剛力がうりきに任せてまか、グツと腰こしの邊あたりを抱だきしめて放はなさぬ。アールは何程なにほどもがいても、女をんなの剛力がうりきを如何いかんともする事ことが出来できなかつた。アールは始めてはじ素性すじやうを明あかさむと思おもひ、アール「イヤ、實じつの所ところは拙者せつしやはビクトリア王わうの長子ちやうしアールと云いふ者ものだ。何卒どうぞ放はなしてくれ。お前まへの美うつくしい心こころは骨身ほねみにこたへた。實じつの所ところは疥癬ひぜんかきでも瘡毒ひえかきでもない」

と事實じじつを述のぶれば、ハンナは驚おどろいて、二三間にさんげん許ばかり飛と下びさり、地ちに頭かしらをすりつけ乍ながら、ハンナ「どこ共ともなしに變かはつたお方かたと存ぞんじましたが、左様さやうな尊たふといお方かたとは知しらず、誠まことに失禮しつれい致いたしました。何卒どうぞ私わたしの罪つみ幾重いくへにも御容赦ごようしやを願ねがひます。畏おそれ多くも女房にようぼうとしてくれなどと、不都合ふつがふな事ことを申まをしてすみませぬ」

と恐おそる恐おそる詫わび入いつた。アールは言葉ことばを改あらためて、アール「ヤ、其方そなたは首陀しゆたの娘むすめとは云いひ乍ながら、實じつに見み上あげた婦人ふじんだ。何卒どうぞ俺わしの女房にようぼうになつてくれまいか、お前まへとならば喜よろこんで一生いっしやうを送おくる事ことが出来できるであらう」

此言葉このことばにハンナは身みを慄ふるはせ乍ながら、

ハンナ「私わたし如ごとき賤いやしき者ものが、どうして左様さやうな勿體もつたいない事ことが出来できませう、何卒どうぞこれ

許りは御容赦を願ひます」

と頻りに首を振つて謝り入る。アールは千言萬語を費やし、漸くにしてハンナを納得させ、手を携へて、嬉しげにホーフスに歸つて來た。

左守司は之を見て大に驚き、口を尖らし目を丸くし乍ら、

「モシ、貴方様は何時も城内を勝手に飛出し遊ばし、御兩親様は大變な御心配をしてゐるのに、チツともお氣が付きませぬか。それに何でゐいますか、左様な賤しい女の手を引いて城内へお歸り遊ばすとは、お氣が違つたのぢやゝいませぬか」

アール「ウン、チツとは氣も違つてゐる。併し乍ら、此氣違ひは發狂者ではない。俺は今ビクトリア城の大黒柱を拾つて來たのだ。これでなくては此國は治まらな

い。何うぢや左守、此女を俺の女房にする様、父上に申上げてくれ」

左守「それは又異なる事を承はります。御粹狂にも程がある。どうして父上が御許しになりませう。サ、早くどつかへ追出しなさりませ」

アール「頑固な父と云ひ、頑固な左守と云ひ、困つた者だなア。貴族だとか平民だとか下らぬ形式に捉はれて、國家の大事を思はぬお前達は實に不忠不義な者だ。

なぜ俺の云ふ事を聞かないのか」

左守「ぢやと申してビクトリア家の名譽にも關係致しますし、又其様な汚い女を后になさいましては、第一貴方様の御權威が地に墮ち、引いては役人共の侮りを受け、どうして國家が治まりませうか、それ計りは何卒御考へ直しを願ひたいものです。丸きり氣違ひの沙汰ぢやムいませぬか」

アール「ウン、俺は氣違ひ、お前は取違ひだ。竹に鶯、梅には雀、それは木違ひ、鳥違ひといふぢやないか、時代の趨勢を考へ、上下一致して天下の經綸を行はねばならぬ刹帝利の身で在り乍ら、下らぬ形式に捉はれて、貴族結婚を唯一の能事としてるやうな事で、どうして國家が治まるか。チツと考へてみよ」

左守「ああ困つた問題が突發したものだ。こんな事を刹帝利様に申上げようものなら何と云つて叱られるか分つたものでない。爲まじきものは宮仕なりけりだ。どうしたらよからうかな」

と雙手を組んで兩眼より涙を垂らしてゐる。

アール「父上やお前のやうな頑固連には俺の精神は分るものでない。兔も角治國

別の宣傳使に裁斷を請う事にしてくれ、治國別様のお言葉なら、いかに頑固な父でも聞くであらう」

左守「成程、然らば仰に従ひ、父上に申上げてても、只一口に突飛ばされますから、之より治國別様のお館へ参つて伺つて参りませう。そして治國別様が可いと仰有れば、刹帝利様に掛合つて頂きませう。何卒それまでは貴方の御居間にお忍びを願ひます、御兩人様」

と言ひ乍ら、足早に玄關口を立出で、治國別の館に急ぎ行く、二人はアールの居間に身を隠しける。

(大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 松村眞澄録)

第五章 萬違(一三九一)

左守は青い面をし乍ら、切りに首を傾け、治國別の館を訪れた。治國別は龍彦、

松彦を伴ひ、ビクトル山の神殿建築の模様を見むとて、監督がてら出て行つた後である。萬公は入口の間に只一人机に凭れて居眠つてゐると、「御免なされませ」と入つて来たのは左守のキュービットであつた。萬公は此聲に驚いて、萬公「あ、左守殿、よくお越し下さいました。何の御用でムいますか、大方縁談

でお越しになつたのでせう、エへへへへ」

左守「お察しの通り、縁談に付いて治國別様に御相談に上りました。治國別様は御宅でムいますか」

萬公「ハイ、今一寸ビクトル山の御普請監督がてら、お越しになりました、やがてお歸りになりませうから、待つてゐて下さい。併し乍ら御不在中は此萬公が全權を行使することになつて居りますから、つまり拙者の意見は先生の意見でムいます。何卒仰有つて下さいませ、随分青いお顔ですな」

左守「イヤもう地異天變、話にも杭にもかからない結婚沙汰が持上りまして、私には判断がつき兼ね、治國別様の御判断を願はうと思ひ、御邪魔を致しました」

萬公は早くも……ダイヤ姫と自分は炊事や膳部係をやつた時、チヨイチヨイ視

線を通はしておいたから、姫さまが駄々をこね出し、頑固な左守が其事でもて餘し、治國別様に御相談に來よつたのだな、ヨシヨシ、不在を幸ひ、此際に頑固爺の頭腦を改造しておかねば、折角の姫様の思召しも畫餅になつて了ふ……と自分の事に取り、ワザとすました顔で、

萬公「地異天變的縁談とは、ソレヤ又何でムいますか、相思の男女が結婚をするについては、別に地位も門閥もへツタクレもあつたものぢやありませんまい」

左守「イヤ、理窟を云へばさうかも知れませぬが、何を云つても一方は刹帝利家の事でムいますから、餘程考へなくてはなりませんまい。未だ王様にも申上げず、先づ治國別様の御意見を伺つた上と、忍んで参りました」

萬公「成程、夫れは御苦勞さまでムいます。刹帝利家に關する事とあれば、ハア、殆ど分りました。男女の地位に付いて非常な懸隔があるから、それで御心配をしてムるのでせう。抑も戀愛と云ふものは古い頭の昔人間が考へた如き、決して劣情なものではありませんせぬよ」

左守「ソレヤよく知つて居ります。戀愛なくては結婚問題は持上らぬ位は、左

守だつて心得てゐます。併し乍ら戀愛は結婚の要素だと言つても、さう無暗に地位も考へず、決行することは出来ませぬ。戀愛がなかつても結婚は立派に成立するものです。毘舍首陀の身分なれば、戀愛至聖論を振廻しても通りませうが、何を云つても一國の城主の體面に拘はる一大事ですから、下々のやうな平易な簡單な譯には参りませぬからなア」

萬公「ソレヤ、ちと、僻論だありませぬか、よく考へて御覽なさい。貴方は結婚問題と戀愛問題と放してゐられるやうですが、左様な無理解な事は、今日の教育を受けた人間には思考する事は出来ませぬ。例へば頭腦はなくても人間は人間でせう。頭腦以外の要素が備はつておれば、いかにも人間に相違ありますまい。併し乍らそれを何うしても立派な人間らしい人間だとは言はれますまい。それと同様に戀愛がなくても法律上の婚姻は、形式として立派に成立することはするでせう。併しそれは眞に男子たり、女子たる者の人格と自由を尊重した精神的意義ある完全な結婚だとは、吾々は斷じて信ずる事は出来ませぬからな」

左守「さう承はれば、さうに違ひありませんが、世の中は思ふ様にいかぬもので、

理論と實地とは違ふものですからなア」

萬公「今は舊道德廢れ、新道德起らずと云ふ混沌時代ですから、非常に青年男女が頭を悩ましてをりますが、時勢に目の醒めた女ならば、キツと戀愛結婚を以て最上の方法とするでせう。私は現代の婦人に同情致します。特にダイヤ姫様などは、時代に目の醒めた方ですよ。私とホン少時でムいましたが、炊事場の立話に、かやうな事を仰有いましたよ。……」

左守「エ、姫様が、どんな事を仰有いましたか、参考の爲に一つ聞かして貰ひたいものですなア」

萬公「サア、聞かして上げない事もありませぬが、イ……此話が落着する迄暫く保留しておきたいものです。互の迷惑になると困ります」

と早くも左守が自分とダイヤ姫の結婚問題に就いて來たものと信じてゐる。

左守「どうか、私も左守として御教育申上げる關係上、一つ聞きたいものですな。何と云つてゐられましたか」

萬公「私と姫様との談話の中に、かふいふお言葉がありました。實に賢明なお姫

さまですよ。今時の婦人はああなくては叶ひませぬワイ。姫様のお言葉に依れば、人間と生活を先づ本質的に、根本的に、第一義的に考へてみなくてはならぬ。何等の偏見もなく、捉はるる所もなしに、人生の眞味を正しく悟つてみなくてはならぬ。互に理解なき結婚といふものは實に人生に於ける罪惡の源泉となるものだ……との結論でムいました。本當に、左守さま、姫様のお言葉の通りであります。せぬか、私は非常に其お説に共鳴したのですよ』

と姫の一口も云はない言葉を甘く、左守に、聞いた様な顔して話してゐる其狡猾さ。左守は……ダイヤ姫さまの事なら、定めてすれつからしだから、年はゆかいでも、其位な事は仰有るだらう……と少しも疑はず、膝を乗り出し、首を前へ突出して、『ハイハイ』と熱心に聞きかけた。萬公はここぞと言はぬ許りに、萬公『そこでダイヤ姫様が仰有るには、……人間としての婦人ならば、すべての缺陷と不備とを見て、避け得らるる丈の害惡は之を排除しようとならぬ。此努力を惜むやうな婦人は卑怯者だ。卑怯者でなければ怠惰者だ、怠惰者でなければ馬鹿者だ……』と云つてゐられましたよ。……かふ云ふ卑怯者や馬鹿者、

怠惰者の絶えない内は世間は一步たり共進む事は出来ない、何事も改造されて行く時機だから、吾々は何事も率先して上下階級の差別を撤廃したい……と、年も似合はず、それはそれは舌端火を吹いてまくしたてられましたよ。私も其お説と辨舌にスツカリ共鳴致しました、實に姫様のお言葉には千鈞の重みがあるだありませぬか。改造のない所には向上も進歩もあるものではない。そんな事では何時まで経つても、天國の門戸はエターナルに開けるものだありませぬ。そして眞善美の光明は遂に地上に輝く事は出来ないでせう」

左守「成程、一應御尤もですが、貴方は何程姫様の説を共鳴なさつたと云つても、宗教家だから、心底からそんな事に耳を傾けらるる方でない、私は信じますが、どうですか」

萬公「宗教家だと云つて、どうして宇宙の眞理を曲げる事が出来ませうか。抑も愛は人間生活の根本要件であり、そして一切宗教の源泉も亦愛から出ているのです。さうだから人心を支配して正しく之を導き得る所のものは勿論禁欲主義のバラモン教や、ウラナイ教の様なものではありません。三五教は其様な古い事は云

ひませぬぞ。三五教は自己否定的な古い道徳でもなく形式でもなく、本當に時代に適應した明かな教でムいます。人間らしき欲求を否定し去る事に仍つて、地上に天國樂園を建設し得るとは、どうしても考へる事は出来ませぬからな。寧ろ人間の欲求を肯定し強調して、而もそれが又同時に自己否定、自己犠牲の精神と全然合一して、吾と非我との間に不調和なきものであらしめねばならぬものだと思ひます。かくの如き心境はどうしても之を愛の世界に見出すより外ないであります。せぬか、愛には上下の隔てもなければ、階級だの、形式だの、財産だの、法律などの假定的なものの容喙を許さない神聖不可犯なものですからな。貴方は、私と姫様との戀愛觀を、要するに先生に願つて、不調ならしめむとする御考へでせう。何程本人以外の者が垣をしたつて、堰けば溢るる堰の水、どつかへ破裂致しますから、そこはよく御考へなさが宜しいでせう」

左守「アハハハハ、イヤ、それや話が違ひますよ。ダイヤ姫様と貴方の事に就いては、まだ一回も話頭に上つた事はありませぬ。随分貴方も自惚心がお強いお方ですな、アハハハハ」

萬公は拍子の抜けたやうな顔をして頭を掻き、

萬公「ヘーン、そんな筈はないのだがなア。あれ程固う約束をしておいたのだもの、ハハア大方恥しいので隠してゐらつしやるのだな。治國別さまにラブしたやうな顔をして、お前さまに談判に來さしたのかな、治國別さまは立派な奥さまがおりますよ、松彦だつて其通り、龍彦だつてどつかにありませう、さうすれば拙者にきまつて居りませうがな」

左守「アハハハハ、ヤアもう萬公さまの自惚には感心致しました。それ丈の馬力がなくては到底宣傳使に伴いて歩く譯には行きますまい。問題がスツカリ間違つてるのですからな」

萬公「問題が間違うと云つても、ここへお出でになつた以上は吾々四人の中でせう。あの荊だらけの山坂を越えて、六人の御兄妹をお伴れ申して歸つたのだから、人情の上から云つても、メツタに外へ嫁入をなさる筈がありますまい」

左守「とても見當が取れませぬから、先づ治國別様が御歸りまで、ここで一服さして貰ひませう。お茶を一つ頂戴致したいものですな」

萬公「常なればお茶を差上げますが、結構な縁談に茶々が入つては約りませぬから、今日は白湯でこらへて貰ひませう、折角の良縁が【フイ】になつては、互の
不利益ですからなア」

左守「ヤア、どうも恐れ入りました。何でも結構でムいます」

萬公は白湯を汲んで手を震はせ乍ら、左守の前に恭しくつき出した。

左守「ヤ、有難うムいます、えらうお手が震うてるぢやありませんか」

萬公「イヤもう震うといふ譯ではありませんが、ダイヤ姫様が私の手をグツと握

つて細い目をし乍ら、お歌ひ遊ばした事を今思ひ出し、ハートに波が打つて、少

し許り全身に動揺を感じたのですよ、エへへへ」

左守「あんな若い娘がどんな歌を歌はれました、一寸聞かして貰ひたいものです」

萬公「天機洩らす可らず、どこ迄も「之れは萬公さま、内證だよ」と仰有つた言

葉を無にする譯には行きませぬから、発表するのは先づやめておきませう。併し

姫様と私との間柄を汲み取つて下さるならば、申上げない事もありませぬ」

左守「お歌の様子に仍つては、左守にも考へがありますから、兔も角聞かして貰

ひたいものです」

萬公「エー、キツと笑ひませぬか、……否立腹しちやなりませぬよ。何と云つても情のこもつた歌ですからな。貴方のやうなお年よりはチツと解しにくいかも知れませぬが、此萬公の鋭敏な頭脳には電氣に打たれやうに感じましたよ。マア澤山の歌の中で一二を申しますれば、ザツと左の通りです」

とダイヤ姫が歌つた事もない歌を急造して歌ひ始めた。

萬公「戀着の南風に

いとかわむばしき帆を上げて

漂渺たる大海原を

遠く遠く

戀しき君を乗せ行く

へへへへへ

果てしも知らぬ戀の海

愛あいの船路ふなぢのいや永ながく

いと遠とほく

うら紫むらむらさきの

潮うしほの歌うたのゆらぎにとけてゆく

戀こひに縛もつれし吾わが思おもひ

花はな爛漫らんまんと咲さき匂におふ

戀こひの泉いづみのそのほとり

うつす姿すがたは萬まん公こうさま

花はなを争あらそふダイヤ姫ひめ

晴はれて添そふ日ひを松まつの下した。

へへへへへ、てな事ことを仰おつしやりましたよ。どうです、これでも兩りやうにん人の心こころが汲くみ取とられ

ませぬかな

左守さもり「八八八八八、大分だいぶんに陽氣やうきがポカポカするので春情しゅんじやうがあふれて來きたとみえま

すな……ヘン馬鹿にして下さるな。黙つて聞いてをれば、ようマア、モンクの身として左様なウソが言はれますな、姫様に何もかも聞いてありますよ。姫様の夫に持ちたいと仰有るのは龍彦さまです。併しこれも治國別様に先日お尋ねした所が、お許しにならなかつたので、これは駄目でした。お前さまはてんで問題になつて居りませぬがな。性欲を抑制する爲に臭「ボツ」でもお呑みになつたらどうですか、それで足らねばルタ・グレベオレンスク草か、但は芥子が唐辛をおあがりなさい。春駒があれば出しては、治國別さまも大變御迷惑だらうから、それが厭なら、淡泊な食物か、多量なアルコールでも飲めばキツと抑制出来ますよ。ア

八八八八

萬公はクワツと怒り、
萬公「コレヤ爺、何程左守だとして偉相に言ふな、ドタマの古い男だなア、お前達
が今日斯うして安全に暮してるのは、皆俺の先生のお蔭だぞ。先生の御恩を覺え
てるのなら、なぜ最愛の弟子を嘲弄するのだ。男の鼻を折らうと致しても、いつ
かないつかな折られるやうな萬公ぢやないぞ」

左守「イヤ實に失禮な事を申しました。何分老耄れて居りますので、お氣に障ることゝがムいませうなれど、何卒御許し下さいませ」

萬公「お前達の様な老耄は戀愛や情欲の如何なるものかと云ふ事は分るまい。それだからそんな残酷な無味乾燥的な挨拶をするのだ。ちとお前も性欲を増進させて、戀愛の眞味を味はひなさい。玉葱に薤、牛蒡に人參、オランダ三つ葉に魚肉、牡蠣に牛肉、アヒルの焼肉を精だして食つて御覽、そすれば青春の血に燃ゆる青年男女の心裡状態もちト分るだらう。それ丈食つても效能がなければ、カンタリチンを呑むかストリキニーネか、或はセンソ、ヨヒンビン、或は臭化金か鉛製の白粉の匂ひを嗅ぐとキツと性欲が増進して来る。そして少量のアルコールを興奮劑として呑むのだ」

としつぺ返しに性欲増進劑を竝べ立て、擲掬つてみた。

左守「ハハハハ八八八八それではチツと鉛製の白粉の臭でもかいで若やがうかなア」と話してゐる所へ治國別は松彦、龍彦を伴い、門口から突然這入つて來た。

治國「ヤア、左守殿、よく來て下さいました。不在でさぞ不都合でムいましたら

う

左守「イエイエ決して決して、エライ御厄介に預かつて居ります」

治國「どうも萬公が失禮な事を申上げましてすみませぬ。此男は一寸發情期に向

つて居りますから、あの通り目が血走つて居ります。どうかお氣にさへられない

やうに願ひます。アハハハハ」

萬公「先生、御歸りイ、大變お早うムいましたな」

治國「ウン、せうもないことを言つてはなりませんぞ」

萬公「妾もない所か、至つて微妻に渡り婦人論を妾妻にまくし立てて居つた所で

す。此爺さまは丸で枯木寒巖的の方ですから、どうしても若い者とはバツが合ひ

ませぬ」

龍彦「ハハハハ萬公、又自惚をしよつたな、いいかげんに夢をさまさぬか」

萬公「ヘン、自分のラブを先生に茶々入れられただないか、チヤンとそんなこた、

此萬公がダイヤ姫さまから聞いているのだ。ヘン、濟みませぬな」

龍彦「ハハハハ、サ、松彦さま、ここは萬公に任しておいて、左守の司の御接待

に奥へ参りませう」

松彦は「ハイ」と答へて治國別の居間に進み行く。

(大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 松村眞澄録)

第六章 執念(一三九二)

左守は治國別の居間に進み、襖を密閉して、松彦、龍彦と共にアールの結婚問題につき、聲を潜めて意見を聞かむと、有りし顛末を物語つた。

左守「治國別様、誠に心配が出来ました。何を云つても一方は刹帝利の家、一方は素性の低い首陀でムいますから、何うしても之は體面上成立させる事は出来なからうと存じますが、如何でムいませうかな」

治國「成程、それはお困りでせう、何とか考へねばなりません。併し乍ら此戀愛關係計りは、到底如何なる權威を以てしても制止することは出来ません。凡

て愛なるものは自己を放棄することに依つて、却て自己を主張してゐるものですから、愛の終局に達した時は、自己の地位や財産などを構ふものではない、實に猛烈なものですから。其戀愛が益々嵩じて強烈の極度に達する時は、自己の生命も惜まずに喜んで投出すに至るものですから、此問題については何程宣傳使だとして力は及びますまい。國家を愛するが爲に、主君を愛するが爲に、又は金錢を愛するが爲に、全く他を顧みずして生命を投げ出す者があるのは、世間に珍らしくない例で△います。殊に燃ゆるが如き宗教信念の爲に、神の愛の祭壇に生命を捧げて悔いざる殉教者の如きも、殆ど戀愛と同じやうなものです。此強烈なる戀愛を目して狹隘なる自己的行爲だとのみ非難する事は出来ませぬ。愛の度の強烈なるに比べて益々集中的となることを免がれませぬ。従つて戀愛に於てそれが最も狹隘らしく見えるのは、たまたま戀愛が他の如何なる愛よりも強烈に集中的でもあり、熾熱の最高度に達するものを證して居ります。此兩人の戀は殉教者が教に殉じて悔いざると同様の心境に立つてゐるのですから、可る成く穩かに治めなさつたが得策だと考へます』

萬公は襖の外から、様子如何にと耳を傾けて立聞をしてゐたが、治國別の答辨を聞いて、……何ともなしに芳ばしい言葉だ。そしてハツキリ分らぬけれど、面だとか首陀だとか言ふ言葉が聞えたからは、ヤツパリ自分の事に違ひない。治國別さまも偉いワイ、ヤツパリ俺の鬚眉をして下さる……と打ち喜び乍ら、尚も耳をすまして聞いてゐる。話はだんだん聲が低くなりつつ進んでゐる。萬公は襖の外に自分が立つてゐるのを、何時の間にか忘れて了ひ、五寸許り襖をあけて又ツと顔を出した。されど四人は頭を一緒に鳩めて、一生懸命に此問題に頭を痛めてゐるので、萬公が覗いてるのに氣がつかなくつた。萬公はソツと龍彦の後ににじり寄り、俯いて作り聲をし乍ら、女の優しい聲で、

萬公「戀愛の心境に於てのみ、人間は最も完全なる人であり得るのです。それに一生の間、一度も戀を味はつた事のないやうな人間、又終身全く異性に接しないやうな人間には、人として必ずどこかに大なる缺陷のあるものですよ。ねえ治國別様、一切の人間愛の源泉が性欲にあるのは、開闢以來の神律でせう、性欲がなければ戀愛はありませぬ。戀愛がなければ一切の愛なる者はありませぬよ」

治國別一同は俄に妙な聲がして來たと、一度に顔を上げて見れば、龍彦の後に小さくなつて萬公が慄うてゐる。左守は早くも自分の目の前に萬公の姿を見て、左守「オツホホホ、萬公さまが秘密會議の席上へおみえになつて居ります。これ萬公さま御心配なさいますな。決してお前さまのことぢやありません。治國「オイ萬公さま、何だ、妙な女の聲を出したぢやないか。なぜあちらに番をしてゐないのか」

萬公「ハイ、何だか存じませぬが、ダイヤ姫さまが私にパツとのり憑り、こんな所へ引摺つて來たのです。そしてあんな優しい聲で何だか仰有いました」

治國「馬鹿に致すな、サ、早く彼方へ行け、グツグツしてゐると尻尾が見えるぞ」萬公は不承無承に後ふり返りふり返り表へ厭相に出でて行く。

治國「八八八、左守さま、困つたものですよ。彼奴は此頃春情立つて居りますので、困りますよ。併しアールさまの結婚問題は大體に於て私は賛成致します。何卒其處は刹帝利様によく取持つて、此話をつけて上げて下さい」

左守は案外な治國別の挨拶に肝を潰し乍ら、萬一刹帝利が不服を稱へられた時

は、治國別さまを頭にふりかざし、此縁談を結ぶより仕方あるまいと決心し乍ら、
叮嚀に禮を述べ、歸つて行く。

後に治國別は萬公を近く招き、

治國「萬公、お前は左守司を相手に大變吹いてみたぢやないか。チツと心得て貰
はぬと俺達の顔に係はるぢやないか」

萬公「へー、そらさうでせうが何と云つても一生一代の私に取つて大問題ですか
ら、チツとは火花も散らしたでせう。何うです、都合好く話をして下さいました
かな」

治國「ウーン」

龍彦「オイ萬公、先生が千言萬語を費し、お前の爲に非常に斡旋の勞をとられた
が、肝心の所へ襖をあけて飛び出し、ダイヤ様の聲色を使つたり致すものだから、
左守司もたうとう愛想をつかし……見下げ果てたる男だ。何程姫様がラブされて
も私の目の黒い内は此縁談は結ばせない。本當に下劣な人格者だ……と云つて、
愛想をつかして歸つて了つた。それで虻蜂取らずになつて了つた。貴様も下劣な

事をしたものだなア」

萬公「ヤア、其奴は困つた。併し乍ら當人と當人との精神が結合してゐるのだから、誰が何と云つても大丈夫だ。龍彦さま安心して下さい、キツと、コリヤ、早かれ遅かれ成功しますからなア」

龍彦「お前、妻君を貰うてどうする心算だ。先生は吾々と、此お宮が落成と共に、黄金山に向つてお越しになるのだから、貴様もお伴をせねばなるまい。あんな子供を女房だと言つて伴れて行く事は許されまい。貴様は宣傳使のお伴はやめる心算かなア」

萬公「妻君を持つたが爲に、宣傳使のお伴が出来ぬと云う事があるかい、よく考へてみよ、先生だつて、松彦さまだつて皆立派な奥さまがあるぢやないか。俺に妻君があるからと云つてお伴をささぬと云ふ事があるものか、そらチト得手勝手だ。貴様の悋氣で言ふのだらう」

松彦「アハハハ、オイ萬公、お門が違ふのだ。お前の話だない、アールさまの結婚問題でお越しになつたのだから心配するな。そして此龍彦の云ふ事は嘘だよ。

お前まへが餘あまり逆さか上のぼせてゐるから擲から掬かはれるのだ」

萬公まんこう「これは怪けしからぬ、天國てんごく迄まで探險たんけんした龍彦たつひことあるものが、嘘うそを云いつてすむか。

オイ龍彦たつひこ、どうだ。本音ほんねを吹ふけ、返答へんたふ次第しだいに仍よつて俺おれにも考かんへがある」

龍彦たつひこ「考かんへがあるとは、何どうすると云いふのだ。俺おれが嘘うそを云いつたと云いつて、貴様きさまは

せめるが、貴様きさまも隨分ずいぶん左守さもり司のかみに歌迄うたまでうたつて、上手じやうずに嘘うそを竝ならべ、内兜うちかぶとを見みすかさ

れ、屁古へこた垂たれたでないか」

萬公まんこう「ウーン、ソラさうだ。そんならモウ、此奴こいつア帳消ちやうけしにしよう。併しかしアール

さまの結婚けつこん問題もんだいとは、一方いつぱうは誰たれだ。一寸ちよつと聞きかしてくれないか」

龍彦たつひこ「餘あまりハンナ……りせぬ話はなしだが、縁えんは何どうやらアールと見みえるワイ、アハハ

ハハ。萬公まんこうお前まへも熱心ねつしんが届とどいたら、又またお菊きくと夫婦ふうふになれるかも知しれぬから、餘あまり

落膽らくたんせず、黄金山わうごんざんの御用ごようがすむ迄まで、女をんなの事ことは云いはないやうにしたらどうだ」

萬公まんこう「ヘン、馬鹿ばかにして貰もらふまいかい。お菊きくなんて、古めかしいワ、俺おれは何どうし

てもダイヤ姫ひめだ。一番いちばんがけに俺おれが手てをかけて助たすけた女をんなだからな。どうしても向むかふ

は俺おれに對たいしては、何者なにものかが殘のこつてゐるのだ。それをば無下むげに放はう棄きすると云いふ事ことは、

男として人情を辨へぬと云ふものだから、假令三年先でも十年先でも構はぬ、男の一心岩でもつきぬく程の大金剛心を以て、どこ迄もやりぬく心算だ」

龍彦「何とエライ野心を起したものだア、其しやつ面で、ダイヤ姫のバチユウンカ（旦那）にならうとは餘り蟲が好すぎるぞ。そんな事を思ふよりも、なぜ神様の信仰を勵まないのか」

萬公「神様は神様だ。神の愛と人の愛とは又別だ、神の地位に立てば神の愛、人の地位に立てば人の愛を完全に遂行するのが人間の道だ。一寸先生、俄に便が催しましたから失禮致します」

と萬公は此場を外し、裏口から左守司の後を逐うて、抜け道から走つて行く。左守司は老の足許トボトボと杖を力に漸く城門前の馬場に着いた。萬公はチヤンと先へ廻つて、

萬公「ヤア之れは左守様、遠方の所御苦勞で△いました。エエ承はりますれば、アール様と、ハンナとかいふお方との御結婚がとこのうたやうな鹽梅で、さぞさぞ貴方も御骨折で△います。人間は一生に一度は何うしても仲介人をせなくて

は、人間の役がすまぬと云う事ですが、それは普通の人間の事、何と云つてもビク一國の左守様、到底一人や二人の仲介人では、神様に對し御責任がすみすまい。ついては六人の御兄妹様、皆貴方が御仲介人を遊ばすに違ひムいますまい。何卒ダイヤ姫様の御結婚丈は、まだお年も若いなり、どこから誰が何と云つて來まして、何卒取合ないやうにしておいて下さいませ。それ丈神勅に仍つて、ソツと萬公が御注意を申しておきます」

左守「アハハハ、宜しい宜しい、まだ年も若いなり、又其時は其時の風が吹くでせう。私はモウ此御結婚が纏まつたら、縁談の仲介人は之れぎり御斷り申す心算だ。こんな心配な事はないからなア」

と體よくつつ放し、サツサと門を潛り入る。萬公は後姿を見送り、ポカンとして口をあけたままテレ臭いやうな顔して立つてゐる。

治國別は萬公の便所へ行くと云つて出たきり、どこにも姿が見えぬので、……大方左守の後を逐うて、せうもない事を頼みに行つたのではあらうまいか、困つた事だ、コレヤ誰か行つて貰はねばなるまい……と松彦をソツと招き耳打した。

松彦は一生懸命にビクトリア城を指して駆け出し、門前に行つて見ると、萬公が奴拍子のぬけた顔して、烏や鳶の中空に舞うてゐるのをポカンと眺めてゐる。松彦は足音を忍ばせ萬公の側によつて、『オイ』と一聲、肩に手をかけて二つ三つゆすつた。萬公は吃驚して、

萬公『誰ぢやい、人をおどかしやがつて……』

と振り返りみれば松彦であつた。

松彦『オイ萬公、偉い遠い雪隠だなア』

萬公『ナア二、別に遠い事もありません、雪隠の窓から覗いて居つたら、鳶と烏がつるんでをつたので、此奴、妙な事だなア、大方刹帝利の娘と首陀の息子とが婚禮をする前兆だと思つたものですから、突止めやうとここ迄やつて來た所、たうとうここでパツと放れ、あの通り中空を翔つてをるのですよ。何とマア不思議な事があるものですか』

松彦『馬鹿云ふな、鳶と烏がさかるといふ事があるかい』

萬公『サ、それが不思議だから、かうして見てゐるのです。天がかうして標本を

見せてる以上は、キツと首陀の息子に刹帝利の娘が結婚を申込み、目出たく合衾の式をあげるやうになるかも知れませぬで。松彦さま、お前さまは立派な奥さまがあるから結婚問題に付いては門外漢だ。私は今研究中だから邪魔をしないやうにして下さい。既婚者と未婚者と同一に扱つちや困りますからな」

松彦「エエ困つた男だなア。お前はそんな事を云つて、左守の後を追ひ、恥をかかされたのだらう、吾々宣傳使一行の好い面汚しだ。これから暇をやるから、小北山へなと歸つて、お菊さまの弄物にでもなつて来い。治國別さまが、只今限り師弟の縁を切ると云つて、大變に御立腹だぞ」

萬公「ああどうも粹の利かぬ先生についてみると、面白くないなア。併し乍らこんな所でつつ放されちや、こつちも男が立たず、マア辛抱して、黄金山迄お伴をさして頂かうかなア」

松彦「ソレヤならぬ、どうしてもお前は師弟の縁を切ると、一旦仰有つたからは、何と云つても駄目だ、サ、ここに旅費を預かつて来たから、之を持って小北山迄歸れ」

萬公「龍彦の奴、甘く先生の喉の下へ這入りやがつて、俺の戀人をせしめやうと企んでゐるのだなア、さうだらう。萬公さまが居ると一寸都合が悪いから……」

松彦「馬鹿を云ふな、龍彦はそんな男ぢやないぞ。清淨潔白な宣傳使だ。御用の途中に女に目をくれるやうな腐れ男ぢやない。そんな事をいうと龍彦に氣の毒でたまらないワイ。自分の卑しい心を土臺にして人の心を忖度しようとは、譯が分らぬにも程があるぢやないか」

萬公「ヘン、仰有いますわい、治國別の貴方は弟なり、龍彦さまは義理の弟、兄弟三人が肚を合して、他人の萬公さまを體よく排斥する心算だなア。口で立派な事を云つても、ヤツパリ身贖をなさると見えるワイ。ドーレ、之から齋苑の館へ歸つてお前等三人の不公平な處置を一切合切陳情するから、其心算でをれ。こんな旅費は要らぬワイ」

と松彦の渡した金を芝生の上に投げつけてしまった。松彦は身贖すると言はれて大に弱り、一應治國別に頼んで再び萬公の罪を許して頂き、黄金山まで御用のお伴にさしてやらうと決心し、いろいろと宿めて萬公をたらしつ、賺しつ、治國

別の館へ連れ歸る事となつた。そして萬公は治國別の懇篤なる訓戒に仍つて、ダイヤ姫に對する執着の念をやつと斷ち切る事を得たりける。
(大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 松村眞澄録)

第二篇 戀愛無涯

第七章 婚談(一三九三)

刹帝利ビクトリア王はフェザーベッドの上に横たはり、ヒルナ姫に足を揉ませ休んでゐた。何分老年の上に嬉しい事や、恐ろしい事等が一度に出て來たので體がグツタリと弱り半病人の如き有様で、どこともなく體が痛むので休養してゐた。

そして世繼のアールが此頃ソハソハとして城内に居らず、臣下の目を忍んで一人
郊外に出で、日が暮れてから歸つて来てはシュナツプスを呷り、酔うては大聲を
張り上げ近侍の役人共を手古摺らせる等の事が刹帝利の心を痛めた大原因となつ
てゐる。

かかる處へ左守のキュービットは衣紋を繕ひ拜謁を乞うた。刹帝利は左守の伺
ひと聞いて直ちに之を許した。左守はフェザーベッドの側近く進み寄り、兩手を
ついて、

左守「申上げます」

刹帝利「左守、何事だ。常に變つて其方の様子、何か又變事が突發したのではない
か」

左守「ハイ、王様に申上げたら、嘸お驚き遊ばすでムりませうが、アール様は人
もあらうに卑しきサーフの娘ハンナとやら云ふ者をホーフスに引入れ、「何うし
ても此女でなければ結婚はしない。そして萬一父が之をお聞届けなくば、城内を
脱出し山獵師となつて田園生活を送る」と駄々を捏られますので、此老人も大變

に心配を致しました。如何取計らつたら宜しうムりませうかな」

刹帝利は左守の意外の注進に驚いて、ベッドを下り火鉢の前に端座し乍ら、

刹帝利「嗚呼、ビクトリア王家も最早終末だ。肝腎の長子がサーフの娘を女房に持

ちたいと云ふ様になつては、最早貴族も末路だ。如何したら宜からうかなア」

と雙手を組んで思案の態、ヒルナ姫は側より手をついて、

ヒルナ「刹帝利様、さうお驚きには及びますまい。如何にアール様が耕奴の娘を

お娶りになつた所で、家庭が圓満に治まり、國家が太平に治まれば宜いぢやムリ

ませぬか。妾だつて腰元が拔摺され、尊き貴方の御見出しによつてアーチ・ダツ

チエスに拔摺されたぢやありませんか。アールさまの結婚問題を御心配遊ばすな

らば、先づ刹帝利様から妾を放逐遊ばさねばなりませんまい」

刹帝利「うん、さうだな。親から手本を見せておいて吾子を責むる譯にも行くまい。

いや如何なり行くも因縁だ。左守、アールの申す通りにしてやつて呉れ。さうし

て一應、治國別の宣傳使に御相談をせなくてはなるまいぞや」

左守は案に相違しヤツと胸を撫で下ろし、

左守「實の所は治國別様へお伺ひをして参りました所、治國別様のお言葉では、なるべく此結婚は整へたがよい、との事でムります」

刹帝「宣傳使のお言葉とあれば大丈夫だらう。善は急げだ、一事も早く倅に此由を傳へて呉れ」

左守「實に有難き君の仰せ、嘸アール様も御満足に思召すでムりませう。之で郊外散歩もお止まりになるでせう。左様ならば之からお使に行つて参ります。何分宜しう、吾君様、ヒルナ姫様、お願い申します」

と欣々として此場を下がり行く。

アールの居間にはハンナと二人、いろいろの話が初まつてゐた。

ハンナ「もし、アール様、貴方は何と仰有つて下さいましても御兩親様を始め頑迷固陋な老臣共が澤山ゐられますれば、屹度此話は駄目でムりませう。何卒そんな事を仰有らずにお暇を下さいませ。そして貴方はビクトリア王の世繼としてビク一國に君臨し相當の奥様を迎へて安樂に世をお送りなさる様お願い致します」

アール「エー、最前も云ふ通り、私は永らくの間山住居をし、放縱な生活に慣れ

て来たのだから、斯様な窮屈な貴族生活は到底堪へきれない。萬一其方と添ふ事が出来なければ私はここを脱け出して山林に入り簡易生活を送る考へだ。何卒そんな心細い事云はずに俺の云ふ事を聞いて呉れ。頼みだから……」

ハンナ「私の様な耕奴の娘が一國の王様になるお方を墮落させたと云はれては申譯がムりませぬ。出来る事ならばお小間使になりとお使ひ下さいまして此縁談だけは何處迄もお許し下さいませ。然し乍ら終身貴方のお側で御用をさして頂きますから……」

アール「私は刹帝利だの、淨行だの、毘舍、首陀等と、そんな區別をつける虚偽な社會が嫌になつたのだ。それで純朴のサーフの娘のお前と如何しても結婚をして見たいのだ。そして人間の作つた不自然な階級制度を打破し、上下一致、四民平等の政事をして見たいのだ。それが出来なければ私は現代に生存の希望はない」

ハンナ「そこ迄仰有つて下さるのならば私はお言葉に甘へて従ひませう。然し乍ら御兩親に背きなさつて迄決行なさる考へですか。さうすればもはや此城内へ止まる事は出来ずまい。私の様な者を貴方の妻にお許し下さる筈はありません」

アール「そら、さうだ。私も其覺悟はしてゐる。さア、之からソツと裏門から脱け出し、山林に入つてお前と簡易生活を樂しまうぢやないか。照國山には私が長く住まつてゐた古巢がある。そこへ行けばどうなりかうなり生活が出来るから……」

ハンナ「そんなら仕方ありません。お伴を致しませう」

アール「ヤ、早速の承知、満足に思ふ。さア早く旅の用意をしよう」

と二人は一生懸命に城内を脱け出す用意に取りかかつてゐた。そこへ左守は現はれ來り、

左守「御免なさいませ。アール様、一寸貴方にお父さまのお言葉をお傳へ申し度いと思ひ參りました。又足装束を遊ばして郊外散歩にでもお出ましになるのですか。郊外散歩にしては大變なお準備ぢやありませんか」

アール「左守殿、實の所は私はここにゐると色々の女を勧められ氣に合はぬ女房を持つのが辛いから、何處かへ脱け出す心算で居つたのだ。何卒頼みだから見逃して呉れ」

左守「いや、それはなりません。今結婚問題の持上った最中、そして貴方はここを出られてはなりません。國家のため、王家のため、何處迄も刹帝利の後を繼いで下さらねばならぬのです」

アール「さアその結婚問題が氣に入らないので、脱け出さうと云ふのぢやないか。私があなくてもまだ四人の弟がある。その弟でいかなければ、國民の中から立派な人間を選び出して刹帝利の後を繼がせばよいぢやないか。何も自分が後を繼がねばならぬ神の命令でもあるまい。それよりも私はここに居る此女と山林に入り簡易生活を樂しむつもりだ」

左守「若旦那様、御心配遊ばしますな。此左守が東奔西走の結果、治國別様やヒルナ姫のお骨折によつて到頭刹帝利様のお心を動かし、ハンナ様と御夫婦とおなり遊ばす様にお話がきまりましたので御報告に參つたのです」

アール「うん、さうか、それは頑固な父に似ずよくまア開けたものだな。ヤツパリ之も時節の力だらう。併し乍らお前も一寸談判をして貰はねばならぬ事がある。それは外でもない、自由自在に夫婦が手に手をとつて城外の散歩をさして貰へる

か、それもならぬと云ふのなら俺はこれから、此處を飛び出し田園生活を續ける
覺悟だから」

左守「そんな事は御心配なさいますな。大丈夫でムります。屹度私が取もつて自
由自在に御行動の出来る様に致しませう」

アール「父の證言を得て置かなくては、又後からゴテゴテ干渉されると困るから
な」

左守「決して決して左様な御心配は御無用です。さア、早く、お父上が待つて居
られます。お二人共お居間へお越しを願ひます。治國別様の方へも使ひを立てて

おきましたから、直お越しになるでせう」

アール「アアそんならお目にかからうかな。これハンナ、お前は私について來る
かな」

ハンナ「ハイ、如何なる處へもお伴致します。卑しき妾の身、畏れ多うムります
が、貴方に附屬致した以上は、影法師の如く何處迄も跟いて参りませう」

左守司はヤツと安心したものの如く顔色を和げ、二人の先に立つて刹帝利の居

間に誘ひ行く。

（大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 北村隆光録）

第八章 祝筵（一三九四）

ビクトリア城の客殿には刹帝利、ヒルナ姫を始め治國別の一行、及び内事司のタルマン、左守、右守を始めハルナ、カルナ姫、並びに數多の役員が列を正し、結婚式が行はれた。此事誰云ふとなく城下に擴がり、寄ると觸るとレコード破りの結婚だと云つて、話の花が長屋の裏迄咲いてゐた。さうして政治大改革の象徴だと國民一同に期待されたのである。ここに治國別の媒介にて神前結婚の式も恙なく相濟んだ。

それから刹帝利、ヒルナ姫は治國別に厚く禮を述べ吾居間に歸つた。後に新夫婦を始め一同の祝宴が開かれた。

治國別は祝歌を歌ふ。

治國別 神代の昔伊邪那岐の皇大神は伊邪那美の

神と諸共高天原にて 天の御柱巡り會ひ

妹背の道を結びまし 山川草木の神までも

完全に委曲に生み玉ひ 此世を安く美はしく

造り給ひし雄々しさよ その神術に習ひまし

ビクトリア城の奥の間で 時代に目覺めたアールさま

上下の障壁撤回し 耕奴の家に生れます

ハンナの姫と合衾の 式を擧げさせ玉ひしは

之ぞ全く天地の 尊き神の御心に

かなひ奉りし吉例ぞ 尊き卑しき差別をば

神の御子たる人草に つけて待遇に差別をば

作ると云ふは皇神の 心を知らぬ曲業ぞ

一陽來復時臻いちやうらいふくとときいたり 至仁至愛の大神しじんしあいのおほかみの

大御心のそのまおほみこころまに 妹背の道いもせのみちを開ひらきまし

國人等くにびとたちに其範そのはんを 示しめさせ玉たまふ尊たふとさよ

かくなる上うへは國民くにたみは 王わうをば誠まことの親おやとなし

主あるじと崇あがめ師しとなして 心の底こころより眞心まじこころを

捧ささげて仕つかへまつるべし 神かみが表おもてに現あらはれて

善ぜんと惡あくとを立別たてわける 此世このよを造つくりし神直日かむなほひ

心こころも廣ひろき大直日おほなほひ 只何事ただなにことも人の世ひとよは

直日なほひに見直みなほし聞直ききなほし 世よの過あやまちは宣のり直なほす

皇大神すめおほかみの御前おんまへに 今いままで道みちに違たがひたる

形式けいしき差別さへつを撤回てつくわいし 上下心じやうげこころを一ひとつにし

御國みくにのために國民くにたみが 力を協あはせ心こころをば

一ひとつになして君きみの邊へを 彌いやとこしへ永久たのに樂たのしみて

守まもり仕つかへむ惟神かむながら 神かみは嘸さぞさぞ々このしき此式このしきを

諾うべなひまして永久とこしへに 妹背いもせの道みちを守りまし

ビクの國くにをば彌榮いやさかに 榮さかえ賑にぎはせ玉たまふべし

ああ惟かむながら神々かむながら々々 神かみの御前みまへに誠心まごころを

捧ささげて祝いはひ奉たてまつる

左守さもりの司かみは金扇きんせんを開ひらき自みづから踊をどり自みづから謠うたふ。

左守さもり（謠曲えつきよく） 『ああ有難ありがたや尊たふとやな、掛卷かけまくも綾あやに畏かしこき天地あめつちの、皇大神すめおほがみの神勅みこともて、
ビクの國くにに鎮しづまり居ゐます、刹帝利せつていり、ビクトリア王わうの、初はじめての御子みこと在あれませる、
王子わうじアールの君きみに、耕奴かうどの家いへに生うまれ玉たまひし、心雄こころを々々しき才女くわしめと、鴛鴦をしの衾ふすまの永久とこしへ
に、睦むつみ親したしみ妹いもと背せの、道みちを開ひらき玉たまひたる、これの御式みのりの尊たふとさよ。假令たとへ首陀しゆだの
家いへに生うまれたりとも、誠まことに明あかき賢女さかしめを、娶めとらせ玉たまふ若君わかぎみは、天地あめつち開ひらけし其時そのときより、
例ためしもあらぬ珍うづの御子みこ、賢さかしき御子みこに在ましまして、上かみと下しもとの隔へだてを絶たち、下國しもくに民たみを
憐あはれみまし、美うるはしき政まつりごとを開ひらかせ玉たまふ、端緒いとぐちぞと左守さもりの司かみを始はじめとし、右守うもりの司かみは云

ふも更さら、百ももの司つかさに至いたるまで、今日けふの芽出度めでたき御式みのりをば、仰あふぎ喜よろこび拍手かしはでの聲こゑも賑にぎはし
く、その喜よろこびは天地あめつちに、響ひびき渡りわたりて大空おほぞらの、雲くもをつきぬき和田わだの原はら、水底みなそこ深く響ひび
き渡りわたり、四方よもやも八方もの國くにの内うち外とくま隈まもなく、此新このあたしき妹いもと背せの御契おんちぎりを、仰あふがぬものぞ
なかるべし。實げにも芽出度めでたき君きみが代よの、千代ちよ萬代よろづよも極きはみなく、鶴つるは御空みそらに舞まひ遊あそ
び、龜かめは御池おいけに浮うかびつつ、君きみが幾代いくよを祝ことほぎて、仕つかへまつるぞ芽出度めでたけれ。朝日あさひは
照てるとも曇くもるとも、月つきは盈みつとも虧かくるとも、天てんは地ちとなり地ちは天てんとなるとも、
君きみが誠まことは幾千代いくちよも、變かはらせ玉たまふ事ことぞあるべき。實げにも尊たふとき三五あななひの、神かみの教をしへに仕つかへ
ます、御空みそらも清きよく治國はるくに別わけの、珍うづの宣傳せんでん使し、二人ふたりの仲なかに立たたせ玉たまひ、神代かみよの例ためしその
ままに、婚嫁とつぎの道みちを新あたらしく、始はじめ玉たまひし尊たふとさよ、神かみの御稜威みいづも高砂たかさこの、尾上をのへの松まつ
の友とも白髮しらが、積つもる深雪みゆきの何處どこ迄までも、溶とけずにあれや妹いもと背せの道みち、ああ惟かむながら神かむながら々々、
恩賴みたまのふゆを喜よろこび勇いさみ願ねぎ奉まつる』

と謠うたひ終をはつて座ざについた。右守司うもりのかみは又また謠うたふ。

右守（謠曲） 天なるや乙棚機のうながせる、玉の御統瓊御統瓊に、あな玉はや、
みたにふたわたらす、あぢしき高彦根の神の、その御神姿にも比ぶべき、珍の御
子なるアールの君、神の恵みに抱かれて、ここに理想の妻と在れませる、ハンナ
の姫を娶らせ玉ひ、今宵芽出度く合衾を、完全に委曲に擧げさせ玉ひ、四海波風
静にて、枝も鳴らさぬ君の代の、その礎と畏くも、婚嫁の道を行はせ玉ひ、天地
の神に代らせ玉ひて、吾國民を心安く、治め玉はむ天の御柱、國の御柱とこれの
館に竝ばして、すみきり玉ふぞ尊けれ。吾は右守の神司、まだ新參の身なれども、
君の御爲國の爲、誠の事と知るなれば、假令生命は捨つるとも、仕へまつらむ若
君の御前、ハンナの姫の御前に、ああ二柱の妹と背の君よ、左守司を始めとし、
その外百の司等を、誠の家の奴と思召され、如何なる事も打明けて、吟ひ附け玉
へ宣らせ給へ、上下睦ぶ君が代の、瑞祥示す今宵の空、月の光もさやかにて、星
さへ今日は何時もより、光りも強くきらめき渡り、世繼の君の行末を、祝ぎ守ら
せ玉ふなり、荒き風もなく悪き雨もなく、五穀は豊に實のり、天下太平國土成就、
天神地祇を崇め祀り、父と母との君によく仕へまし、下國民を憐れみて、美はし

き清き政を、布かせ玉へ聖の君と謠はれて、神の賜ひしビクの國を、彌永久に守
らせ玉へ、神に誓ひて右守の司、若君二柱の御前に、慎み敬ひ願ぎ奉る。朝日は
照るとも曇るとも、月は盈つとも虧くるとも、星は空より墜つるとも、地は震ひ
山は裂け、海はあせなむ世ありとも、君に對して二心、吾あらめやも、心の限り
身の限り、身を犠牲に奉り、君の御爲世の爲に、清き尊き三五の、神を拜み仕へ
まつり、君の御言を畏みて、下萬民に臨みまつらむ、二柱の若君心安くましますせ
よ。右守の司が天地の、皇大神の御前に、誠心捧げ今日の慶事を、壽ぎ奉る、あ
あ惟神々々、御靈幸はひましますせよ』

タルマンは又謠ふ。

ビクトル山の山麓に
皇大神を奉りつつ
ビクの御國の刹帝利

大宮柱太知りて
國の王と在れませる
仁慈の君に仕へたる

内事司のタルマンが 今日けふの慶事けいじを心こころより

喜びよろこ勇みいさ祝ほぎ奉まつる 三五あななひけう教かむづかきの神司

治國はるくにわけ別の宣傳せんでん使し 松彦まつひこ龍彦たつひこ萬公まんこうの

珍うづの御子みこをば伴ともなひて 天あも降りりましたるその時ときゆ

此城このじやう内に塞ふさがれる 醜しこの雲霧くもぎりあともなく

吹ふき拂はらはれて千萬ちよろづの 艱なやみは科戸しなとの春風はるかぜに

散ちり行ゆくあとあとは青々あをあをと 野邊のべの草木くさきは茂しげり合あひ

四方よもの山邊やまべはニコニコと 笑わらひ初そめたる芽出度めでたさよ

かかる時ときしも刹帝利せつていり 世繼よつぎの君きみと在あれませる

アールの御子みこを始はじめとし その外ほか五人ごにんの御子等みこたちは

恙つつがもあらず大神おほがみの 恵めぐみに安やすく歸かへりまし

吾君わがきみ始はじめ司等つかさたち 喜よろこび歡あはれ

又またもや今日けふは合袞がふきんの 芽出度めでたき式しきを擧あげられて

千代ちよの礎かためを築きつきます その瑞祥ずいしやうぞ有あり難がたき

三千世界の梅の花
一度に來る常磐木の

松の緑もシンシンと
花咲き匂ふ君が御代

枝も茂りて鬱蒼と
巢ぐへる鶴の聲さへも

いと勇ましく千代と呼ぶ
雀雲雀も諸共に

今度の慶事を祝ふ如
聲勇ましく歌ひけり

ああ惟神々々
神の恵は目のあたり

今迄悩ませ玉ひたる
君の心は春の日の

氷と解けて櫻花
一度に咲き出す如くなり

花と蝶とに譬ふべき
妹背の君の御姿

仰ぐも畏し大空の
八重の雲路を掻き別けて

下り玉ひし天人か
天津乙女の降臨か

見るも芽出度き御姿
喜び勇み御前に

眞心こめて祝ぎ奉る
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも

誠まことの力ちからは世よを救すくふ
誠まこと一ひとつを立たて通とほし

ビクの御國みくにを何處どこ迄までも
上しやう下か心こころを協あはせつつ

守まもらせ玉たまへ惟かむ神ながら
若君様わかぎみさまの御前おんまへに

慎つしみ敬つやまひ願ねぎ奉まつる
ああ惟かむ神ながら々々

御靈みたま幸さちひましませよ
』

と歌うたひ終をはつて座ざに着つきにける。

（大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 北村隆光録）

第九章 花祝かしく（一三九五）

婚姻こんいんの當事者たうじしやたる王子わうじアールは金扇きんせんを披ひらいて立たち上あがり自みづから謠うたひ自みづから舞まふ。

アール（謡曲）^{えつきよく} 高天原に八百萬神集ります、^{たかあまはら やほよろづ かむつま} 神伊邪那岐尊神伊邪那美尊、^{かむいざなぎのみこと かむいざなみのみこと} 筑紫
日向の立花の青木ケ原に、^{ひむか たちはな あをぎがはら} あもりまして天の御柱國の御柱見立てたまひ、^{あめ みはしらくに みはしら みた} 左右
の廻り合ひ、^{めぐ あ} 廻り廻りてあな愛乙女をと、^{めぐ めぐ にやしえをとめ} 宣らせたまひし古事の、^{の みるごと} 今日の當り
廻り來て、^{めぐ きて} 今日の喜び千秋萬歳樂。^{けふ よろこ せんしうばいざいらく} 首陀の家に生れたる、^{しゆだ いへ うま} 心やさしきハンナを娶
り、^{いも} 妹と背の杯を取り交し、^{せ さかづき と} 天と地との御息を合せ、^{あめ つち みいき あは} ビクの御國は云ふも更なり、^{みくに い さら}
國主と現はれ出でしビクトリアの王家を、^{こきし あら い} 千代萬代に守らむと、^{ちよよろづよ まも} 授けたまひし妹
の命、^{みこと} 目度茲に相生の、^{めでたくここ あひあひ} 松の緑の色深く、^{まつ みどり いろふか} 榮え果てなき珍の御國、^{さか は うづ みくに} 下國民も穩
かに、^{ひしり} 聖の君の御代を仰ぎつつ、^{きみ みよ あふ} 日々の生業歡ぎ樂しみ、^{ひび なりはいゑら たの} 山川は清くさやけく、^{やまかは きよ}
野は穀物實のり、^{の こくもつ み} 人の心は穩かに、^{ひと こころ おだや} 澄みきりすみきる、^す 今宵の空、^{こよひ そら} 惠の露を永久
に、^ふ 降らせせ給ふミロク神、^{たま しん} 月の顔せ、^{つき かんば} 望の夜の、^{もち よ} 彌つぎつぎに變りなく、^{いや} 天の
河原のいつ迄も、^{かはら} 乾く事なく時あつて、^{かわ こと とき} 甘露を地上に降らし給ひ、^{かんろ ちじやう ふ} 五穀木の實は
云ふも更、^{い さら} 總ての物に慈愛の露を、^{すべ もの じあい つゆ} 惠ませたまふ深き尊き御惠、^{めぐ おんめぐみ} 戴く吾こそ樂し
けれ、^{いただ} 戴く吾こそ樂しけれ、^{われ たの} 日は照るとも曇るとも、^{ひ てる くも} 月は盈つとも虧くとも、^{つき みる か}
假令大地は沈むとも、^{たとへ だいち しづ} 誠をもつて盟ひたる、^{まこと ちか} 妹背の道は永久に、^{いもせ みち とこしへ} 變らざらまし、^{かは}

動かざらまし、ああ惟神々々、今日の壽千秋萬歳樂と、喜び祝ひ奉る。いざこれ
よりは父の御後を繼ぎ奉り、アールの君と現はれて、ハンナの姫と諸共に、左守
右守を力とし、柱となして神つ代より、傳はり來りしビクトリアの家を、神を敬
ひ拜み奉り、麻柱の清き教によりて、祖先の家を守り國民を撫で慈しみ、ミロク
の御代の礎を、固めむための今日の御式、芽出度く祝ひ納むる、目出度く祝ひ納
むる』

と謠ひ終り座についた。拍手の聲は急霰の如く、廣き殿中に響いた。ハンナ姫は
中啓を披き、長袖淑かに自ら歌ひ自ら舞ふ。

ハンナ 嗚呼有難し有難し サアフの家に生れたる

吾は賤しきハンナ姫 尊き神の引き合せ

雲井の空に輝き給ふ ビクの御國の國主の御子

アールの君に見出され パインの林の木下蔭

籠かごや熊手くまでを携たづさへて 枯かれて松葉まつばの二人ふたり連れ

搔かき集あつめたる數かず々かずを 籠かごにおしこみ居ある折をりもあれ

天あめの八重やへぐも雲か搔かきわけて 降くだりましたる一人ひとりの珍うづの御み子こ

一目ひとめ見るより勿もつ體たいなくも 卑いやしき乙女をとめの手てを曳ひいて

いと懇ねもこに勞いたはりつ 音おとに名な高たかきビクトリア城じやうに

還かへらせたまふ畏かしこさよ 妾わらわは心こころも戰まのきて

如何いかになり行ゆくものなるかと 案あんじ煩わづらひ居あたりしが

結むすぶの神かみの引ひき合せ 蠚いもりは化くわして龍りゆうとなり

九五きうごの位くらゐにあれませる 吾あが背せの君きみの妻つまとなり

今日けふはいよいよ結けつ婚こんの 式しきを擧あげさせ給たまひけり

ああ有ありがた難ありがたし有ありがた難ありがたし 總すべて女をんなと云いふものは

氏うぢなくして玉たまの輿こしと 里さとの翁おきなに聞ききし事ことも

佯いつはりならず今いまははや 吾わが身みの上うへに降ふりかかり

纖弱かよわき女をんなの身みをもつて 重おもき位くらゐにのぼせられ

もしや冥加に盡きはせざるかと 静けき心はなけれども

君の心の深き情に絆されて 否みも得せず身の程も

辨へ知らぬ女よと 世の人々の譏をも

心にかけて謹みて 君が御旨に従ひ奉りぬ

ああ吾君よ吾君よ 足らはぬ妾をいつ迄も

愍みまして永久に 御傍に仕へさしてたべ

左守の司よ右守さま 内事司のタルマンの君

愚かなる身を憐れみたまひ いや永久に足らはぬ事は氣をつけて

家内の事は云ふも更 國の祭の要をば

教へてたべや惟神 神の御前に願ぎ奉る

ことに尊き三五の 教の道に仕へます

治國別の宣傳使 松彦龍彦萬公の

珍の司も諸共に 吾背の君を導きて

國の祭を過たず 神の教を背かずに

誠まこと一つを經たてとなし

仁慈じんじの教をしへを緯ぬきとして

いや永久とこしへに國民くにたみを

守まもらせ給たまへ惟神かむながら

神素盞鳴かむすさのをの大神おほかみの

珍うづの御前みまへに謹つつしみて

畏かしこみ畏かしこみ願ねぎ奉まつる

朝日あさひは照てるとも曇くもるとも

月つきは盈みつとも虧かくるとも

星ほしは空そらより落おつるとも

ハルナの姫ひめの赤心まごころは

假令たとへし死しすとも變かはらまじ

惠めぐませ給たまへ大御神おほみかみ

父ちちの命みことや母命ははみこと

あが背せの君きみよ諸共もろともに

いや永久とこしへに吾わがために

教をしへを垂たれさせ給たまへかし

偏ひとへに願ねがひ奉たてまつる

千秋萬歲せんしゅうばんざい萬々歲ばんばんざい

と歌うたひ舞まひ納をさめた。ハルナは立たち上あがり自みづから歌うたひ自みづから舞まふ。

ハルナ 神かみの造つくりて治をさめます

神代かみよは云いふも更さらなれど

このビク國も神の國

如何に上下の人々の

心は亂れ果つればとて

誠の道にかはりのあるべきや

古き道徳打ち破り

相思の男女が赤心を

捧げて盟ふ結婚は

千代も八千代も永久に

變る事なき天國の

その有様にさも似たり

天の下をばよく治め

民の心を治めむと

祈り祈らせ給ふ聖の君は

まづ第一に結婚の

道を改め上下の

差別を取りて雲井の空も

八重葎茂り榮ゆる地の上も

一つに治め世界柎かけひきならし

運否なき世の手本を

示し給ふにつけて今宵の結婚

一つはお家のため

一つは國のため

實にも目出たき次第なり

此結婚を恙なく

結び給ひし上からは

天が下には曲もなく

曇りも非ず國民は

君の恵を悦びて

赤き心を捧げつつ 誠を盡し君の社稷を永久に
 守り仕へむ惟神 神にかなひし吾君の
 尊き御業ぞ有難き 左守の家に生れたる
 ハルナの司謹みて 今日の慶事を心より
 喜び祝ぎ奉る アールの君よハンナの君よ
 いや永久にいつ迄も 御國の柱となりまして
 家の子達を恵みつつ ビクの御國に生茂る
 天の益人一人も残さず 恵の露を下しまし
 黄金時代を現出し 世界稀なる聖の君と
 世に謳はれて 王者の模範を示させ給へ
 偏に願ひ奉る ああ惟神々々
 御靈幸倍ましませよ

(大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 加藤明子録)

第一〇章 萬龜柱（一三九六）

カルナ姫は又歌ふ。

カルナ 朝日は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも

假令大地は沈むとも 誠一つは世を救ふ

誠の神の御教を 四方に傳ふる宣傳使

治國別の神司 産土山の聖地より

珍の御伴を従へて 下らせ給ひ天地の

清き教を宣らせつつ 若君様の御結婚

とりなし給ひし有難さ 天と地との息合せ

生れ出でたる人々は 所謂神の子神の宮

生きては此世の神となり 死しては護國の神となり

豊葦原の瑞穂國 生ひ立ち榮ゆる人草を

あつく守りて皇神の
依さしそのままに赤心を
盡すは人の務めぞと
教へ給ひし有難さ
妾夫婦は謹みて
神の御爲國の爲め
蒼生を守るため
尊き神の御前に
朝な夕なに身を清め
天の下をば平けく
いと安らけく守りませ
偏に願ひ奉ると
宣る言靈も空しからず
若君様の御結婚
いよいよ無事に調ひて
御國の榮えを松の花
緑の色もいや濃ゆく
榮え榮えていつ迄も
果しも知らぬ喜びは
全く神の御恵み
謹み感謝し奉る
ああ惟神々々
御靈幸倍ましましてよ
』

松彦は又歌ふ。

松彦まつひこ 此處ここは名なに負ふビクビクの國くに 堅城鐵壁けんじやうてつべきを繞めぐらし

四方よもを見晴みはらす宮城きうじやう 百ももの國民くにたみ見みおろして

御空みそらに高たかく輝かがやける 月日つきひの如ごとく光ひかりをなげ

惠めぐみの雨あめを降ふらし 國人くにびとを厚あつく守まもらせたまふ

音おとに名高なだかき刹帝利せつていり 萬代ばんだい不易いふえきのビクトリア王わうが家いへ

いや益ますます々ますますも天地あめつちと むた永久とこしへに長ながからむ事ことを

神かみの御前みまへに祈いのり奉まつる 一度いちどは黒雲くろくもに包つつまれて

音おとに名高なだかき名城めいじやうも 遂つひに危あやふく見みえけるが

尊たふとき神かみの御守みまもりに 醜しこの曲津まがつは滅ほろび失うせ

今いまは全ま tuttaく風塵ふうぢんも 留とどめぬ御代みよの目出度めでたさよ

其目出度そのめでたさにまた一ひとつ 喜よろこびを重かさね給たまひたる

アールの君きみの御結婚ごけつこん いとさやさやに運はこびまし

玉たまの緒琴をごとの音ねも清きよく 響ひびき渡わたれる勇いさましさ

此極このきはみなき喜よろこびは 外そとへはやらじと心こころをこめて

まつひごつかき
松彦司が惟神かむながら
神かみに祈いのりをかけまくも

かしこ
畏おそき君きみの御前おんまへに
祝ことほぎ仕つかへ奉たてまつる

ビクトリアの神しんでん殿でんが
築きづき上ありし曉あかつきは

アールの君きみよハンナ姫ひめ
手てに手てを取とつて朝あさ夕ゆふに

かかさず詣まうで天あめが下した
四よ方もの國くに民たみ恙つがなく

君きみが政せい治ぢを喜よろこびて
仕つかへまつるべく

祈いのらせたまへ
治はる國くに別にの師しの君きみに

吾われは従したがひ近ちかき中うち
戀こひしき都みやこを後あとにして

神かみの御おん爲ため道みちのため
聖せい地ちをさして進すすむべし

ああ惟かむ神ながら々々
御み靈たま幸さち倍はましませよ

と歌うたひ終をはり座ざについた。
龍彦たつひこは又また歌うたふ。

龍彦たつひこ
「吾わが師しの君きみに從したがひて

祠ほこらの森もりを離はなれつつ

曲神まがみの猛たけぶ山口やまぐちの
晝ひるさへ暗くらき森もりを越こえ

野中のなかの森もりや小北山こぎたやま
後あとに眺ながめてすたすたと

浮木うききの森もりに來きて見みれば
思おもひも寄よらぬ曲神まがみの

深くふか企たくみし陷おとし竅あな
師しの君きみ様さまと諸もろ共ともに

千尋ちひろの底そこへ轉てん落らくし
靈たまは忽たちまち身みを脱ぬけて

精靈界せいれいかいに彷徨さまよひつ
尊たふとき神かみの御指圖みさしづに

靈國れいこく天國てんこく巡覽じゆんらんし
又またもや下くだりて八衢やちまたの

司つかさの神かみとあれませる
伊吹戸主いぶきどぬしにいろいと

尊たふとき道みちを教をしへられ
再ふたび此この世よに生いき還かへり

バラモン教けうのゼネラルと
現あらはれ給たまふ片彦かたひこや

ランチの君きみを言向ことむけて
三五教あななひけうの神力しんりきを

現あらはせまつり吾々われわれは
吾師わがしの君きみと諸もろ共ともに

荒野あらのヶ原がはらを打うち渡わたり
ライオン河がはを横よこぎりて

ビクトル山ざんの麓ふもとまで
進すすみて來きたる折をりもあれ

俄にはかに聞きこゆる関とぎの聲こゑ

只事ただごとならじと進すすみより

よくよく見みればバラモンの鬼おに春はる別わけや久米彦くめひこが

一いつせいしやげき齊射撃の眞最中まつさいちゆう 見逃みのがし往ゆくも三五あななひの

神かみの司つかさの吾われとして 如何いかがならむと思おもひつつ

吾師わがしの君きみと諸共もるともに 嚴いづの言靈ことたま打ち出だせば

豈あにはか圖はからむやバラモンの率ひきゆる軍いくさに非あらずして

右守うもりの司かみの反逆はんぎやくと 覺さとりし時ときの憎にくらしさ

吾等われら師弟していは一齊いつせいに 心こころを揃そろへ口揃くちそろへ

一目散いちもくさんに太祝詞ふとのりと 涼すずしく宣のりて言靈ことたまを

連れんぞくてき續ぞくてき的に打うち出だせば 雲霞うんかの如ごとき大軍たいぐんも

雲くもを霞かすみと逃にげ去さりぬ 斯かかる所ところへヒルナ姫ひめ

カルナの姫ひめの女武者をんなむしや 神かみに守まもられかつかつと

栗毛くりげの駒こまに跨またがりて 反逆はんぎやく人の右守うもりをば

縛ばくして歸かへり給たまひたる 忠勇義烈ちゆうゆうぎれつの働はたらきは

末代迄の鑑ぞと 褒めそやさぬは無かりけり

刹帝利様の御前に 吾等師弟は導かれ

いろいろ雑多の待遇しに 厚意を感謝し奉り

三五教の御教を 完全に委曲に相傳へ

皇大神の御舎を ビクトル山の頂上に

岩切り碎き土を掘り 上つ岩根に搗きこらし

底つ岩根に搗き固め 大宮柱太知りて

今は漸く九分通り 竣工したるぞ嬉しけれ

これに先立ち刹帝利 ビクトリア王の御子とます

五男一女の行衛をば 神の御告を蒙りて

照國嶽の谷間に 進みて迎へ奉り

長子の君と生れませる 心やさしきアールさま

今日は目出たき結婚の 式を擧げさせ給ひつつ

百の司は云ふも更 吾々師弟も招かれて

目出度き席に列ねられ

神の恵の大神酒を

與へられたる嬉しさよ

元より酒豪の龍彦は

何より彼より酒が好き

とは云ふものの三五の

教の道に仕ふ身は

先づ第一に大酒を

謹まなくてはなりません

然るに今日は何となく

嬉し嬉しが重なりて

廻る杯數重ね

思はず知らず酔ひつづれ

いかい失禮したでせう

唯何事も神直日

大直日に見直して

許させたまへ刹帝利

其外百の司達

御前に慎み詫びまつる

ああ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ

萬公は其尾についてへべレケに酔うた儘、足もよろよろ謠ひ舞ふ。

萬公（謠曲調）「ああ目出度し目出度しお目出たし、朝日は照るとも曇るとも、
此結婚が恙なく、千秋萬歳樂と、祝ひ納むる其上は、假令天地は變るとも、何か
恐れむ神の御恵み、ビクの國主の御威勢、空飛つ鳥も羽翼をゆるめて地に墜ち、
草木も感じて自然の音楽を奏し、河の流れは鼓を打ち、君が幾世を祝すらむ。又
三五の皇大神に仕へたる、吾師の君を初めとし、三人の伴人の中に於て、さる者
ありと聞えたる、萬世祝ふ龜の齡の萬公が、此喜びを萬世に、傳へむものと勇み
立ち、手足も儘ならぬ程、酔ひつぶれたる重たき身を起し、命限りに祝ぎ奉る。
鶴は千年の齡を保ち、龜は萬年の壽命をつづく、鶴と龜との命は愚か、幾億萬年
の末迄も、ビクの御國は永久に、ビクトリア王家は、天地の續かむ限り、限りも
知らず榮えませ。それにつけてもアールの君、新に迎へ給ひし後の宮のハンナ姫、
いと睦まじくどこ迄も、陰と陽との息を合せ、天が下に妹と背の、清き鑑を示さ
せ給へ。日は照る照る月は輝く、星は御空に永久に、光も褪せず月の國の大海原
の底深く、契らせ給へ惟神、神の御前に謹みて、龜の齡の萬公が、今日の壽末長
ふ、幾千代迄も、祝ひ奉る」

と泥酔者に似ず、いと眞面目に祝ひ納め元の座に着きぬ。此外、數多の司人の祝の歌はあれど、あまり管々しければ省略するなり。

アールの王子は理想の妻、ハンナを娶りしより、國の政治日に月に開けて國民悦服し、ビクトル山の神殿に祭りたる國治立尊、日の大神、月の大神、神素盞鳴大神を朝な夕なに國民一般が信仰をなし、各其業を樂しみ、ミロクの聖代を地上に現出する事となりぬ。ああ惟神靈幸倍坐世。

(大正一二・二・二一 舊一・六 於龍宮館 加藤明子録)

第三篇 猪倉城寨

第一章 道晴別(一三九七)

道晴別 神素盞鳴の大神の 神言畏みウブスナの

貴の聖地を立出でて 治國別の従者となり

河鹿峠を打越えて 魔神のたけぶ山口の

森に一夜を明かす折 忽ち丑の時参り

妖怪變化の出現と 怪しみみたる折もあれ

松彦司の膽力に よくよく見れば妹の

思ひ掛なき楓姫 やれ嬉しやと兄妹の

名乗を上ぐる時もあれ 神の恵の幸はひて

二人の親に巡り會ひ 祠の森に立歸り

玉國別と諸共に 瑞の御舎建て了り

道晴別と名を賜ひ 吾師の君の後を追ひ

漸く此處に來りけり 流れも清きライオンの

廣き河瀬を横切りて ビクトル山を右手に見つ

草青々と生ひしげる 野路を涉りて今ここに

シメジ峠に着きにけり
ああ惟神々々かむながらかむながら

吾師の君は如何にして
いづくの果にましますか

心も急ぐ一人旅
一日も早く大御神

會はさせ玉へ惟神
神の御前に祈ぎまつる」

と歌ひ乍ら、シメジ峠の登り口迄やつて来たのは道晴別である。道晴別はシメジ

峠の急坂を眺めて、暫し息を休めてみた。降りみ、降らずみ、五月雨の空低うし

て、時鳥の聲は彼方此方の森林より聞え来る。山も野も一面に緑の新装を凝らし、

何とはなく蒸し暑く、上着が邪魔になる様な気分になつて来た。道晴別は急坂を

打仰ぎ乍ら、

道晴「ああ何時きつい坂だらう。吾師の君を始め、松彦、龍彦、萬公は最早此處

を通られたであらうか、此道端の岩石が物言ふものならば知らしてくるだらう

に、ああ仕方がない。先づ此岩上に端座して瞑想に耽り、師の君が通られたか通

られないか伺つてみよう。併し乍らまだ自分は魂が研けてゐないから、ハツキリ

した事は分らぬ、困つたものだなア」

と呟いてゐる。そこへ二三人の男が急はし相にスタスタと坂を降つて来る。三人は岩上の道晴別を見て、

甲「一寸物をお尋ね申します。貴方様は三五教の宣傳使様ぢやムいませぬか」

道晴「ハイ、拙者はお察しの通り、道晴別と申す宣傳使でムいます。何ぞ御用でムるかな」

甲「かやうな所でお話申上げてても畏れ多うムいますが、實の所はビクトル山に尊き宣傳使が現はれ、人民の苦みをお助け下さるといふ事を承はり、主人の命令に仍つて、其お方にお目にかかりたいと、吾々僕三人が危険を冒して、此處迄参りました」

道晴「ビクトル山に三五教の宣傳使があるといふ話がありますかな、はてなア」と手を組み、

道晴「ああ失策つた、こんな事なら、一寸道寄りをして來たらよかつたに、吾師の君がまだ後にゐられたかも知れない。餘り遅れたと思つて急いで來たものだから

ら、大方行過ぎたのだなア」

と私かに小聲で囁いてゐる。

甲「貴方は、さうすると、三五教の宣傳使の御一行ぢやムいませぬか、何でも四人許りゐられるといふ事でムいますか」

道晴「ああ其四人の方は、私の師匠なり友人だ。ビクトル山に確にゐられるといふ事が分つてゐるかな」

甲「イエイエ、もうお立ちになつたか、まだゐられますか、それが判然分らないのです」

道晴「そして宣傳使に會ひに行くとは、如何なる御用があるのかな」

甲「ハイ實の所は、私は玉木村の豪農の僕でムいますが、二人のお嬢さまが猪倉山の山寨に巢を構へてゐる、鬼春別とか云ふバラモンのゼネラルの部下に攫はれ遊ばし、御主人夫婦はいろいろ雑多とお嬢さまの身の上を案じ、夜も晝も水行をして、神様にお願遊ばした所、夢のお告に、ビクトル山には三五教の宣傳使が來てゐられるから、其方にお願申せば、キツと取返して下さるだらうとのお言葉、

それを力ちからとしてお願ねがひ申まをさむと、此處こゝ迄まで参まゐつたのでムごまいます」

道晴みちはる「フーン、それは氣きの毒どくな事ことだ。宣傳使せんでんしとして、こんな事ことを聞きいて見遁みのがす譯わけ

には行ゆくまい。兔とも角主人かくしゅじんの内うちへ案内あんないしてくれ、神様かみさまの御神力ごしんりきでキツと取返とりかへして

上げるから」

甲かぶ「ハイ有難ありがたうムごまいます。定さだめて主人しゅじんも喜よろこばれる事ことでせう。然しからばお伴致ともいたします。

之これから三里許さんりばかり、此峠このたうげを登のぼり下くだり遊あそばしたならば、つい近ちかくの村むらでムごまいます。兔と

も角かくそこ迄までお越こし下くださいまして、主人しゅじんと御緩ごゆつくり話はなしをして下くださいませ。此峠このたうげはバラ

モン軍ぐんの雑兵ざふひやうが徘徊はいくわいを致いたしますれば、随分ずいぶん氣きをつけて行いつて下くださいませ、到底たうてい一ひと

人りでは通とほれない所ところでムごまいますから、かうして三人さんにんで参まゐつたのでムごまいます。ここへ

來くる迄までにも、随分ずいぶん危き険けんな目めに會あうて参まゐりましたのでムごまいます」

道晴みちはる別わけは、

道晴みちはる「そんならお前まへの主人しゅじんの宅たくへ行ゆかう」

と三人さんにんを後前あとさきに従したがへ、胸突坂むなつきざかを喘あへぎ喘あへぎ登のぼつて行ゆく。

シメジ峠たうげの山頂さんちやうに稍平坦ややへいたんな地ち點てんがある。そこには風かぜに揉もまれて、枝振えたぶりのひねた

面白^{おもしろ}いパイ^{パイ}ンが四五本^{しごほん}並び^{なら}びゐたり。チユーニツク姿^{すがた}の二人^{ふたり}の男^{をとこ}、一人^{ひとり}はベツトと云^いひ、一人^{ひとり}はフェルと云^いふ。小^{ちひ}さい石^{いし}に腰^{こし}を^をかけて、四^よ方の風景^{ふうけい}を見^み下^みし乍^{なが}ら雑^{ざつ}談^{だん}に耽^{ふけ}つてゐた。

ベツト「オイ、随分^{ずいぶん}に此^{この}地^ち方^{ほう}は絶景^{ぜつけい}ぢやないか。どの山^{やま}も、この山^{やま}も、あの通^{とほ}り上^{うへ}の方は禿頭^{とくとつび}病^{やう}の頭^{あたま}のやうになつて、其間^{そのあひだ}に青^{あを}い木^きが、點綴^{てんてつ}してゐる様^{さま}は丸^{まる}で繪^ゑを見^みる様^{やう}だ。ライオン河^{がは}の流^{なが}れは幽^{かす}かに帶^{おび}を曳^ひいたやうに見^みえて居^ゐるが、俺^{おれたち}達^{たち}も随分^{ずいぶん}、あこを渡^{わた}つた時^{とき}にや苦勞^{くらくらう}をしたものだ」

フェル「成程^{なるほど}、中途^{ちゆうと}に馬^{うま}が屁古^{へこ}垂^たれて、貴様^{きさま}は四五丁^{しごちやう}許^{ばか}り押流^{おしなが}され、土人^{どじん}に助^{たす}けられて屁古^{へこ}垂^たれた時^{とき}のザマは今^{いま}目^めに見^みえるやうだ。随分^{ずいぶん}鼻^{はな}をたらしやがつて、濡^ぬれ鼠^{ねづみ}のやうになつて、唇^{くちびる}まで紫^{むらさき}色^{いろ}に染^そめて居^をつた時^{とき}のザマつて、なかつたよ。あの時^{とき}に俺^{おれ}がゐなかつたら、貴様^{きさま}は土人^{どじん}に攫^{さら}はれて、鶻^{わがひりころ}殺^{ころ}しに會^あうて居^をつたか分^{わか}らぬのだ。無類^{むるゐと}飛^とび切^きりの惡黨^{あくたう}だからなア」

ベツト「ヘン、偉相^{えらさう}に云^いふない、之^{これ}でもバラモン軍^{ぐん}の、グレジナアだ。第一^{だいいち}玉^{たま}木村^{きむら}の豪農^{がうのう}の娘^{むすめ}スミエル、スガールの兩^{りやうにん}人を甘^{うま}くチヨロまかし、猪倉山^{いのくらやま}の本陣^{ほんぢん}へ

連れて歸つたのも、ヤツパリ此ベツトだから、偉い者だらう。悪もここ迄徹底せ
ないと言様のやうな事では到底軍人にはなれやしないぞ。ゴテゴテ申さずに俺の
命令に服従するのだ。又俺が甘くゼネラルに取持つて伍長位にはして貰うてやる
ワイ」

フエル「ヘン、馬鹿にすな、俺はかうみえても准士官だ、少尉候補生だ。汝は
まだ軍曹ぢやないか、俺が斯う化けて居るの知らぬのかい」

ベツト「ヘン、甘い事云ふない。汝の肩章を見れば能く分つてるぢやないか」

フエル「サア、そこが秘密の役を仰せつかつてゐる丈で、エツボオーレツポの印

が書いてあるのだ。モウ一月もすれば、立派なユウンケルだ。さうすれば、汝、

俺が腮で使つてやるのだから、今の内に機嫌を取つておかぬと出世の妨げになる

ぞ。嘘と思ふなら之をみい」

と襟を引くり返して見せた。ベツトはよくよく覗いて見ると、ユウンケル候補生

の印がついてゐる。忽ち大地に平太張り、

ベツト「これはこれは上官とは知らず、誠に失禮を致しました」

フエル「アハハハハ、往生したか、バラモン軍のマーシャル閣下より内命を受けて居るのだぞ。併し汝が部下と共に連れ歸つた二人の女は、何時取返しに来るか知れぬから、ここに番をしてゐるのだ。豪農チームスの僕の奴が、ビクトル山に居る三五教の宣傳使に報告に行きよつたら、夫れこそ大變だから、此一筋道を扼して、一人も残らず此處を通る奴は取調べ、怪しとみたならば、首を刎ねるのだ。此頂上に只一人居れば、假令何萬人出て來ても、一度にかかる譯には行かぬのだから、汝は交替兵の來る迄神妙に勤めて居るのだぞ」

ベツト「ハイ、承知致しました。併しどうも私一人では、心細うムいます。代りが來る迄、ここに暫く貴方も付合つて貰ひますまいか、どうやら宣傳使の聲が聞えて來るやうですから……」

フエルは幽かに三五教の宣傳歌が耳に這入つたので、早くも、ベツトを此處におき自分は體よく逃出す考へで、こんな命令を下してゐた。宣傳歌は益々高く聞えて來た。

フエル「オイ、ベツト、サア、ここが汝の手柄の現れ時だ。俺は軍務の都合に仍

つて、ここを退却する、確り頼むぞ」

ベツト「マア、一寸待つて下さい。千騎一騎の此場合、貴方は體よい事を云つて逃げるのぢやありませんか。何程軍務が忙しいと云つて、眼前に敵を控へて、大將から逃げると云ふ事がありますか」

とグツと後から、フェルに抱き付き、剛力に任せて動かさぬ、フェルは逃げ出さうとすれ共、ビクともする事が出来ぬ。逃げやうとする、逃がそまいとする。汗みどろになつて揉みあうてゐる所へ、漸く登つて來たのは道晴別であつた。ベツト、フェルは道晴別の姿を見て、おぢけづき、手足はワナワナ慄ひ出し、バタリと地上に腰を下した。

道晴「お前はバラモン軍の兵士と見えるが、玉木村の豪農チームスの娘、スミエ、スガールの兩人を猪倉山の山寨に隠してゐると云ふ事だが、お前はそれを知つてゐるか」

ベツト「へーへーへー、根つかから存じませぬ。そんな噂があつたやうにもムいましてが、よくよく調べてみますると、全く……嘘でムいました。私はゼネラルの

從卒を致して居りましたから、何もかも陣中の事は存じて居りますが、女なんかは一人も居りませぬ」

甲はベツトの顔を見て、

甲「ああお前はお嬢さまを、此間、四五人の男を連れて取りに来た大將だなア……、モシ宣傳使様、此男でムいます。此奴が連れ歸つたのですから、よくお査べ下さいませ」

ベツト「エエ滅相な、私に似た顔は澤山居りますから、取違へて貰つては困りません。コレ、チームスさまの内の奴さま、能く私の顔を見て下さい。似た所があつても、どつかに違つた所があるだらう。お前は餘り俄の事で驚いたから間違つたのだらう。チームスやベリシナが、何卒娘丈は堪へて下さい。其代り私を……と云つた時に、顔もあげずに俯いて居つたぢやないか。お前達もさうだつたらう、怖い時の目でみたら、キツと見違ひするものだ」

甲「ハツハハハ、私の主人が言つた言葉や、其時の状況迄今言つたでないか。さうすればヤツパリお前に違ひない。先生、此奴でムいます。何卒一つドテライ目

に會はして、お嬢さまを取返すやうに命じて下さいませ」

道晴「ウン、よし、オイ、ベツト、本當の事を云はぬと、此方にも考へがあるぞ」

ベツト「エー、實の所は、此處にゐるフェルさまの命令に依りまして、ホンの機械的に動いたのでムいます。何卒フェルさまに談判をして下さいませ。今貴方の

お聲が聞えたので、此フェルさまがビツクリして逃げようとした所を、私が喰ひ止めて、貴方に突出さうと思ひ、今格闘してをつたのです。言はば此男が張本人

ですから、私は其張本人を捕まへた御褒美に、何卒助けて下さいな」

フェル「コリヤ、ベツト、馬鹿を云ふな、俺が何時そんな命令をしたか」

ベツト「へへへへへ、甘い事仰有いますワイ、モシ宣傳使様、此フェルは普通兵の肩章をかけて居りまするが、此奴ア惡の證據にや、襟裏にユウンケル候補生の

印を持つて居ります。それをお調べになつたら一番よう分ります。私は御存じの通り軍曹ですから……」

道晴「どちらが善か悪か知らぬが、兔も角自分の罪を上官に塗りつけようとする所から考へてみれば、ヤツパリ貴様の方が悪い。さて、今言靈の御馳走をやる、

悪あくの強つよい奴やつは言こと霊たまの打うたれようがきついから、直すぐ様さま分わかるのだ」

甲か「ハハハハハ、其そのザマ何なんだ。夜よるの夜よ中に、四し五ご人の雜ざい兵ひやうを連つれて來きやがつて、偉えら相さうに威ゐ張はり散ちらした時ときの權けん幕まくと、今け日ふの權けん幕まくとは、まるで鬼おにと餓が鬼きと程ほど違ちがふぢやないか。ザマ見みやがれ。三あ五な教ひけうの宣せん傳でん使しが現あらはれた以上いじやうは、假た令とへバラモンに幾いく萬まんの敵てきが居をらうと屁へのお茶ちやだ、エへへへへ、よい氣き味みだな」

道みち晴はる「オイ甲か、せうもない事ことを云いふものでない。お前まへは黙だまつてをれば可いいのだ。

バラモン軍ぐんのフエル殿どの、鬼おに春はる別わけ、久く米めい彦ひこ兩りやう將しやう軍ぐんはお達たつ者しやでムるかな」

フエル「ハイ御ご親しん切せつに有あり難がたうムいます。極きはめて壯さう健けんに軍ぐん務むにお盡つくしになつて居をりますます」

道みち晴はる「さうか、それや實じつにバラモン軍ぐんの爲ためには大たい慶けいだ。併しかしモウ斯かうなつては隠かくしても駄だ目めだから、實じつ地ちの事ことを言いつて貰もらひたい」

フエル「ハイ、私わたしは直ちよく接せつ其その任にんに當あたつたのぢやありませんが、玉たま木き村むらの豪がう農のうの娘むすめスミエル、スガールといふ美び人じんが確たしかにゼネラルの側そばに居をります」

道みち晴はる「あ、さうだらう、よう言いつてくれた。併しかしお前まへ達たち兩りやう人は、此この儘まま歸かへしてやる

は易いが、又すべての計畫の障害になると困るから、兔も角、玉木村のチームスが家まで跟いて来てくれ」

フェル「ハイ、ソレヤ行かぬこたムいませぬが、それよりも此處を見逃して下さいますれば、甘く二人の娘を助け出して來ますがなア、のう、ベツト、ここは思案の仕所だ。一層の事、バラモン軍を脱退して、三五のお道へ歸順するお土産として、二人を玉木村へ返さうだないか」

ベツト「ヘーン、そんな事が出來ますかな」

フェルは目をグツと睨み、

「馬鹿だなア、何とか彼とか云つてここを助かるのだ、チと氣をつけぬかい」といふ意味を目で知らした。

ベツト「モシ道晴別様、フェルの大將の様子を御覽になれば、どちらが善か悪か判るでせう。兔も角私は歸順致します。何卒靈縛を解いて下さい御恩返しを致しますから……」

道晴「ハハハ、今靈縛を解いたら、一目散に逃出すだらう。兔も角玉木村へ來る

がよい。何程厭なにほどいやと申まをしても、神力しんりきに仍よつて引張ひっぱつて行く、どこなつと行くなら行いつてみよう」

と云いひ乍ながら、三人さんにんの奴やつこを連つれて、シメジ峠たつげの急坂きふはんを下くだり行ゆく。フェル、ベツトは綱つなをつけて引張ひっぱられるやうな心地こちし、足元あしもと危あやぶく、厭相いやさうに自然しぜん的に跟ついてゆく。漸やうやくにして玉木村たまきむらの稍廣ややひろき原野げんやの中央まんなかに、老木らうぼく茂しげる一構ひとがまへがある。ここがテームスの屋敷やしきであつた。道晴みちはる別わけは宣傳歌せんでんかを歌うたひ乍ながら、三人さんにんの奴やつこに案内あんないされ、フェル、ベツトを靈縛れいばくした儘門内ままもんないに招まねき入いれられたり。

(大正一二・二・二二 舊一・七 於龍宮館 松村眞澄録)

第一二章 妖暝酒えうめいしゆ (一三九八)

甲乙丙かふおつへいの三人さんにんはベツト、フェルの兩人りやうにんを庫くらの中なかへ突つつ込こみおき、代かはる代がはる入口いりぐちに錠ぎやうをおろして番ばんをする事こととなつた。此屋敷このやしきは祖先そせん代代だいだい々々から、玉木たまきの村むらの里庄りしやうを

勤めてゐる豪農で、庫の数が二十戸前も竝んでゐた。ここへ入れへおけば、絶対に氣のつく筈がない、窓から水や食料を放り込んで、娘の歸る迄、二人をここに監禁する事としたのである。そして二人のチューニツクはスツカリはがせ、相當の衣類を與へておいたのである。甲の名はシーナといふ。此男はチームス家の譜代の家來であつて、チームス家一切の家政を司つてゐた。

さて道晴別はシーナに導かれ、チームス、ベリシナ夫婦の前に現はれて、シメジ峠の頂上でベット、フェルに會つた事や或は其神力に打たれて此處迄引張られて來た事などを、詳しく物語つた。チームス夫婦は非常に喜んで茶菓などを出し、湯を沸せて風呂に案内し、宣傳服を着替させ、客室に請じ、娘の危難の事情を物語つた。

チームス「貴方は音に名高き三五教の宣傳使様、能くマア來て下さいました。併し乍ら何千といふ軍隊の中へ二人の娘が攫はれて參つたのでムいますから、いかに御神力強き貴方様でも、容易に取返して頂く事は難かしようムいませうなア」と顔を覗いた。道晴別は少時雙手を組んで思案の體であつたが、何か確信あるも

のの如く微笑み乍ら、

道晴「ああ決して御心配なさりますな。到底一通りや二通りでは行きますまいが、

何とか工夫を致しまして、敵中に忍び込み、お嬢さまを連れ歸ることに致しませ

う。併し乍ら連れ歸つた所で、又もや取返しに來られては何にもなりません、此

奴は徹底的に敵を改心させるか、但は追散らすか致さねば駄目でせう」

ベリシナ「どうか、老夫婦が首を鳩めて日夜心配を致して居りますから、神様の

御神力に仍つて御助け下さいませやう、御願申します」

道晴「當家はウラル教と見えますが、貴方は三五教を信仰する氣はありませぬか」

ベリシナ「ハイ、神様は元は一株、祖先が祭つた神様を俄に子孫が替へるといふ

のは、何だか先祖に對してすまないやうな氣が致します。貴方の信仰遊ばす三五

の神様をお祭り致しても神罰は當りますまいかな」

道晴「神様は一株だから、ウラル教にならうが、三五教にならうがそんな小さい

事を仰有る神様ぢやありません、そして最も神徳の高い詐りのない誠一つの教を

信仰するが祖先へ對しての孝行でムいませう。先づ第一に三五の神様をお祭り致

し、其御神徳に仍つて、お二人様の命が助かるやう、願はうぢやありませんか。それとも、どうしてもウラル教を改めるのが厭と仰有るならば、それで宜しい、決してお勧めは致しませぬから……」

チームス「婆の意見は何と申すか知りませぬが、これ文朝から晩迄、ウラルの神様を信仰し乍ら、こんなに苦しい目に會ふのでムいますから、ウラル教の神様も此頃はどうかしてムるだらうと疑つて居ります。現にビクの國のビクトリア王様もウラル教であらうしやるのに、あの様な大難にお會ひなされ、三五の神様に助けられたとの噂が立つて居ります。何卒宜しう御願ひ致します。ベリシナ、お前もヨモヤ異存はあるまいなア」

ベリシナ「貴方がさう仰有るのならば、女房の私は決して異議は申しませぬ。どうぞ祀つて貰つて下さいませ」

道晴「然らば三五教の神様と、ウラル教を守護遊ばす盤古神王様を並べて祀る事に致しませう。神様は元は一つでムいますからなア」

チームス「いかにも仰の通り、實に公平無私なお言葉、先づ第一に神様をお祀り

致し、其上娘を救つて頂く事に願ひませう』
とここに愈、夫婦の決心が定まつたので、道晴別は俄に神殿を作り、簡単なお祭
をすませ、いよいよ猪倉山に向つて、スミエル、スガールの姉妹を取返さむと進
み行く用意に取かかった。幸、ベツト、フェルの軍服があるので、道晴別とシー
ナの兩人は之を着用に及び、夜に紛れて陣中に進み入る事となつた。
シーナは近くの事とて、猪倉山の地理は能く知つて居つた。谷川の激流を右に
飛び越え、左へ渡り、漸くにして東北西の三方深山に包まれた一方口の廣い谷間
に着いた。三千人許りの兵卒の中へ、同じ軍服を着て紛れ込んだのだから、上の
役人ならば目につくが、軍曹や平兵の服では容易に見破られる氣遣ひがないので
ある。

月は東の山の端を覗いて、谷川に光を投げてゐる。彼方此方の若葉の間から時
鳥の聲が面白く聞えて来る。見上ぐる許りの大岩の麓に四五人のバラモン兵が踏
座をかいて夜警を勤めてゐる。何れも皆酒に酔うてゐるらしい。

甲「オイ、敵もないのに、毎日日夜警計りやらされて居つては、つまらぬぢや

ないか。夜警も此頃はヤケクソになつて、ヤケ酒でも呑まなくちややり切れない。すつぱい腐つたやうな酒を、カーネル奴、……これは夜警に呑ませ……なんて吐しやがつて、自分等の呑みさし計りをまはして來るのだから、本當にむかつくだないか」

乙「だつて呑まないよりマシだ。別に之を呑まねば軍規に反すると云つて嚴命したので、退屈だらうから、之でも構はねば呑んだらどうだと云つて、カーネルさまが下げて下さつたのだ、チツといたみた酒でも貰はぬよりマシぢやないか」

甲「さうだと云つて、自分達は芳醇な酒にくらひ酔、ホフクー、ゲスラートと云つて、用もないのに、小田原評定計りやりやがつて、スミエル、スガールの頗る別嬪に酌をさせ、ヤニ下つてゐやがるのだもの、俺達雑兵は殆ど人間扱をされてゐないのだからな」

乙「馬鹿云ふな、そこが辛抱だ。辛抱さへしてゐれば、時節が來たら花が咲くのだ。之からゼネラルの命令に仍つて、猪倉山の城寨が完成した上は、近國を荒し

廻り、馬蹄に蹂躪し、大共和国を建設するのだ。さうなれば何うしても人物が必
要だ、何程雑兵だつて、汝でもキヤプテン位には登庸されるよ」

甲「ヘン、大尉位になつたつて、何が結構だ、貧乏少尉の、ヤリクリ中尉の、ヤ
ツトコ大尉と云ふぢやないか、そんな事で何うして嬪が養へるか。せめてユウン
ケル位にしてくれりや、骨折つても可いのだが。三五教の宣傳使の三人や四人に
恐怖して、こんな所へ籠城するやうな大將だから、先が見えてゐるワ、何と云つ
ても、鬼春別、久米彦兩將軍が馬鹿だからなア」

乙「オイそんな大きな聲で云ふな。丙丁戊が居眠つたやうな面して聞いてるぞ。
人間の心と云ふものは分つたものぢやない。いつ俺達の裏をかいて、畏れ乍らと、
ゼネラルの前へ密告するか分りやしないぞ」

甲「ナニ、こんな奴がそんな事共致してみよれ、忽ちウーンだ」

乙「ウンとは何だい、又糞パツだな、そんな所でウンをやられちや臭くてたまら
ないワ」

甲「ハハハハ、分らぬ奴だな。三五教の言靈で、ウーンとやつてやるのだい」

乙 「汝は元は三五教だな、此奴ア油断のならぬ奴だ」

甲 「油断がなるまい。俺はチヤンとビクトリア城へ治國別がやって来た時に、門の外にすくんで、どんな事やりよるかとか考へてゐたら、両手を組んで、ウーンとやるが最後、何奴も此奴も體が動けぬやうになつたのだ。そして足計りは自由に動くものだから皆逃げよつたのだ。其呼吸をチヤンと呑み込んでゐる。グツグツいふと一寸やつてやらうか」

乙 「ソレヤ面白い、一つ此所でやつてみよ」

甲 「やらいでかい、マアみて居れ、汝に一つ靈縛をかけてやらう」

と云ひ乍ら、両手を組んで、一生懸命にウンウンと唸つてゐる。餘り唸つたので唸つた拍子にブウブウと裏門へ一二發破裂した。

乙 「アハハハ、たうとう屁古垂れやがつたな。大方そんな事だと思つて居つたのだ。餘りホラを吹くものぢやないぞ」

甲 「俺達は、へーたれさまだ、口からホラを吹いて尻からラツパを吹くのが職掌だ」

乙「オイ、丙丁戊、早く起きぬかい。何だか、向ふの方から二人やつてくる様だ。モシや治國別の片割れぢやなからうかな」

治國別といふ聲を聞いて、三人の泥酔者は俄に起上り、ソロソロ逃仕度をしかけた。

乙「コレヤ、まだ敵か味方が分らぬ先から逃げ仕度をする奴があるかい。卑怯者だな」

丙「分つてから逃げた所で仕方がないぢやないか、分らぬ先に逃げるのが兵法の奥の手だ。モシ敵でもあつてみよ、抜き差がならぬぢやないか」

乙「モシ敵が出て來たら、俺達が撃退するやうに、一步も此所より中へ入れないやうに番をしてゐるのぢやないか、肝腎の時に逃げる奴がどこにあるかい。しつかりせぬかい」

かかる所へ道晴別、シーナの兩人はチューニツク姿で登つて來た。

甲「誰だア、名を名乗れツ」
と呶鳴りつける。

道晴「俺はバラモン軍の軍曹、デクといふものだ」

シーナ「俺はシーナといふ軍人だ。ゼネラル様の命令に仍つて汝達がよく勤めるか勤めてゐないかを巡檢に來たのだ、其ザマは一體何だ」

乙「へ、誠に濟ませぬ。併し乍ら貴方もウスウス御存じでせうが、ゼネラルから賜つた此お酒、退屈さましに頂いて居つたのです」

シーナ「頂いた酒なら、呑むなと云はぬが、軍務に差支ないやうに致さぬと困るぢやいか」

乙「ハイ、チツと過ぎしましたが、よう考へて御覽なさい、別に敵が來るでもなし、さうシヤチ張つて居つた處で、暖簾と脛押しするやうなものです。私計りぢやありません、皆附近の民家へ行つて、色々のドブ酒を徵發し、勝手氣儘に呑んでるぢやありませんか」

シーナ「かう軍規が紊れては、何うも仕方がない、これからチツと監督を嚴重にせなくちやなりませんなア、デクさま」

デク「ウン、さうだ、チツと之から嚴しくやらう。オイ雑兵共、此川に橋を架け」

乙「へー、架けないこたムいませぬが、カーネルさまの御命令に仍れば、……此橋を架けちや可かない……と云つて落されたのですから、一寸伺つた上でなくては、軍曹さま位の命令では聞く事が出来ませぬからなア」

デク「俺は此肩章を見たら分るが、一人は伍長だ。伍長と雖も、汝らの上官だぞ、なぜ上官の命令を聞かないか」

乙「へー、そんなら仕方ありませんせぬ、私達が橋になつて向方へお渡し申しませう。時に軍曹様、マアゆつくりなさいませ。ここに、何ならスツパイ御神酒がチツと計り残つてゐますがなア」

デク「そんな酒は俺は呑みたくない、今玉木村の豪農、チームスの宅へ闖入して、かやうな結構な酒を貰つて來たのだ。何なら、汝、これを一杯呑んだら何うだい」
因に此酒は非常に苛性的な狂亂を起す薬が入つてゐたのである。一寸一口呑むと、何とも知れぬ舌ざはりである。乙は、

「ヤア、軍曹殿、話せますなア、ヤツパリ泥棒軍の上官丈あつて、氣が利いてますワイ」

デク「上官に向つて、泥坊とは何だ」

乙「それでも、人の内へ入つて、脅かして貰つて来るのは泥坊でせう、へへへへ」

デク「マ一杯呑んで見よ、杯を出せい」

乙「杯なんか、氣の利いたものはありませぬ、ここに竹製の臨時杯がありますか

ら、何卒これに注いで下さい。竹筒に注いだ酒は又格別に甘いものですよ」

と云ひながら、竹筒をつき出す。デクは瓢からドブドブと注ぎ與へ、

デク「オイ汝一人呑んでは可かないぞ。これは妖瞑酒というて、一口呑めば三十

年の命が延びるのだ。二口呑めば三十年の壽命がちぢまるのだ。それだから、之

を五人に呑み廻すのだ」

乙「何と難かしい、氣のじゆつない酒ですなア」

と言ひ乍ら、一口より呑めぬといふので、十分に口にくくんだ。何とも知れない

可い味がする、モ一口呑みたくて仕方ないが、三十年の壽命が縮まるのも惜い

と思つたか、惜相に甲に渡した。甲は一口呑んで其風味に感じ、又厭相に丙丁戊

と呑みまはした。戊の口に廻つた時分は、ホンの舌がぬれる程より無かつた。五

人は俄に踊り出し、息苦しくなり、川に飛込んだり、這ひ上つたり、譯の分らぬ事を喋り出して、一目散に陣中に駆込んだ。非常に猛烈な匂がする、此匂を嗅いだものは忽ち感染し、軍服を脱ぎすて、赤裸になつて、川中へ投げ込むのが特色である。次から次へ傳染して、三千人の軍隊の大半は劍を谷川に投すて、チューニツクを脱いで、之れ又谷川に放り込み、赤裸となつて、ワイワイと譯の分らぬ事を囀り初めた。次から次へと傳染して、スポスポと赤裸になる者計りなので、カーネルのマルタは之を見て驚き、兔も角將軍に注進せむと本陣指して一目散に駆込んだ、赤裸の澤山の軍人は譯の分らぬ事をガアガアと囀り乍ら、列を作つて、將軍の陣營指して突喊し行く。

(大正一二・二・二二 舊一・七 於龍宮館 松村眞澄録)

第一三章 岩情(一三九九)

猪倉山の頂上には巨大なる猪の形をした岩倉がある。之を以て猪倉の名が出来たのである。山の五合目以上は全部岩を以て固められ、五合目以下は凄いやうな密林である。そして此岩には所々に岩窟の入口があつて、其内部は數里に渡つてあると噂され、大きな蝙蝠が澤山に棲んでゐた。此窟内には所々に綺麗な水が湧いてゐて、少しも水には不自由がない。そして所々岩から甘露のやうな油がにじみ出し、之さへ嘗めて居れば、餘り勞働をせぬ限り、二ヶ月や三ヶ月は體力が衰へないと云ふ、天與の岩窟である。鬼春別、久米彦兩將軍は部下の兵卒を探險の爲に窟内深く進ましめ、調査の結果、別に恐ろしい猛獸も棲んでゐない事が分つたので、愈ここを本據と定め、五合目以下に俄作りの兵舎を作つて、谷川を堺に立て籠もつたのである。此岩窟に居りさへすれば、いかに治國別が神力あり共、決しておとす事は出来まい、大雲山の岩窟よりも幾倍堅固であり、且廣いかも知れぬ。兩將軍はここを自分の千代の住家として全力を注ぎ、岩を切り擴げたり、いろいろ雑多として、三千の兵士の中で孔鑿に器用なものを選んで晝夜岩窟の鑿掘をやつてゐた。穴の入口の前には俄作りの事務所があつて、そこにはスパール、

エミシのカーネルが固く守つてゐた。窟内の中央とも覺しき稍廣き居間には鬼春別、久米彦兩將軍がそこら中で徴收して來た葡萄酒を傾け、懷舊談に耽つてゐる。鬼春「久米彦殿、かやうな堅城鐵壁に陣取つた上は最早大丈夫でゐるが、併し乍ら千載の恨事ともいふは、ヒルナ、カルナの兩人を遁した事だ。此奴をどうかして奪り還す工夫はなからうかな」

久米「サア、命を的にかげさへすれば、奪り還されない事はありますまいが、あの通りライオンが、あの女には守護してると見えますから、一寸は難かしいでせう」

鬼春「何と云つても、目も眩むやうな美人だから、元より一通りの者ではないと思つてゐた。大方あれは何神かの化身であつたに違ない。ああ、馬鹿な目を見たものだ。久米彦、お前が氣が利かないものだから、掌中の玉を取られて了つたのだよ。鼻はねぢられ、顔はかきむしられ、イヤもうゼネラルとしての貫目はゼロでゐる」

久米「何と云つても、あなたが率先して美人に魂をぬかれ遊ばすのだから、拙者

がのろけるのは、言はば閣下の教育に依つたも同然、仕方がありませんねワ

鬼春 「馬鹿を申すな。カルナを始めて陣中に引張つたのは、貴殿ではムらぬか」

久米 「あつて過ぎた事は云ふに及びますまい、それよりも今度ぼつたくつて来た、

スミエルにスガールの兩人、あれを何とか説きつけて、一時ヒルナ、カルナの代

用品にしたら如何でムる」

鬼春 「イヤもう女には懲々した。あれは飯焚をさしておけば可いのだ」

久米 「然らば兩人に飯焚きをさせませう、そしてあなたが女に懲々なさつたとあ

れば、拙者が兩人共頂く事に致しませう」

鬼春 「イヤさうは参らぬ、貴殿が勝手に致す位なら拙者も勝手に致す」

久米 「然らばあなたは上官の事でもありませんから、姉のスミエルを御自由になさ

いませ。拙者はスガールを預りませう」

鬼春 「スガールはカルナ姫に次いで美人、スミエルは比較的醜婦だ。左様な勝

手な事は出来ずまいぞ」

久米 「然らば兩人の自由に任せ、選擇をさせたら如何でムるかな」

鬼春「ヤ、それが宜からう、然らばスガールを呼出して、お前どちらが好きだか……と尋ねてみよう。そしてスガールの好きだと云った方が彼女を自由にするのだ、無理往生さしても面白くない、又男らしうもないからな」

久米「そら面白いでせう、併し乍ら、あなたは軍服を見れば上官だと云ふ事が分つて居りますから、女といふ者は虚榮心の強いもの故、キツと地位の高いもの、靡くは當然、それでは面白くないから、どちらもチューニツクを脱ぎ平服になり、階級の高下が分らないやうにし、選ましたら何うでせう」

鬼春「ウン、そら面白い、それが本當だ。サ、早く誰かを呼んで、スガールを此處へ召伴れ来る様、お命じなさい」

久米彦はうち諾づき、此居間を出て、次の岩窟に至り、リウチナントのサムといふ男に、スガールを將軍の居間へ引つれ来る事を嚴命した。リウチナントは「ハイ」と答へて、スガールの押込んである岩窟の一間に足を急いだ。兩將軍は軍服を脱ぎ、平服と着替へ、顔の整理などして、色男の競争をやつて、今や遅しと待つてゐる。

暫くあつてスガールは恐る恐る中尉に送られ、將軍の居間にやつて来て、ビリビリ慄うてゐる。鬼春別は相好を崩し、鬼春「オイ、スガール、お前も随分不便であらうの。此方は全軍を統率する將軍だ、ここにゐる男も亦同じく將軍だ。部下に悪い奴があつて、其方を斯様な所へ伴つて来たさうだが實に不愜な者だ。どうかしてお前を親の内へ送つてやりたいと、いろいろ兩人が骨を折つてゐるのだが、何と云つても此山の麓は、三五教の軍勢が、幾萬とも知れず、押寄せて来てゐるのだから、險難で送つてやる譯にも行かず、暫くマア此處で時節を待たがよからう、そして不自由な事があつたら、どんな事でも聞いてやるから、遠慮なく言うたがよいぞ」

スガール「ハイ、思ひもよらぬ御親切、有難う存じます」

久米彦は鬼春別に女の氣に入り相な事計り、先に言はれて了ひ、自分の云ふ事がないので、何うしようかなアと胸を痛めつつ考へ込んだ。どうやら鬼春別にスガールは思召がありさうに思はれるので、氣が氣でならず、久米「ああ其方スガールといふ玉木の村でも有名な美人だ、本當に悪者の手にか

かつて、かやうな所へ來るとは、不愼な者だなア、俺も同情の涙にくれてゐるのだ、どうかして、一時も早く玉木の村へ送つてやりたいのだが、今將軍のいはれた通り、敵軍が取圍んでゐるから、ここ暫くは辛抱してくれねばなるまい、バラモン軍に捉はれてゐなければ三五軍に捉はれてゐるのだ、それを思へば、お前は實に仕合せだよ。キット敵を退散させてみる心算だから、何事も此方の申す事を信じて、楽しんで待つてゐるが可いワ。なア、スガール、かう見えても、随分親切な男だらう」

スガール「ハイ、御兩人様、御親切によう言うて下さりました。どうぞ宜しう御願申します」

鬼春「オイ、スガール、お前は此將軍さまと私と何方が優しい男と思ふか、それが一つ聞きたいものだなア」

スガール「ハイ、どちら様も、人情深いお方でムいます。併し乍ら、何だか知りませぬが、一口でも先へ、優しい言葉をかけ下さつたお方が嬉しうムいます」

鬼春「アハハハハ、さうすると、此髭面の方が氣に入つたと言ふのかな」

スガール「ハイ、別に氣に入るといふ事はムいませぬが、兔も角御親切な御方だと喜んで居ります」

鬼春「ウン、親切は分つてゐるが、もし假りにお前が夫を持つとしたらば、何方を夫に持つか、それが聞きたいものだ」

スガール「どうぞ、そんな事は仰有つて下さいますな、妾は軍人なんか夫に持つ氣はムいませぬ」

鬼春「軍人が氣に入らねば軍人をやめてもよい、そしたらお前は何うするか」

スガール「ハイ、御兩人様が一度に軍人をやめて、普通の人間にお成り遊ばした時には妾はあとのお方に貰つて頂きます。併し乍らモツトモツト、綺麗な氣の利

いた男も世間にはありませんから、さうあわてるには及びませぬ」

久米「コリヤ、女、お前は年にも似合はず大膽な事を言ふ奴だなア、併し乍ら拙者が好きだと云つたな、エへへへ、鬼春別さま、すみませぬが、御約束通拙者

が頂戴致しませう、あなたはスミエルさままで御辛抱なさいませ」

鬼春「オイ、スガール、實際の事を云つてくれ、俺にも考へがあるから」

スガール「ハイ、實際の事を申しましたら、御兩人様がお立腹遊ばしますでせう、マア言ひますまい」

久米「本當の事を云つてくれ、決して喧嘩はしない、何程將軍が御立腹遊ばしてもお前の意見できまるのだから、武士の言葉に二言はないのだから、サ、ここで、スツパリと久米彦さまが好きなら、言つたがよからうぞ」

スガール「バラモン軍の頭をしてムるやうなお方には、死んでも身を任す事は出来ませぬ。あなたは人民の仇です、かやうな所へつれ込まれ、あなた方の、獸の弄物になるのなら、死んだがマシでムいます、再び親の内へ歸らうなどとそんな未練は持ちませぬ、エエ汚らわしい、どうぞ殺して下さいませ」

鬼春「アハハハ久米彦殿、如何でムる。餘り、得意になつて、ホラも吹けますまい」

久米「エエ仕方がない、牢獄へぶち込んでやる、怪しからぬ事を言ふ奴だ。そして其方の考へ一つに仍つて、姉のスミエルも如何なる運命に陥るか知れぬから覺悟をせい」

と荒々しく唝鳴り立て乍ら、久米彦はスガールの手を無理に引ぱつて、長い隧道を傳うて行く。鬼春別は雙手をくみ、首をうなだれて、獨言、

「ああ此道計りは如何なる權力も強迫も駄目だなア、併し乍ら一旦言ひ出した事、此儘ひつ込んで男が立たぬ、又久米彦に占領されては、尚々顔が立たない、何

とか工夫をめぐらして、スガールの心を動かす方法はあるまいかなア」

と小聲で囁いてゐた。一方久米彦は牢獄へ投ずると云ひ乍ら、長い隧道をくぐつて、曲り角の暗い所へ行つた時、

久米「オイ、スガール、お前本氣であんな事云つたのか」

スガール「本氣です共、妾は命は欲しくはないんですから、命を放り出してゐるのですもの」

久米「フーム、さうか、俺の爲に命を放り出すと云ふのだな、ヤ、心底がみえた、感心々々、俺も其つもりで影から可愛がつてやる」

スガール「エ工氣色の悪い、誰があんたなんかに命を差出す者がありますか、悪の張本人、馬賊の親方みたいな男に、死んでも靡きませぬワ」

久米「ハハハハハ、ヒルナ、カルナの奴には惚れたやうな顔をして、甘く騙されたが、此奴又あべこべだ。此んな奴に本當のものがあつたのだ、ここが一つ骨の折所だ」

と自惚れ乍ら、スガールの背中を撫で、猫なで聲を出して、
久米「オイ、スガール、さう腹を立てるものぢやない、お前が俺の云ふ通りにすれば何事も都合よくゆくのだ。キツとお前のお父さまやお母さまに會はしてやるから、俺の言ふ通りになるのだ、可いか、よく物を考へてみよ」

スガールはとても抵抗した所で遁れない、一時のがれに何とかゴマかしておかうと俄に思案を定め、ワザと嬉しげに、
スガール「ハイ、本當の私の精神はお察し下さいませ、將軍様の前でムいますから、あのやうに云つてみたのでムいますよ」
久米「アハハハハ、ヤツパリ俺の目は黒い、さうだらう。ヨシ、それなら俺のここに特別室があるから、ここへ這入つて居れ、將軍の方へは、お前を牢獄へぶち込んだと甘く云つておくから……」

スガール「それは有難うムいますが、どうぞ姉さまと一緒にお願いして下さいな、別々に居るのも淋しうムいますから、妾を眞に愛して下さるのなら、戀しい姉さまと一緒にお願いして下さいねえ」

久米「さうだ、二人おくのはチツと都合は悪いけれど、外ならぬお前の事だから、曲げて願を叶へてやる、どうだ嬉しいか」

スガール「ハイ嬉しうムいます、サ、早く、何卒姉さまを呼んで来て下さいませ」

久米彦は打うなづき乍ら、自分の居間にスガールを忍ばせおき、スミエルを牢屋から引ぱり出し、自分の寢室に伴れ歸つた。

スガール「あれマア姉さま、會ひたうムしました。何うしてゐらつしやいましたの」

スミエル「ハ、暗い暗い所へ一人入れられて、モウ死なうかモウ死なうかと覺悟してをつた所へ、憐み深い將軍様がお出で下さいまして、妹に會はしてやらうと仰有つて此處へ連れて来て下さつたのよ。將軍様、有難うムいます」

久米「ヨシヨシ、モウ心配はいらぬ、又時機をみて、親の内へ送つてやる。お前

等二人は大きな聲を出さずに、此處に隠れてゐるが宜しい、又鬼春別將軍に見付
かると大變だから、私は一寸軍務の都合に仍つて、陣營を巡視してくるから
と云ひ乍らピタリと戸をしめ、外から鍵をおろして、どつかへ行つて了つた。

(大正一二・二・二二 舊一・七 於龍宮館 松村眞澄録)

第一四章 暗窟(一四〇〇)

鬼春別は雙手を組み、失望落膽の色を浮べて何か思案に沈んでゐる。そこへ潔
くやつて来たのは久米彦であつた。

久米 將軍殿將軍殿

と呼ぶ聲にハツと氣がつき、

鬼春 『ヤア久米彦殿、如何でムつたかな』

久米 『いやもう、何うにも、斯うにも仕方のない阿婆摺れ女で實に手古摺りまし

た。止むを得ず最も深い暗窟へ放り込みました。定めて今頃は斃つて居るでせう」

鬼春 「それは惜い事を致したものだ。そして姉のスミエルは如何なさつたか」

久米 「彼奴も荒縄で括つて暗窟に一緒に放り込みました。扱も扱も心地のよい事

で亙りましたワイ。アハハハハ」

鬼春 「ヤア、それは惜い事を致したものだ。然しここでは何だか氣持が悪い。一

度貴殿の御居間へ伺はうと思つてゐた所だ。之から何かの御相談があるから貴殿

の室まで参りませう」

久米彦は自分の室に二人の姉妹を隠して置き乍ら、暗き陥穽へ放り込んで殺し

て了つたと詐つたのだから、鬼春別に來られては忽ち露顯の惧がある。はて困つ

た事が出来たワイ……と思つたが流石は曲物、故意と平氣な顔をして、

久米 「吾々の如き者の穢くるしい家へお越し下さるのは、實に恐れ入ります。何

うか貴方の御居間で伺はして貰ふ譯には参りますまいかな」

鬼春 「いや拙者の居間は男ばかりで、何かにつけて不都合で亙る。貴殿の居間へ

参れば女手が二人も揃うてゐるのだから、誠に以て都合が好いと存じ、それで貴

殿の居間を拜借しようと思したのだ」

久米彦はハツと顔を赤らめ、……鬼春別は何時の間にか自分の居間に二人が隠してあるのを悟つたのかな、こいつア大變だ……と胸を躍らせ乍ら故意と空恍惚、

久米「ハハハハハ將軍殿は随分疑の深い方でゐるな。吾々もバラモン軍の統率者、左様な卑怯な事は致しませぬ。何卒人格を見損はない様にして頂き度いものですな」

鬼春「ハハハハハ今迄貴殿の人格を見損つてゐたのだ。今日愈人格の程度が分つたのでゐる。さう仰せらるるなれば拙者の疑を晴らすために、一度貴殿の居間を明けて見せて貰ひませう」

久米「拙者の居間は拙者の権利の中でゐる。如何に上官だつて搜索する譯には参りません。こればかりは平にお断り申します」

鬼春「いや、何と云はれても拙者の権利を以て室内搜索を致す」と云ひ乍らスタスタと隧道を潜つて久米彦の居間に進み行く。

久米彦は……今露顯れたが最後、一悶錯が起るか、但し自分は首にならねばなるまい。一層の事、鬼春別を後から一思ひにやつつけて了はうか。いやいや將軍にも股肱の家來が澤山ある。うっかり手出しも出来まい、ぢやと云つて吾居間を覗かれたが最後、忽ち露顯するのだ。はて、如何したら宜からうか……と刻々に迫る胸の苦みを抑へて、見え隠れに跟いて行く。

鬼春別は已に已にドアの入口に着いた。そしてドアに耳を寄せて中の様子を考へてゐる。スミエル、スガールの姉妹は、そんな事とは夢にも知らず、兩親のことや、自分の身の不運を歎いて涙に袖を霑し乍ら、一生懸命に盤古大神救ひ玉へ、助け玉へと祈つてゐる。

鬼春別は鍵を持つてゐないので、開けて這入る譯にも行かず、又部下に命じて開けさしては却て自分の人格や聲望を落す虞れがあるので、戀の奴となつた彼は、一生懸命に首を傾けて室内の様子を聞いてゐる。されど何だかワンワンと響きをするばかりで少しも聞きとれなかつた。

久米彦將軍は漸くここに現はれ、

久米「鬼春別様、拙者の室内には何か怪しきものが居る様子ですか」

鬼春「確に怪しうム。さア早く鍵を出してここをお開け召され。さすれば貴殿

の疑も晴れ、兩人の間の確執も解けて結構でムらう」

久米「なるほど、それは結構でムいますが、生憎鍵を落しましたので、這入る譯

にもゆきませぬ」

鬼春「鍵がなくても叩き破れば宜いのだ。金鎚か何か持つて來なさい」

久米「之は怪しからぬ。拙者の居間を金鎚を以て叩き破るとは、決して武士の取

るべき道ではムるまい。いざ戦場と云ふ場合は兔も角、平常に於て他人の居室を

叩き破るとは實に亂暴狼藉と申すもの、之ばかりは如何に上官の命とても、久米

彦承知する事は出來ませぬ」

鬼春「さうすると、ヤツパリ疑はしい物臭い事をしてゐられると見える。拙者の

命令をお肯きなくば、只今より上官の職權を以て將軍職を免じますから其覺悟を

なさい」

久米「拙者は決して貴殿の命令によつて將軍になつたのではムらぬ、大黒主様よ

り命を受けて將軍に任せられたのだから、いかいお世話でゐる。公務上の事は免も角、私行上に迄上官を振り廻す理由はありません。久米彦、斷じて此室内は開けさせませぬ」

かく兩人が争ふ所へ、慌ただしく走つて来たのはカーネルのマルタであつた。

マルタ「將軍様、大變な事が出来致しました」

鬼春「大變とは何だ」

マルタ「ハイ、三千の兵士、一人も残らず眞裸體となり、何だか譯の分らぬ事を

申しまして事務所を叩き破り槍劍を捨て石を投げ亂暴狼藉に及んでゐます。愚

圖々々してゐれば此室内にも入るかも知れませぬから何卒兩將軍様の御威勢によ

りまして御鎮壓を願ひます、到底吾々の力には及びませぬ。思ふに三五教の奴が

魔法を使つて吾軍を悩ますものと考へます」

此注進に鬼春別、久米彦兩將軍は私行上の争論はケロリと忘れ、一目散に岩窟

の入口に駆け出し、四邊を見れば三千の軍隊は八九分通り眞裸體となり、譯の分

らぬ事をガヤガヤ囁り乍ら、半永久的の建物を小口から、メリメリメリ バチバ

チバチと叩き潰してゐる。兩將軍は大喝一聲「コラツ」と云ひ乍ら大勢の中に飛び込んだ。妖暝酒に侵された一同は兩將軍の姿を見るより吾先にと群がり來り、
「ヨイシヨ　ヨイシヨ」と云ひ乍ら胴上げをしたり、地上に投げたり、あらむ限りの亂暴狼藉をなし、遂に兩將軍は大勢の者に身體中を踏み蹂られ、殆んど息の根も絶えむばかりになつてゐた。

そこへチュウニツク姿のデク、シーナの兩人は嚴しく劍を吊り乍ら悠々として現はれ來り、遠慮會釋もなく岩窟内に忍び入り、スミエル、スガール兩人の所在は何處ぞと探してゐる。岩窟内に潜んでゐた數多のバラモン軍は二人の服裝を見て別に怪しみもせず、各軍務に従事してゐる。又もや眞裸體の半狂亂軍はドヤドヤと岩窟内に入り來り、當るを幸ひ暴狂ふ。漸くにして妖暝酒の酔ひも醒め、一同の軍人は正氣に復し、捨てた劍を拾ひ上げたり、谷川に流した衣類の彼方此方に掛つてゐるのを拾ひあげ、日光に干し乾かし兩將軍を助けて元の居間に送り届けた。一時妖暝酒の勢で狂態を演じた數多の軍隊も愈目が覺めて一層軍規を嚴重にする事となつた。道晴別のデク、及びシーナは漸くにしてスミエル、スガール

の所在を探り、門扉を叩き割つて中に押し入り、兩人を助けて室内を遁げ出さうとする時、前後左右の隧道より集まり來つたバラモン軍に脆くも縛られ、四人は別々に暗い岩窟の中に落ち込まれて了つた。

鬼春別、久米彦を初めスパール、エミシ、シヤム、マルタの幹部連は、岩窟内の最廣き將軍事務室に集つて、今度の變事に就き種々と其原因を調べてゐる。

鬼春「三千の軍隊が殆ど九分九里迄眞裸體になり、斯の如き狂態を演じたのは決して普通の事ではあるまい。之には何かの原因があるだらう。汝等よく調査をして、再びかかる不始末がない様に注意して呉れたがよからうぞ」

スパール「左様でムいます。何とも合點の行かぬ事ばかり、大方三五教の治國別一派が、妖術でも使つて吾軍營を攪亂させ、將軍を生捕にする計劃ではあるまいかと存じて居ります」

エミシ「初めの間は僅かの四五人の發狂者でありましたが、次第々に傳染してあの様になつたのです。三五教には妖術等はありません。恐らく此山に住む妖幻坊の一味がなせしものでムりませう。先づ第一にバラモン神を祀り一生懸命に祈

願を凝らさねば、又斯様の事が出来ては危険ですからな」

久米「あの怪しき二人の軍人、牢獄に投じて置いた奴、もしや三五教の間諜では
ムるまいか」

鬼春「八八八八、これだけ澤山の軍隊を以て固めた所へ、一人や二人の間諜が
這入つて来た所で何が出来るものか。此方が察する所によれば、玉木村の豪農テ
ムスの家から攫つて来たと言ふスミエル、スガールの二人の女こそ怪しきものだ
と思ふ。その證據には彼を牢獄へぶち込んだ最後、味方の兵士の狂態が恢復した
ではないか」

エミシ「成程、さう承はればさうに間違ひは入りませぬ。陣中に女を引入れる如
きは神の許し給はざる所なれば、大自在天様が戒めの爲めに、ああ云ふ手續きを
採り吾々一同に氣をつけて下さつたのかも知れませぬ。それについても、あの二
人の兵士は吾軍の服装して居りますれど、あれも何だか怪しいものです。此山の
主が化てゐるのかも分りますまい」

鬼春「決して彼等四人に相手になつてはならぬぞ。ああして押込めて置けば、再

び悪戯は致しますまい。久米彦殿如何でムる。御意見を承はり度い。久米「成程、どう考へても合點の行かぬ事でムる。將軍の仰せの如く彼等はいはぬ事と致して、免も角軍隊の緊肅を圖り、如何なる敵が寄せ來るとも、天與の要害を扼し之だけの味方があれば大丈夫ですから、軍隊一般に注意を與ふる事と致しませう」

さていろいろいと積んだり崩したり、ライトの結果互に相戒めて變つたものが來たら近づけない事に定めて一先づ會議を閉ぢた。それより互に相戒め軍規を嚴肅に此要害を上下一致の上死守する事となつた。

(大正一二・二・二二 舊一・七 於龍宮館 北村隆光録)

第一五章 愚戀（一四〇一）

晴曇常なき晩秋の空、冷たき風に裳裾をあふられて、トボトボとやつて来た一人の男がある。ここはブルガリオの八衢の關所である。例の如く白赤二人の守衛が嚴然と門に立つてゐた。一人の男は何氣なく此門を潛らむとした。赤の守衛は、赤旅人暫く待てツ

と呼びとめた。男は立止まつて、

男「ハイ、何ぞ用でムいますか」

赤「其方は何者だ。そして姓名を名乗れ」

男「ハイ、私は自動車の運轉手で六助と申します」

赤「あの有名なカウンテスの悪川鎌子の情夫だな」

六助「左様でムいます、それが又何と致しましたか、別に貴方方にお咎を蒙る理由は毛頭ムいませぬがな」

赤「其方はここを何處と心得て居る」

赤「其方はここを何處と心得て居る」

六助「現界でもなければ、靈界でもなし、死んだやうにも思ひますし、死んでゐないやうだし、つまり五里霧中に道よつて居ります。併し乍ら此途中で妙な歌を聞きましたので、ヤツパリ死んだのではあるまいかと考へます」

赤「どんな歌を聞いたのだ、ここで一つ言つて見よ」

六助「ハイ、何卒お笑ひ下さいませぬやうに、判然は覺えてゐませぬが、あの歌によると何うやら死んだやうでムいます。そして愛人の鎌子は後に残つてるやう

な氣が致します」

赤「愛人の事を尋ねて居るのでない、歌を聞かせといふのだ」

六助「ハイ、先づザツと左の次第でムいます。」

命からるる鎌子ぞと

知らぬが佛の六助を

犬死にさせたは誰が罪

親馬鹿子馬鹿に亭主馬鹿

といふ様な歌でムいました
赤 親馬鹿、子馬鹿に六助馬鹿といふのだらう、本當にあつたら命を棄てて、六
でもない事をする奴だなア
六助 どうせ六助ですから、六な事は致しますまいて、併しモ一つふるつた奴が
ムいます。

死なず共よいお前は死んで

死なにやならない私や死ねぬ

ホんに浮世は儘ならぬ

どしたら此苦が逃れようか

六助さまは嘸やさぞ

蓮華の花の臺にて

半座をわけて吾行くを

待つてムるである程に

いやな亭主が介抱する

といふ様な歌が道々聞えて居りましたよ。六助鎌子と云つたら、大抵私の事だらうと考へて居ります」

赤「汝は主人の娘を左様な事致して何とも責任を感じないのか」

六助「決して私は悪い事だとは思ひませぬ。雙方納得の上、而も女の方から熱烈なる情波を送られ、ラブの雨を誕生の釋迦さま程浴びせかけられ、止むを得ず……でもなく、へへへへ、つい嬉しい仲になりました。併し乍ら現代は比較的愚物が多いので、……カウンテスに自動車の運轉手などがラブ關係を結ぶとは怪しからぬ……などと、法界悋氣を致すので、一層の事第二の世界を求めて、兩人仲よく理想生活を営まむが爲、情死を致した所、どうやら鎌子は後に残つた様な鹽梅で△います。イー、何時頃鎌子が此處へ來るでせうか。お手數をかけますが、一寸生死簿をくつて下さいませまいか」

赤「汝は世間を恥づかしいとは思はぬか」

六助「決して恥づかしとは思ひませぬ、男として是れ位名譽はないと心得てゐます。よく考へて御覽なさい。貴族だとか、門閥だとか、富豪だとか、人爲的の階級を楯に取り威張り散らしてゐる、一方には没分曉漢があり、驕慢不遜の奴があり、一方には泥坊にも等しき上流社會を、一生懸命に尊敬し、一文の御厄介にもならぬ貴族に對して、米搗バツタ宜しく、頭を下げ腰を曲げ尾をふり、追従タラダラ至らざるなき愚癡妄昧の人間に對し、一種の刺激劑ともなり、覺醒劑ともなり、興奮劑ともなりません。決して男女の關係は權門や門閥や財産や地位や古き道徳に仍つて、左右し得べきものでないと云ふ標本を示した犠牲者でムいますから、世間の人間は、……此六助を男の中の男だ。大丈夫の典型だ。ラブ・イズ・ベストの擁護者だ。貴族に對する警戒だ……と云つて賞讃してくれてゐるでせう。今回の六助の行動に依つて、キツと社會の亡者連も稍目を醒ました事でせう。貴族だつて、平民だつて、運轉手だつて、同じ人間です。思想觀念に決して變りはありません。赤「何とマア偉い權幕だなア。餘程娑婆の教育も、デモクラチク化したと見え

るワイ□

六助□「私は戀愛に惱む世間の男女の爲に犠牲になつたのです。平民階級の娘ならば少し許り自由が利きますが、上流階級の娘と来ると、夫れは夫れは悲惨な者で△います。上流の娘の爲に今迄閉ざされたる天國の道を開鑿した大慈善者で△います□」

赤□「兔も角理窟は抜きにして、主人の娘と心中せむと致した其行動は許す事が出来ぬ。先づ氣の毒乍ら色欲道の地獄へ行かねばなるまいぞ□」

六助□「止むに止まれぬ破目に陥つて、情死沙汰迄引起したのは、所謂社會の強迫と暴虐なる壓制に堪へかねて決行したのですから、そこはチツと御推量を願ひたいものですね□」

赤□「兔も角伊吹戸主様の審判廷で事情を申述べたがよからう。サ、奥へ通れ、社會道德の攪亂者奴□」

と云ひ乍ら、ポンと尻を叩いて門内へつつ込んだ。六助は門内にツと立止まり、目をギョロつかせ乍ら、小聲になつて、

六助「何とマア、何處へ行つても没分曉漢の多い事だなア。八衢の守衛迄が俺達
のローマンスを羨望嫉妬の餘り、ゴテつきやがる。エエ、これから審判廷で滔々
と公平な議論をまくし立て、審判廷の空気を一洗してやらうかい」
と云ひ乍ら、一方の肩を高くし、一方の肩をさげ、懐手し乍ら、のそりのそりと
進み行く。

面に白粉をペツタリとつけ、背の高い一寸澁皮の剥けた二十四五才と見ゆる女
が、シヨナシヨナとやつて來た。赤は、

赤「ハハア此奴ア、今行つた六助のアモリヨーズだなア。まだ肉體は現界にある
精靈らしい、どこ共なしに元氣がないワ」

と獨言云ひ乍ら、近付くのを待つてゐた。女は開け放れた門の鬮を跨げようと
した途端に白の守衛は大手を擴げ、

白「モシモシお女中、暫くお待ちなさい。貴方は此處へ來る所ぢやありません
女「私はアマンの後を慕うて参りました者でムいます。何卒そんな意地の悪い事

を仰有らずに、此處を通して下さい」

赤「コレヤ女、其方のネームは何と申すか」

女「ハイ、鎌子と申します」

赤「ウーン、さうすると、カウント悪川不顯正の娘だな」

女「ハイ、お察しの通り、カウントスでムいます」

赤「其方は貴族の家に生れ乍ら、世間の義理も考へず、祖先の家名をも省みず、

雇人の六助と情交を通じ、道徳を紊したあばずれ女だな」

鎌子「ホホホホ、何とマアこれ丈開けた世の中に、古い頭を持つてゐられますな

ア。チツと頭のキルクを抜いて、新しい空気を注入なさいませ」

赤「コレヤ怪しからぬ、豪膽不敵の曲者奴。其方は夫のある身をも以て不義の快樂

に耽り、家庭を紊し、上流社會の名譽を傷けた大罪人だ」

鎌子「へーエ、私が六さまと密通したのが、それ程罪になりますか。今日の世の

中を御覽なさい。すべて貴婦人といふ者は役者を買ひ、或は情夫を拵へる爲に夜

會といふものが出来て居るのです。女は交際界の花ですから、花にはキツと蝶が

とまつて来るものです。今日の世の中に情夫の一人も能う持たない様な女だつた

ら、決して貴婦人とは云へませぬよ。活眼を開いて社會の裏面を能く觀察して御覽なさい。私の如きは恆河の砂の僅な其一粒が現はれた位なものです。こんな事が罪になるのならば、今日の社會は全部罪の社會ですよ。男本位の壓制的社會の制度を根本改革し、痛ましい虐げられた女の社會を造る爲の犠牲に、私は現れて来たものです。日々の新聞紙を御覽なさい。大抵三件か五件、多い時には十件許りも密通沙汰や情死沙汰を報道してゐるぢやありませんか。新聞紙上に現はれる世の中の出來事と云ふものはホンの其中の一小部分に限られてるのです。それから考へてみましても、新聞紙上に現れてゐない悲哀なる姦通事件や情死沙汰は幾ら行はれつつあるか知れますまい。なぜ斯うした痛ましい事件が頻々と起るのであらうか。此問題に對して何人が責任を負はねばならぬか、もし責任を負はねばならぬとすれば、それは男でせうか女でせうか。言ふ迄もなく、社會全般が責任者でなければなりませんまい」

赤「さうすると、お前の今度の不始末事件も、社會が負はねばならぬといふのか。チツと勝手な理窟ぢやないか」

鎌子「さうですとも、よく考へて御覽なさいませ。現在の社會組織といふものは、すべてが貴族本位、資産家本位は申すに及ばず、男子本位で強い者勝でゝいませう。特に男女の關係に付いては、今日の制度は何もかも男に取つては有利な事柄計りです。そして女に對しては何等の特權も與へられて居りませぬ。實に不公平至極な社會制度で、女に取つて之程不利益な悲惨な事はありません。なぜ斯うした不公平を、男と女の間に設けておかねばならないのか、其理由を知るに私達は苦む者です。ですから一度夫婦間に或事情から離婚問題が持上つたが最後、何時も男は有利の地位に立ち、女は其反對の立場におかれて、泣寝入の體ですよ。女は自分に正當の理があつても、男の立場になつて、而も男にのみ有利に定められた現代の法律では、少しも女の正當な申し出でを聞入れてくれませぬ。どこ迄も女は男に從屬したものだといふ觀念の下に、かうした問題に對しても、男の方を上にして斷定を下す事になつてますが、果して之が正しいと云はれませうか。道徳でも法律でも、男女平等に行はなければならぬと、吾々女性は絶叫してゐるのです。女の立場からすれば、どうしてもさう叫ばずには居られないでせう。併

し元々男と女の間に、さうした差別が勝手に設けられたのですから、云はば無理非道な公平を缺いたものと言はねばなりません。だから女は女としての権利があります。其権利を女の方から、そんなに遠慮したり、自分自らを卑下したりするには當らないと思ひます。どこ迄も一個の人間として、男と同等の考へで押し進んでゆけば、それで可い事ぢやありませんか。そこに女としての生命があり、自由があり、幸福があるので、それこそ女としての本來の持つ可きものなのです。男女關係計りでなく、今日の制度は弱肉強食、優勝劣敗の悪制度が行はれて居りますから、吾々はカウントの家に生れたのを幸ひ、誤れる古き道德や形式を打破して、新しい社會の光明となる考へで、女一人としての本能を發揮した計りです。赤、どうも挨拶の仕方がない、併し乍ら左様な考へでは社會の秩序が紊れるから、ヤツパリ男尊女卑の法則を守らねばなりません。何程男女同權だと云つても、夫婦となつて家庭を作る上は、夫唱婦從の法則に従ひ、茲に始めて男尊女卑、所謂夫婦不同權の域に入るのだ。不都合千萬な夫の目を盗み、雇人と姦通をしておき乍ら、社會の目を醒ますの、新社會の光明となるとは怪しからぬ言ひ解けた。

お前の云ふ通りに、世の中がなるのなれば、第一家庭が紊れ、姦通は白晝公然と行はれ、嫉妬紛争の絶え間がなくなるではないか」

鎌子「相愛の男女が夫婦となつたのならば、決して何程解放的にしておかうが、法律がなからうが大丈夫ですが、今日の如き壓迫結婚、財産結婚、門閥結婚、本人以外の者の定めた結婚には、眞に夫婦としての互の貞操を保持する事が出来ぬぢやありませんか。愛のない結婚を強るが爲に、遂に抑へ切れなくなつて、かやうな問題が起るのですよ。それだから此責任を社會が負はねばならないと、私は主張致します」

赤「併しお前はまだ、生命が現界に残つてるから、今日は餘り追及する事は避けておかう。併し現界へ歸つたら、能く胸に手を當てて、自分の誤れる思想を考察し、今の夫に貞節を盡さねばなりませんぞ。妻の方から眞心を以て向へば、夫は必ず妻を親愛する者だ」

鎌子「私の夫はどれ丈辛く當つても、氣の好いノ口作だから、うるさい程親愛しようとしませんが、それが私は厭なんですよ。よう考へて御覽なさい、戀人と心中を

せむとして死そこねた其女房を、一言も立腹せず、世間の恥も考へず、下僕の如き態度を以て病院で介抱するのですもの、其ノ口さ加減と云つたら、私は益々愛想が盡きました。どうしてもチツと許りは苦味の走つたヒリリとした所がなければ、女は決して男に愛を注ぐ者ぢやありません。甘酒だつて、ヤツパリ椒をすつて入れたり、或は山葵などの辛味を調和せなくちや、本當の甘酒の味がありますまい。甘い計りで辛味の入つてゐない甘酒は一口は宜しいが、三口四口呑みますと、ヘドになつて出ますからね。エエエエ、あの難しい顔わいの、丁度私の父のやうなお方ですなア。仰有る事も能う似てゐますワ。其癖蔭では六助さま以上の事をやつてるでせう。私の父だつてさうですもの、ホホホホ

赤は采配を以て、馬鹿ツと一喝、鎌子の頭部を目がけて打下ろす途端に、鎌子の精霊はパツと消えて元の肉體へ復つた。

(大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 松村眞澄録)

懐ふところの寒さむきが故ゆゑに藪やぶ醫い者しやは

薬くすりにまでも風かぜひかせけり

「あああ、どつかそこらに香かんばしい病人びやうにんがないかと搜さがしてみたが、野のたれ、行倒ゆきだふれ計ばかりで、根ねつから金かねをくれさうな奴やつもなし、こんな所ところへ迷まよつて來きた。これだから、内うちの嬢かかが酒さけを呑のむな酒さけを呑のむなといつも言いひよるのだけれど、醫い者しやの養やうじ生やうし知しらずといつて、どうも節制せつせいが守まもれないものだ。餘あまり此頃このごろは世せ界かいの人間にんげんが賢かしこうなつて、衛ゑい生せいとか運うん動どうとかに注ちう意いをし出だしたので、何どいいつつも此こいいつつも壯さう健けんになり、妖えう仙せんさまの懐ふところは益ます々ます御衰ごすゑ弱じやく遊あそばす、困こまつたことだなア。去き年ねん仕入しれた薬くすりは風かぜを引ひく、だ

と云いつて、ヤツパリ元もとがかかつてゐるのだから、病びやう人にんに呑のまして金かねにせなくちや會くわ計けいは立たたず、呑のましても呑のましても直なほらぬものだから、彼あいいつつも竹たけの子こだ、藪やぶ醫い者しや竹たけ

庵だ、と仕様もない噂を立てられ門前雀羅を張つて、實に惨なものだ、どこぞ好い患者があれば、一つ取つつかまへたいものだなア
と獨言ちつつ、八衢の門を潜らうとする茶瓶爺があつた。

赤「コレヤコレヤ一寸待て、其方は何者だ」

醫「ハイ、拙者は仁術を以て家業と致す國手でゐる。何ぞ用がゐるかな。病氣と

あらば拙者が脈をみてやらうかな」

赤「俺は至極健全だ、醫者なんかには用はない」

醫「ああさうかな、さうすれば私に用のない人だ。私と親密な交際をする者は病

家計りだ。此頃は何だか三五教とかいふ邪教が蔓延して何奴も此奴も病氣を直し、

非常な商賣の妨害を致すので聊か困つてゐるのだ。ああ醫者もモウ世の末かなア」

赤「其方の姓名は何と申すか」

醫「ハイ病井妖仙とも云ひ藪醫竹庵とも申します」

赤「どちらも其方の綽名だな、本名は何といふか」

妖仙「あまり商賣が忙しいので、本名は忘れました。誰も彼も私の前では、先

生々々といひますから、マア先生が本名でゐませうかい」

赤「其方は一生の間に病人を幾ら助けたか」

妖仙「助けたのも澤山ゝいます、壽命のない者は、神さまだつて、醫者だつて

叶ひませぬから……併し乍ら醫者と南瓜はひねたが可いと申しまして、一人前の

醫者にならうと思へば、どうしても經驗上千人位を殺さなくちやなりませんから

なア」

赤「汝は本當に診察しても、病氣の原因や醫療法が徹底的に分つて居るのか」

妖仙「人間の分際として、分り相な事はありませんが、兔も角先人の作つておい

た醫書と首つ引して藥の調合致します。そして問診と云つて、介抱人や家族の者

に病の経過を聞き、食欲の有無を問ひ糺し、又望診と云つて、病人の様子を望み、

顔の黄色い病人は黄疸と断定し、赤い奴は酒の酔と断定し、夫れ相當の藥を與へ

ます。其上血液循環の様子や、呼吸器、神経系統などを、念入りに調べる爲、打

診、聽診、觸診など、所在手段を盡し、どうしても分らない時は、可い加減な名

をつけて、マア胡魔化すのですな。澤山に醫者も居りますが、實際の病氣をつか

んだ醫者は、恐らくは一人もありませんまい。世の中はマアこんなものですよ」

赤「不届な藪醫者奴、其方の薬違によつて、あるべき命を棄てたる者が幾人ある

か分らぬぞ、人殺の大罪人奴」

妖仙「醫者は人を殺しても、別に法律には觸れませぬよ。それが醫者の特権です。

普通の人間が人を殺せば、忽ち死刑の處分を受けねばなりませんまい。醫者は墮胎

をしようが手足を切らうが、墮胎罪にもならず、傷害罪にもならず、一種の特権

階級だから、お前さま等に大罪人呼ばはりをする筈がない、構うて下さるな。

へん、お前さまは顔が赤い、チツと逆上せてゐるな。チツと古いけれどセメンエ

ンでも上げませうか。陳皮に茯苓、ケンチアナ末に、アマ仁油、重曹に牡蠣、何

なら一服召し上つたら何うだい」

赤「バカツ、汝は醫者の押賣を致すのか」

妖仙「さうですとも、生存競争の烈しき世の中、醫者だと云つて、ジツとして居

れば誰も來ませぬ。大新聞に廣告をしたり、記者に提燈を持せたり、金を出して

博士の稱號を取つたり、種々雑多と體裁を飾り立てなくては、乞食だつて手を握

つてくれといふ者がありません。

赤「此帳面に、よく調べてみると、其方は葡萄酒に水を混ぜて、大變高貴な薬だ

と申し、病人にのませ、非常にボツた事があらうな。」

妖仙「そらさうですとも、併し乍ら私達のボルのは一服五錢十錢と小さくボツて

行くのです。一口に千圓萬圓とボツてゐる奴は、世界に幾らあるか知れませぬよ。

四百四病の中でも直る病もあれば、どうしても直らない病がありますが、それで

も病人が薬をくれといへばやらぬ譯にも行かず、又此方もボルことが出来ぬから、

あかぬとは知りつつ、葡萄酒に水をまぜて慰安の爲吞ましてをります。之が所謂

醫者の正に盡すべき道德律ですから、さう貴方のやうに一口に貶すものぢやあり

ませぬ。」

赤「兔も角難物だ。到底モルヒネ注射位では氣がつくまいが、今に荒料理をして

やるから、マア奥へ行つて順番の來る迄待つてゐるが可いワ。」

妖仙「貴方は今、荒料理をしてやると云つたが、それは外科的**大手術**の事だせう。

貴方は**醫者の鑑札**を持つてゐますか。そんな事をなされると**醫師法違反**で告發しま

すぞ。サ、何といふ姓名だ、聞かして貰ひませう。此方にも考へがあるから、お前達のやうな素人に俺達の縄張を荒らされては、到底、醫者として立つていけるものぢやない。鎮魂だの、祈祷だの、心理療法だのと、此頃は俺達の敵が澤山現れて、商賣の妨害をするから、全國醫師大會を開いて、政府に抗議を申込み彼等の輩を殲滅せむと、筭會議で定めてあるのだ。それに素人のお前が、大手術を醫者の私に向つて、してやらうなどとは、法治國の人民として、實に怪しからぬものだ。サア、名を聞かさない」

と懷から手帳を出し、鉛筆を舐つて、姓名を書き留めようとしてゐる。白の守衛は妖仙の腕をグツと握り、厭がるのを無理無體に引張つて、門内に隠れた。

目のクルリとした、鼻に角のある、腮鬚を一尺計り生やした一癖有さうな男、此街道は俺のものだといふやうな調子で、大手を振つてのそりのそりとやつて來る。赤の守衛は、

赤「オイ暫く待て、取調べる事がある」

と呶鳴つた聲に、彼の男は立どまり、厭らしい目で赤の顔を睨めつけ乍ら、

男「何だ、天下の大道を自由に闊歩するのは吾々の自由の権利だ、待てとは何だ。他人の権利を妨害し、假令一刻でも暇取らせらるならば、それ丈の損害賠償を請求するぞ。其方は人間の権利義務といふ事を辨へてるか、工エン」

赤「ここは八衢の關所だ。汝の生前のメモアルを查べ、天國へやるか、地獄へ墜すか、……といふ分水嶺だ。汝のネームは何といふか」

男「拙者は人尾威四郎といふ有名な辨護士だ。そして特許辨護士を兼ねてゐるのだ。これでも法科大學の卒業生だ。守衛の分際として吾々を取調べる權能がどこにあるツ」

赤「いかにも汝は人間の生血を絞る惡黨だ。随分金を能く絞り取つたものだなア」

人尾「人が憂ひの涙に沈み、首もまはらぬやうになつてゐる所を、聊か慰安を與へるのが拙者の職掌だ。其報酬として勞金を請求するのは商賣上の権利ぢやないか、請求すべき物を請求したのが何が悪い」

赤「其方は始からの辨護士ではあるまい。今は人尾威四郎と申してゐるが、以前は二股檢事と云つて、随分惡辣な事を致した者だなア。無謀な檢擧を致して、失

敗つた揚句、已むを得ず辨護士になつたであらう』

人尾 『構つて下さるな、自由の權利だ。お前は吾々を辱める積りか、ヨ一シ現行

法律に仍つて誹毀罪に訴へてやる。事實の有無に關せず、人の惡事を非難致した

者は、新刑法の條項に照し相當の處分がある筈だ。併し乍ら其方の出様によつて

は取消さない事もない、賠償金を幾ら出すか』

赤 『馬鹿言へ、ここは靈界だ。靈界へ現界の法律を持つて來ても通用致さぬぞ。

其方は少しくボレ相な大事件は残らず有名な辨護士に取られて了ひ、糊口に窮し、

小作人を煽動し、勞働者を煽てあげて、澤山の入監者を作り、自分が辨護の得意

先を製造致す、しれ者であらうがな』

人尾 『成程、それに間違ひはない。併し乍ら煽動する者が悪いのぢやない、其煽

動にのる奴が悪いのだ。拙者は拙者として商賣繁昌の爲に所在手段を盡し、活動

してゐるのだ。此權利を侵害する者は、何程靈界だつてあらう筈がない。譯の分

らぬ事をいはずにスツ込んだがよからう。八衢の關所と聞く上は定めて審判所も

あるだらう。ヨシ、裁判はお手のものだ。これから滔々と辨論をまくし立て判官

の目を醒ましてやらう。第一審でいけなければ第二審、第二審で可かなければ第三審、美事勝つてみせよう。そして天國の永住權を獲得し、人生特有の權利を遺憾なく發揮する心段だ、オツホン」

と云ひ乍ら、反身になつて自ら門を潛り、のそりのそりと進み行く。後に二人の守衛は顔を見合せ、

白「彼奴アどしても地獄墜ちですなア、法律家といふ者は實に味のない者ですなア」

赤「冷酷無殘の獸とは彼奴等の事だ。法律にのみ精神を傾注してゐる現界の奴は、口では權利義務を叫び乍ら、人の權利を侵害し、義務を踏みたたくる位は何とも思つてゐない。厚顔無恥の精神病者計りだから、可哀相なものだ。ああ可いかげんに守衛もお暇を頂かねば堪らなくなつてきた。併し乍ら自分と雖も、天國へ行く資格もなし、外に之といふ藝もないのだから、ヤツパリ厭な守衛を勤めねばならないのかなア」

斯く話す所へ、又もや向方の方より、三十恰好のハイカラ男がそそりを唄ひ乍

ら、千鳥足にて大道狭しとやつて來る。

☐ 冬の日の

うす日をうけて只一人

分らぬ所を彷徨ひ來る。

冬の日

空にふるうて照りわたる

鳥の皺枯聲がする。

何となく

あとの心の淋しさよ

今は世になき戀人思へば。

なれそめて

君におびえぬ鳥ありと

悲しき事を書ける文。

島田つぶして丸鬚結うて
嬉しやお宮へ禮参り……と、

ああ酔うた酔うた、一體ここはどこだい。何だか無粋な奴が山門の仁王然と立
つてゐやがるぢやないか。

二世や三世は何うでもよいが

せめて一夜の縁なりと……とけつかるわい。ウーエ、何と淋しい街道だな。
ソロソロ酔が醒め出したやうだ。こんな所で醒められちや、やり切れない。モウ
暫く持續する爲に歌でも唄つて騒いでやらうかな、……

何とするかと狸寝すれば

舌を出したり笑つたり……と、

アハハハハ、お徳の奴、此間の晩も馬鹿にしてゐやがる、

浮氣聞いても氣になる人が

出雲参りを誰とした……か、

二世を契つたあなたの前で

切れて氣になる三味の絲。

切れた切れたは世間の噂

水に萍根は切れぬ………と何と云つても、お徳はお徳だ、要助さまには、誰

が何と云つても………切れはせぬ………と吐すんだから、大したものだ

と袖懷をし乍ら、ドンと門に行當り、頭がフラフラした拍子にバツタリ此處に倒

れた。守衛は背中を力限りに三つ四つ續け打に打った。要助はハツと氣がつき、

酒の酔も醒め、眞青な顔になり、二人の顔をギロギロと見詰めてゐる。

赤「其方は何者だ」

要助「へへ、私は有名な好色男子要助と申します。私をお呼び止めになつて、何

か要助がムいますかな。餘りお徳にならぬ事はお尋ねなさらぬが宜しい。お徳變

じてお損となつては互の迷惑ですからな」

赤「其お徳といふのは何處の女だ」

要助「エへへへ、一寸申上げ難うムいますが、ベコ助の女房でムいます」

赤「ベコ助の女房に、其方は關係をしたのか」

要助「關係があるといへばあります。無いと云へばない様なものです。……」

赤「其方はお徳に肱鐵をかまされただやないか。そして澤山な金を取られたら

う」

要助「へエ、實の所はエー、お徳の要求に應じ、爺の貯金を引ぱり出し、餛飩屋

の資本金にするといふものですから、百兩許り貸してやりました。そして酒を一

杯すすめられ、寝た振をしてみても居りますと、お徳の奴、舌を出したり、私の方

を見て、イインをしたり、笑つたりしてをるのですよ、……何をするかと狸寝す

れば、舌を出したり笑つたり……、マアこんな調子でした、何分にもお徳にはレ

コがあるものですから、どうしても要助と完全に意志を疎通する事が出来ませぬ

ので、目を剥いたり、仕方をしたり、それはそれは苦心をして居りますよ。併し

まだ一度も姦通などはして居りませぬから、二人の仲は潔白なものです」

赤「假令肉體の上に姦通はしなくても、已に已に心で姦通したぢやないか」

要助「サ、夫れが判然分りませぬので、私の方では、心で已に姦通せむとして居

りますが、トツクリ話をする間がないものですから、向ふの意志は十分に分りませぬ。出刃が切れるとか、菜刀が切れるとか、今日は金が切れたとか、餛飩の原料が断れたとか、仕舞ひの果にや……切れた切れたは世間の噂、水に萍根は切れぬ……などと唄つてるものですから、實際私の事を云つてるのか、商賣の事を云つてるのか、まだスツカリ判断がつかないのです。そして所、家の爺奴が、私が貯金を引張出し餛飩屋のお徳にやつたと云ふ事を聞いて、怒るの怒らぬのつて、矢庭に手斧を振かざし……コーラ極道倅奴……と鬼のやうな顔して追かけて来るものですから、止むを得ずライオン河へ投身をしたと思へば、ヤツパリ夢だつたか、こんな所へ踏み迷うて来ました。何分酒のまはつてる最中に追ひかけられたものですから、どこをどう通つて来たのか、川へはまつたのが本當か、テンと譯が分りませぬワ」

赤は生死簿を繰り乍ら、

赤「ヤ、其方はまだ四十年許り命が残つてゐる。併し乍ら其方の肉宮は爺が川から引上げて、「此極道奴」と言つて、矢庭に土の中へ埋け込んで了ひよつたので、

最早歸る事が出来まい。氣の毒乍ら四十年許り、此中有界で修業を致したがよからう』

要助『ハイ、ソリヤ仕方がありません。併しお徳は何處に居りますか、一寸知らせて下さいな。別に向ふに思召のないのに、無理に要求に應じてくれとは申しませぬ。只百圓の金を貸した爲に、こんな顛末になつたといふ事丈を云つてやりたうムいますから、

百圓（逆縁）も、もらさで救ふ願なれば
導き玉へ彌陀の浄土へ……

といふ、どこやらの観音様の、詠歌がムいましたなア、あの百圓さへ私の手へ返されば、極樂浄土へ救うて下さるでせうから、果してここが冥土とあれば、假令幽霊になつてもあの金をお徳から取返し、極樂行がしたうムいますからなア』
赤は、

『工八釜しい、そちらへ行けツ』
と力に任して突飛ばせば、要助は細くなつて、東北の方を目がけて逃げて行く。

第一七章 火救團(一四〇三)

八衢やちまたの關所せきしよにトボトボとやつて來た一人ひとりの女をんながある。守衛しゆゑいは女をんなに向ひ、
赤あか「ここは八衢やちまたの關所せきしよだ、一寸調べる事ことがあるから待つて貰もらひ度たい」

女をんなはハツと驚おどろいて叮嚀ていねいに辭儀じぎをし乍ながら、

女をんな「ハイ、何か御用ごようでムごりますか」

赤あか「お前は何處どこの女をんなだ。姓名せいめいを聞きかして貰もらはう」

女をんな「ハイ、私はフサの國くに、玉木村たまきむらのテームスの娘むすめスミエルと申まをします」

守衛しゆゑいは「フサの國くに、フサの國くに」と云いひ乍ながら横よこに長い帳面ちやうめんを念入ねんいりにめくつて、

赤あか「お前は未だ未婚者みこんしやだなア」

スミエル「ハイ、左様さやうでムごります。どうも縁えんが遠縁とほえんでムごりまして困こまつて居をります」

赤「今迄幾度ともなく縁談の申し込みがあつたぢやないか。何故兩親の言葉を聞いて早く養子を迎へなかつたか」

スミエル「随分立派な養子も申し込んで下さいましたけれど、御存じの通りお多福でムりますれば、心から私を愛して養子に来る人はありません。皆父の財産を相續するのが目的で養子の申し込みがあるので、そんな犠牲にせられちゃ堪りませぬからな。既に養子とならば主人です。兩親の目の黒い間は兔も角、兩親が國替でも致しましたら、そろそろ被つて居た猫の皮を剥ぎ本性を現はし、美しき女を妾に置いたり、或は本妻をおつ放り出し、妾を本妻にする悪性男の多い世の中ですから、うっかり養子を貰ふ譯にも参りませぬ」

赤「お前は實際の所、番頭のシーナに戀着してゐるのだらう。それだから左様な事を申して、立派な養子があつても皆刎つけてゐるのだらうがな」

スミエル「お察しの通り、宅に置いた番頭でムりますけれど、ラブに上下の區別はムリませぬ。又番頭を養子にして置けば、世間の夫の様に威張らなくて何程宜いか知れませぬから、家の爲めにも自分の爲めにも大變好都合と存じまして、兩

親は如何考へてゐるか知りませぬが、私はそれに定めて居ります。何程番頭と云つても人格に變りはありません。凡て男も女も相互に個人としての人格を基礎として結合すべきものだと思ひます。一方から一方を奴隷扱ひするのでもなく物品視するのでもなく、又神の如く尊崇するのでもない。雙方共に平等の人格と人格との結合でなければ眞の戀愛でもなく、結婚でもありません。今日の如き男尊女卑的の結婚は實に不合理極まるもので、其性的關係に就いても殆ど主人と奴僕の如く、顧客と商品との如く、或は牝馬と種馬との如く、個人として已に一度目の覺めた人間から見れば甚だしく非人間的な非論理的な性的關係だと云はねばなりません。夫が女房に對して可愛がるとか、面倒を見てやるとか、優しくするとか等の言葉に對して、妻の方から旦那様のお氣に入るとか、可愛がられるとか云ふ言葉が存立し得る如き夫婦關係は、そこに假令如何なる愛情が存在して居らうとも、決して眞正な結婚ではありません。飼ひ主が愛犬に對する愛情、或は資本家が賃金報酬に對する温情主義と稱するものとは何等異なるものなきもので、眞の人と人との道徳的な關係ではありません。女性に向つて只々温良貞淑をのみ強要せむと

する如き夫は、所謂奴隸の道德を異性に強ゆるものであります。私等は社會の因襲的、かかる惡弊は絶對的に排除したいものであります。今日の多くの婦人の間に媚びるとか、甘へるとか、じやれるとか、飼ひ犬や、飼ひ猫と共通的な性情をさへ具有せしむるに至つた悲しむべき事實を見るに至つたのは、畢竟今迄の人間に少しも戀愛結婚に對する理解力がなかつたからであります。私は第一、主人だとか番頭だとかの下らぬ障壁を取除き、神聖なる戀愛に生き度いものであります。それ故何程立派な男でも智者學者でも、此間の道理が分らない頑固な人には、一身を任せる事は出来ませぬ。戀愛至上の思想があつて初めて一夫一婦の的確なる精神的、道理的、合理的基礎を與ふる事が出来るものでせう。それ以外の一夫一婦論は偽善説にあらざれば、即ち單なる便宜的、因襲的、實利的の御都合主義か、形式主義たるものに過ぎないでせう。理想の合はない夫婦は、何時か相互の間に必然的紛擾を起し、モルモン宗の様に一夫多妻主義を止むを得ず採らなければならぬ様になります。又女の方では已むを得ずラマ教の様に、表面は兔毛角、裏面に一妻多夫主義を心ならずも行はねばならぬ様な破目になりますから、此結婚

問題のみは、何程兩親の言葉だと云つても承諾する事は出来ませぬ。それ故番頭のシーナさまも私も困り果てて居るのですよ。頑迷不靈の親を持つた娘位不幸な者はムいませぬ」

赤「またしても戀愛神聖論者がやつて来て、吾々の頭腦に一種異様の反響を與へよつた。併し乍ら此女の云ふ事も、今日の人間としては最勝れた考へだ」

斯く云ふ所へ少しく年の若い、非常な美人がトボトボとやつて來た。スミエルは此女を見るより嬉しさうに、

スミエル「やア其方は妹スガールぢやないか」

スガール「ハイ、姉さまでムいましたか。いい所でお目にかかりました。猪倉山の岩窟に連れ込まれ暗い陷穽へ落されたかと思へば、こんな所へ抜て來てみました。姉さまもヤツパリ私の様な目に會つたのでせうね」

スミエル「これ妹、ここは現界ではなく、どうやら靈界の様な鹽梅ですよ。姉妹二人が深い穴へ放り込まれ、命を失つて靈魂がここへ來てゐるのでせうよ」

スガール「そんな事はムいますまい。これ丈け氣分が確りしてゐますもの。夢で

もなければ死んだのでもありません。そんな事云つて下さるな。私心淋しうムい
ますわ」

赤「スガールとやら、其方スミエルの妹と見えるが、ここは靈界の八衢だから未
だお前達の來る所ではない。之から現界へ歸つて暫く働かねばなりませんぞ。
併し乍ら兩人の身體は、深い暗い陷阱に放り込まれてゐるのだから、容易に救ひ
出す事は出來まい。併し不思議な事には生死簿には生としてあるから、神様が何
とかして現界に返して下さるだらう」

スガール「左様でムいますか。さうするとヤツパリ此處は靈界でムいましたかな。
鬼春別、久米彦と云ふゼネラルの部下に捕へられ、深い穴に放り込まれたと思へ
ばヤツパリその時に私等姉妹は現界を去つて來たのですかな」

かかる所へ道晴別、シーナの二人は道々何事か話し、又幽かな聲で宣傳歌を歌
ひ乍ら、此方に向つて進んで來る。その姿が道端の樹の間に透して、仄に現はれ
て來た。

道晴別みちはるわけ 神かみが表おもてに現あらはれて 善ぜんと悪あくとを立別たてわける

此世このよは神かみのみます 國くに 世よの人草ひとくさは押おし竝なべて

尊たふとき神かみの御み恵めぐみに 洩もれたる者ものはあらざらめ

齋苑いその館やかたを立出たちいでて 魔神まがみの猛たける月つきの國くに

大雲山だいうんざんに蟠わたかまる 醜神等しこがみたちを言向ことむけて

此世このよの塵ちりを拂はらはむと 治國別はるくにわけに従したがひて

進すすみ來きたれる折をりもあれ 祠ほこりの森もりに殘のこされて

瑞みづの御舍みあらか仕つかへつつ その神業しんげふも相果あひはてて

又またもや進すすむ宣傳せんでん使し 浮木うききの森もりを後あとにして

シメジ峠たつげの山麓さんろくに 來きかかる折をりしも曲津見まがつみが

猪倉山いのくらやまに陣取ぢんどりて 四邊あたりの人ひとを惱なやませつ

玉木たまきの村むらのテームスが 娘二人むすめふたりを掠奪りやくだつし

歸かへりし事ことを聞きくよりも 見捨みすて兼かねたる義侠心ぎけふしん

軍服姿ぐんぶくすがたに身みを竄やつし シーナと共ともに曲神まがかみの

集まる岩窟に立ち向ひ

悪神達の計略の

暗き穴へと投げ込まれ

氣絶したりと思ひきや

何時とはなしに漂渺と

涯りも知らぬ大野原

知らず知らずに辿りける

思ふにここは靈界の

八衢街道にあらざるか

四邊の空氣はなんとなく

現の世とは變りけり

ああ惟神々々

御靈幸はひましまして

現界幽界隔てなく

罪に穢れし吾々の

身魂を救ひ天國に

上らせ玉へ惟神

國治立の大御神

豊國姫の大御神

瑞の御靈の大前に

慎み敬ひ願ぎ奉る

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

二人は漸く關所の門前に着いた。よくよく見れば救ひ出さうとしてゐた、スミ

エル、スガールが、赤、白の守衛と共に何だか話をしてゐるので道晴別は不思議相に、

道晴「拙者は三五教の宣傳使道晴別と申します。ここにゐられるのは玉木村のテームス殿の番頭シーナさまでムります。二人の御婦人はスミエル、スガール様ぢやムりませぬか」

赤「左様でムる。只今ここへ精霊となつてお入來になりましたから、今お歸りを勧めて居る所です」

道晴「あ、それは御厄介でムいました。私も仄に心に浮びますのは、此御兩人を助け出さうと思ひ、猪倉山の岩窟へ奇計を以て忍び入り、失敗を致し、敵に覺られ暗黒なる深き穴に投げ込まれたと思へば、斯様な處へ兩人が來て居りました。

さうすれば、吾々もヤツパリ現界の者ではありませぬかな」

赤「いや御心配は要りませぬ。まだ貴方方四人共ここに來られる方ぢやありません。何等かの手續きを以て現界へ歸られるでせう。時にシーナとやら、ここにスミエルさまが來て居られるから御挨拶をなさらぬか」

シーナ「ハイ、何とも恥かしくて言葉が出ませぬ」と俯向く。

赤「シーナさま、随分スミエルさまは貴方に對し、大々の氣焔を吐いておられましたよ。ま一度現界へ歸つて何卒親密に社會奉仕なり、神靈奉仕をお勵みなさい」
シーナ「一旦肉體をとられた私、如何して現界へ歸る事が出来ませうかな」

赤「ここへ來なくてはならぬものは、何程嫌だと云つても來なくてはなりません。又現界に命數のある人は何程來たいと云つても來る事は出来ませぬ。何れ立派な宣傳使の精靈が來て、貴方等を現界へ連れて行つて下さるでせう」

四人は意外の感に打たれて、二人の守衛の顔を見つめてゐた。そこへ東の方から、「オーイ オーイ」と三四人の聲が聞えて來た。四人はハツと聲する方に身を轉ずれば、一道の光明が低空を轟かしてゴウゴウゴウと進み來り、四人の前に緩やかに落ちて來た。火團は忽ち四柱の神人と化した。道晴別は「はて不思議」と、よくよく顔を透かし見れば、戀ひ慕うてみた治國別の一行である。道晴別は嬉し涙にくれ乍ら、

道晴みちはる「ああ先生様せんせいさま、松彦まつひこ、龍彦たつひこ、萬公殿まんこうどの、よう来て下さいました」
と涙なみだを袖そでに拭ぬぐひ嬉うれし泣なきに泣なく。何時いつとはなしに四方しほうから普遍的ふへんてきな光明くわうみやうがさして
来たき。此この光明くわうみやうに照てらされて八人はちにんの姿すがたは煙けぶりの如ごとくに消きえて了しまった。随したがつて八衢やちまたの關せき
所しよも赤白あかしろの守衛しゆゑいの姿すがたも見みえなくなつた。

（大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 北村隆光録）

第五篇 神光増進しんくわうぞうしん

第一八章 眞信しんしん（一四〇四）

緑葉滴る初夏の候
山野の木々は自然のカブオットをなし

風は自然の和琴を弾ず
見渡す限り原野には

首陀や耕奴の三々伍々
列を正して

命の苗を植ゑつける
其光景は天國を

地上に移せしごとくなり
ビクトル山の頂上より

瞳をはなてば麗はしき
譬方なきフリイスの

棚引くごとく見えにけり
ミンシンガーは何と見る

天の描ける大畫帖
畫中の人は何人か

牛を追ひゆくパストラル
カンタビールナ歌うたひ

或は交るプレストの
其對照の面白さ

百日百夜の丹精も
漸く茲に現はれて

ビクトル山の勝地をば
トして建てる御舎も

いと莊嚴な神まつり
其の祝詞は天地に

響き渡りて靈國や
天國界の天人が

奏かなでたまへる ロンドの床ゆかしさ

走法そうはふ又はまた輕快調けいくわいてう クラビコードを中空ちゆうくうに

竝ならべて奏かなづるアダチオス メロディー、モーターフ

マヂヨワ、アビニシモ フアンセット、トンブルノ

生言いくことたま靈まも順序じゆんじよよく フレーズの限かぎりを盡つくし

リズム正ただしく天地あめつちの 神かみの心こころを慰なぐさむる

其その光景ありさまを目まの當あたり 靈れいに目め覺めめし人ひとの耳みみに

いと涼すずやかに聞きこえくる 治國はるくにわけ別わかれを祭主さいしゆとし

ビクの國王こぎしの刹帝利せつていり ヒルナの姫ひめやアールの君きみ

其その外ほか百ももの司達つかさたち 席せきを正ただして遷宮せんぐうの

式しきに列れつせる勇いさましさ 開關かいびやく以い來らいの盛況せいきやうと

褒ほめ稱たたへぬはなかりけり。

ビクトル山さんの頂上ちやうじやうに檜皮葺ひはだぶきの立派りつぱな社殿しゃでんが落成らくせいし大國常立尊おほくにとこたちのみことを初はじめ奉たてまつり、天照あまてら

すすめおほみかみ 皇大御神、かむいざなぎのおほかみ 神伊邪那岐大神、かむいざなみのおほかみ 神伊邪那美大神、かむすさのをのおほかみ 神素盞鳴大神、とよくにひめのおほかみ 豊國姫大神、わかざくら 姫大神、このはなひめのおほかみ 木花姫大神、ひ 日の出神を初め、はじ 盤古神王を別殿に祭り、さうごん 莊嚴なる祭典の 式は無事終了された。せつていり 刹帝利のビクトリア王はこくか 國家無事に治まり、わうけあんたい 王家安泰の曙 光を認めかつ神殿の落成した事を感謝すべく、かみしや 神殿に向つて ぐんやうや 恭しく しくか 祝歌を奏上し た。

せつてい 刹帝 (えうきよくてう 謠曲調) 久方の

あまつみそら 天津御空に永久に

しづ 鎮まり居ます天地の

もとつみおや 元津御祖の神と現れませる

おほくとこたち 大國常立の大御神

とよくにぬし 豊國主の大御神

あまつひ 天津日の御國を

す 統べさせ給ふ

かむいざなぎ 神伊邪那岐の大御神

つき 月の御國を統べたまふ

かむいざなみ 神伊邪那美の大御神

いづみたま 嚴の御靈と現れませる

くにはるたち 國治立の大御神

みづ 瑞の御靈と現れませる

かむすさのを 神素盞鳴の大御神

くめち 大地球の御魂と現れませる

金勝要の大御神 海の底ひの限りなく
 統べ守ります大津見の神 天教山に現れませる
 木花姫の大御神 日の出神を初めとし
 三五教を守ります 百の司の神柱
 常世の國に現れませる 盤古神王鹽長彦の命
 其外百の神達の大前に 天地と共に限りなき
 神の授けしビクの國 國王に仕へまつりたる
 御國を守る刹帝利 ビクトリアの神の僕
 尊き清き大前に 謹み敬い天地の
 高き恵を悦びて 海河山野種々の
 美味しものをば奉り 厚き恵の千重の一重にも
 報い奉らむとして 今日御祭り仕へ奉る
 天津神達八百萬 國津神等八百萬
 吾心根を憐みて ビクの御國は云ふも更

吾等が命を永久に

守らせ給へ國民の

一日も早く穩かに

神の恵に浸りつつ

家富み榮え生業を

歡ぎ樂しむ御代となし

月日と共に永久に

茂り榮ゆべく

守らせ給へ惟神

神の御前に願ぎまつる

朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも

假令此世は變るとも

皇大神の御恵

治國別の宣傳使

松彦龍彦神司

ビクの御國を救ひましし

其勳功はいつの世か

忘れ奉らむ惟神

神の御前に赤心を

謹み畏み誓ひおく

ビクの御國は今迄は

ウラルの神の御教を

柱となして世を治め

蒼生を慈み

仕へまつりてありけるが

ミロクの御代の魁と

現はれませる素盞鳴の

尊たふとき神かみの御教みをしへに 目覺めざめし上うへはビクトリア城じやうの

百ももの司つかさを初はじめとし 國民くにたみ擧こぞりて神恩しんおんを

慕したひ奉まつりて永久とこしへに 珍うづの教をしへを守まもるべし

治國はるくにわけ別の神司かむつかさ 御前みまへに謹つつしみ再生さいせいの

御恩ごおんを感謝かんしやし奉たてまつる ああ惟かむながら神々かむながら

御靈みたま幸倍さちはへましませよ

ヒルナ姫ひめは白装束しろしやつぞくに紫色むらさきいろのスカートうがを穿ぎんせんち銀扇ぎんせんを披ひらいて、アツコムパニメン
トを竝ならばせ乍ながら翼琴クラフイコードを弾だんじさせ、自みづから祝歌しゆくかを歌うたふ。

ヒルナ姫ひめ ヲビクトル山さんに千木ちぎ高たかく 大宮柱おほみやばしら太ふとしりて

鎮しづまり居ゐます皇神すめかみの 珍うづの御前みまへに謹つつしみて

感謝かんしやの言葉ことば奉たてまつる 抑々そもそもビクの國柄くにがらは

遠とほき神代かみよの昔むかしより 月日つきひと共ともに傳つたはりて

君と臣との差別をば

正しく守りし神の國

雲井の空も地の上も

睦び親しみ親と子の

如くに治まり來りしが

天津御空の日は流れ

月ゆき星は移ろひて

醜の魔風は吹き荒び

四方の山邊の木々の枝

冷たき風に叩かれて

羽衣脱ぎし如くなる

いと淺猿しき國柄と

忽ち亂れ淋れけり

御國の柱と現れませる

吾が背の君の刹帝利

深く心を惱ませつ

常世の國に現れませし

鹽長彦の大神に

朝な夕なに祈りつつ

天が下をば平けく

いと安らかに治めむと

祈り給ひし丹精も

水泡と消えて曲津神

八岐大蛇や醜鬼の

荒びすさめる世となりぬ

ライオン川は滔々と

水永久に流るれど

絶えなむ許りの刹帝利家

既倒きたうに之これを挽回ばんくわいし

救すくひて君きみの神慮しんりよをば

慰なぐさめ安んじ奉まつらむと

女をんなの纖弱かよわき心こころより

惡逆あくぎやく無道ぶだうの曲神まががみに

あらぬ秋波しうはを送おくりつつ

吾身わがみの血潮ちしほを濁にごしたる

其過そのやまちを悔くい奉まつり

御仁ごじん慈深じふかき三五あななひの

神かみの御前みまへに宣のり直なほし

聞きき直なほされて元もとのごと

治をさまるアーチ・ダツチエス

實げに有難ありがたき限かぎりなり

かくも尊たふとき神恩しんおんに

報むくいまつらむ赤心ましろこころの

印しるしとここに大宮おほみやを

刹帝せつてい利り様に願ねがひ上あげ

治國はるくに別の神人しんじんに

やつと許ゆるされ珍うづの宮みや

仕つかへ終をはりし嬉うれしさよ

ああ惟かむながら神々かむながら

皇大神すめおほかみは永久とこしへに

ビクの御國みくには云いふも更さら

吾君わがきみ様さまや百司ももつかさ

四方よもの國民くにと恙たみなく

此麗このうるはしき現世うつしよに

命いのちを存ながらへ日々にちの

身みの生業なりはいを勵はげみつつ

國くにの榮さかえを松まつの代よの常と磐きは堅きは磐はの聖せい代だいと
進すすませ給たまへ惟かむ神ながら 御み前まへに謹つつしみ願ねぎまつる
『

と歌うたひ終をはつて座ざについた。

（大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 加藤明子録）

第十九章 流調（一四〇五）

治國別は謠ふ。

治國別（謠曲調） 久方の天の八重雲掻きわけて 名さへ目出度きフサの國

ビクトル山の頂上の 上つ岩根を搗きこらし
下つ岩根に搗固め 礎固く敷き竝べ

金銀瑪瑙瑠璃碑礫

琥珀や玻璃に擬ふべき

ライオン川の清き眞砂を

上つ岩根に敷き詰めて

大峽小峽の幹を切り

本と末とは山口の

皇大神に獻り置きて

神の御稜威も三つ栗の

中つ幹を忌斧忌鋤もて

心を籠めて削りたて

飛弾の工の業もあざやかに

御代の光を現はす眞木柱

つきたて 木組も細やかに

天の御蔭日の御蔭と 大屋根をしつらへ

檜の皮のいと厚く 葺きつめ給ひしこの社

高天原の天國の 皇大神の御舎を

天津風時津風吹き捲るまにまに 茲に現世の

國の守りと定めつつ 靈國にありては月の大神と現はれまし

天國にありては日の大神と現れませる 大國常立の大神の

珍の御舎つかへまつり 國王の君を初めとし後の宮や

世繼の御子 左守右守の宮司をはじめ

百の司も悦びて 今日けふの御祭みまつり祝ことほぎ奉まつり

天津御空の極きはみなく 底そこつ岩根いはねの果はてもなく

澄み渡りたる大空や 紫むらさきの浪漂なみただよふ大海原おほうなばらの如ごとくいや高たかく

いや深ふかき大御惠おほみめぐみを喜よろこびて 治國はるくにわけ別はじを初はじめとし

三五教あななひけつの神司かむつかさ 今日けふの喜よろこび永とこしへ久へに

神かみの賜たまひし村肝むらきもの 心こころに銘めいじ忘わすれまじ

ああ斯かかる目出度めでたき聖代せいだいに 扇あふぎの御代みよの末廣すゑひろく

國くにの要かなめと現あれませる 神かみに等ひとしき聖ひじりの君きみ

五風十雨ごふうじふうの序ついでよく 山河やまかはは清きよくさやけく

百ももの種物たなつものはよく實みのり 萬民ばんみん鼓腹こぶくげ擊壤きじょうの

至幸至樂しかうしらくの境涯きやうがいを 全ま tuttaく神かみと國王こきしの御德おんとくと

仰あふぎ奉まつらむ今日けふの御典みのりの尊たふとさよ 朝日あさひは照あてるとも曇くもるとも

大空おほぞら渡る月影つきかげは 或あるひは盈みち或あるひは虧かくるとも

金砂銀砂を布きつめし
天の河原の星の數

濱の眞砂の數多き
蒼生の身の上を

恵ませ給へ皇大神
ミロクの御代を來たさむと

朝な夕なに仕へたる
闇夜も清く治國別の

神の使
常磐の松の松彦や

世は永久に龍彦の
司の悦びは云ふも更

龜の齡の萬公が
今日の盛典を心より

歡ぎ喜び祝ぎ奉る
ああ惟神々々

御靈の恩賴を祈り奉る
御靈の恩賴を祈り奉る

と謠ひ終り元の座についた。タルマンは前ウラル教の宣傳使たりしが、此度治國別の弟子となり、三五教の御教や儀式を教へられ、宮司となつて長く仕へ、王家を初め國家の安泰を祈るべき職掌となつた。タルマンは宮司として祝意を表すべく立ち上り謠ひ始めた。

タルマン（謠曲調）
赤玉は緒冴へ光れど白玉の

君がよそひし尊くもあるか

な

抑もビクの國は
天地開闢の初めより

ビクトリア家の遠つ御祖
國の國王と現はれまして

上は神を崇め奉り
下萬民を慈み

五日の風や十日の雨も
ほどほどに與へられ

御國は榮え民はとみ
天國淨土の有様を

いや永久に傳へたる
珍の御國も時ありて

曲の醜風吹き荒び
千代の住所と定めたる

ビクトリアの城も
既に傾かむとする所へ

天の八重雲搔きわけて
天降りましたる神司

此世の闇をすくすくに
治國別の神人を

初め三人の神司
下り給ひし尊さよ

タルマン司は云ふも更
國王の君も後の宮も

左守右守の宮司も 迷ひの雲を吹き拂ひ

御空に輝く日月の 光に擬ふ三五の

教の道に照らされて 誠の道をよく悟り

愛善の徳に住し 信眞の光を浴び

ビクトル山の下つ岩根に 大宮柱太しき建てて

皇大神を齋ひまつり 天下泰平國土成就

萬民安堵の祈願を凝らし 賤しき身をも顧みず

吾師の君や國王の君の 任けのまにまに

おほけなくも此玉の宮の 神司と仕へ奉り

朝な夕なに身を清め 汚れを避けて只管に

誠を盡すタルマンが 心を諾ひ給へかし

天津御空の日影は 或は照り或は雲り

月は盈ち或は虧くる夜ありとも 誠一つの三五の

神の教を力とし ライオン川の水永久に

絶ゆる事なく涸る事なき 赤心のあらむ限りは

骨を碎き身を粉にし 神の御爲君の爲め

御國の爲に盡すべし ああ畏くも此世をば

統べ守り給ふ 大國常立の大神を初め奉り

天地八百萬の大神 従ひ給ふ百神達の御前に

謹み敬ひ願ぎ奉る ああ惟神々々

御靈幸倍ましましてよ 御靈幸倍ましましてよ

松彦は又歌ふ。

松彦 千代萬代も色かへぬ 常磐の松の松彦が

いや永久のビクの國 いや永久にいつ迄も

榮えませよと大神の 御前にひれ伏し朝夕に

赤心籠めて祈りしが 皇大神は速に

吾等われらが願ねがひを聞きこしめ召めし

百もも日か百もも夜よの其その中うちに

かく麗うるはしき御み舍あらかを

造つくらせ給たまひし嬉うれしさよ

抑そもビクもの神かみ國くには

神かみの守まもりのいいや厚あつく

惠めぐみ給たまひし國くになれば

ビクトル山さんの岩いはのごと

いや永とこ久しへに動うごくまじ

斯かかる目め出で度たき神かみ國くにの

國こき王しの君きみは三あな五なの

教をしへを悟さとり給たまひてゆ

いよいよ國くには盤ばん石じやくの

礎いし清きよく固かたまりて

松まつの緑みどりの青あを々あをと

果はてしも知しらず榮さかゆべし

抑そも此この國くには四よ方もの山やま

見み渡わたす限かぎり松まつ林ばやし

木き々ぎの木この間まにちちらちらちと

見みゆるは櫛かしの大たい木ぼくか

但ただしは樟くすの靈れい木ぼくか

千ち代よに八や千ち代よにかたらかに

命いのちも長ながく朽くちもせず

枯かるるたためしもなき靈れい樹じゆ

これに因ちなみてビクビクの國くに

ビクビクとも動うごかぬ瑞ずい祥しやうと

遙はるかに四よ方もを打うちながめ

心こころに浮うかみし其その儘ままを

茲こゝに寫うつして惟かむながら
神かみの宮居みやゐの御祭みまつりを

祝ことほぎつかへ奉たてまつる
ああ惟かむながらかむながら
神かみ々々

御靈みたま幸さち倍はましませよ

左守さもりは老軀らうくを起おこして嬉うれしげに歌うたふ。

左守さもり「ああ有あり難がたし有あり難がたし
神かみの惠めぐみは目まの當あたり

傾かたむきかけしビクしろの城しろ
立たて直なほします神かみの息いき

三あな五な教ひけつを守まもります
嚴いづの御靈みたまや瑞みづ御靈みたま

皇すめ大神おほかみは云いふも更さら
齋い苑その館やかたを後あとにして

天あ降もりましたる神かむつ司かき
治はる國くに別にの一行いっかうが

鳩はとの如ごとくに下くだりまし
吾わが大君おほぎみを初はじめとし

百ももの司つかさや國くに人びとの
難なやみを救すくひ給たまひたる

大御惠おほみめぐみはいつの世よか
いかに忘わすれむ大空おほぞらの

限りも知らぬ星のかけ
忽ちおつる事あるも

濱の眞砂の盡くるとも
誠の神の御恵は

いや永久に忘れまじ
抑國を治むるは

まづ第一に天地の
尊き神を壽ぎ奉り

神の教に従ひて
下國民に相臨み

國の司と現れませる
模範を示し詳細に

民の心をやはらげて
世を永久に治むべき

誠の道を悟りけり
左守の司も今迄は

靈の光暗くして
心を政治に焦ちつつ

現世に心傾けて
元つ御祖の神様を

次になしたる愚さよ
知らず知らずに神の前

幾多の罪を重ねたる
吾をも懲めたまはずに

廣き心に見直して
許させ給ふのみならず

左守の司の職掌を
元の如くにおほせられ

いと重大な任務をば 任せさせ給ひし有難さ

お禮の言葉は盡されず いざこれよりはキュービツトも

心を研き身を清め 先づ第一に大神を

祈り奉りて君の爲め いと麗しき政治

助けまつらむ吾心 諾ひ給へ惟神

御前に謹み願ぎまつる

と歌ひ座についた。右守のエクスは又歌ふ。

ビクの御國の刹帝利 ビクトリア王の重臣と

仕へまつりし右守司 エクスは茲に謹みて

皇大神の御高恩 治國別の御惠

畏み畏み赤心を 捧げて感謝し奉る

此世を造りし神直日 心も廣き大直日

ただ何事も人の世は
直日に見直せ聞直せ

身の過ちは宣り直せ
かくも尊き御教を

授けられたる上からは
孫子の代に至るまで

畏れ慎み三五の
誠の教を遵奉し

右守の司の職掌を
一心不亂に相守り

神と君との御爲に
心の限り盡すべし

ああ惟神々々
一度は醜の魔軍の

バラモン軍に圍まれて
社稷危く見えけるが

仁慈無限の大神は
仁徳高き吾君の

其窮状を憐みて
救はせ給ひし有難さ

唯何事も世の中は
神の御旨に従ひて

如何なる小さき事とても
決して我意を主張せず

神のまにまに行へば
キタリキタリと恙なく

箱さすやうに行くものと
初めて覺りし神の道

ああ惟神々々かむながらかむながら 皇大神よ永久すめおほかみ とこしへに

此聖代このせいだいを守りましまも 御國みくにを榮え給へかしさか たま

ああ惟神々々かむながらかむながら 神かみの御前みまへに願ねぎまつる」

と歌うたひ終をはり悠然いうぜんとして座ざについた。

(大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 加藤明子録)

第二〇章 建替たてかへ〔一四〇六〕

左守さもりの司かみの長子ちやうしハルナの歌うた。

ハルナ 高天原たかあまはらの移寫いしやとして ビクトル山さんの聖場せいぢやうに

大宮柱おほみやばしら太知ふとしりて 鎮しづまり居ゐます大神おほかみの

御前みまへに祝ことほぎ奉たてまつる

高天原たかあまはらの司神つかさがみ

嚴いづの御靈みたまと現あれまして

一ひと二ふた三みつ四よつ五いつつ六むつ

七八ななつ九このつ十たり百も千ち

萬よろづのものもの元津祖もとつおや

大國おほくに常立とこたち大御神おほみかみ

高皇產靈たかみむすびの大御神おほみかみ

神皇產靈かむみむすびの大神おほかみの

稜威みいづを以もつて限かぎり無なく

萬よろづのものを造つくりまし

天あめが下したなる神人しんじんを

うまし御國みくにに永とこ久しへに

いと安やすらけく住すませむと

日月ひつきくぬち大地つくを造つくりまし

各おのおの清きよき靈たまをば

授さづけ玉たまひて八百萬やほよろづ

尊たふとき神かみを生うみ玉たまひ

天地てんちばんいうまも萬有まも守まもります

廣くわうだいむへん大無邊みめぐみの御惠みめぐみを

尊たふとみ敬あやまひ奉たてまつる

豐葦原とよあしはらの瑞穂國みづほくに

生言靈いくことたまの幸さちはひて

百ももの寶たからを下くだしまし

君きみの位くらゐは千代ちよ八千代やちよ

動うごきもやらず變かはる無なく

島しまの八十やそしま島やそ八十その國くに

天あめの壁かべ立たつ其極そのきはみ

國くにの聳そぎ立つ其その限り 棚たなび引く雲くもの果はてまでも

伊い照てり透とうらす大御おほみ稜いづ威づ 朝あさな夕ゆふなに仕つかへなむ

神かみの守まもりと悦よろこびて 神かみの光ひかりは夜よの守まもり

常とこよ夜よを照てらす月つき讀よみの 天あま勝かつ國くに勝かつ國くにの祖おや

蒼あを生ひとを撫なで玉たまひ 天あめ地つち成なり出でし其その時ときゆ

國くに治は立たちの大神おほかみは 玉たま留め魂むすびの靈み德いづ以もて

隱す身みましてすみ玉たまひ 國くに土にをば造つくり固かためなし

海くらげ月の如ごとく漂ただよへる 豐とよ國くに主ぬしの大神おほかみは

大く地ぬちの海かい陸りく別わかちまし 植き物くさを生うみ出だし守まもりまし

足たる玉たま魂むすびの御み靈いづ德づもて 生いく玉たま魂むすびの靈み德いづもて

葦あし芽が彦いひ遲こちの大神おほかみは 動うごく力ちからは大おほ戸との地ぢ

あらゆる動い物けもの愛めで育そだて 解ほどける力ちからは宇う比ぢ地ね根のか神かみ

靜しづまる力ちからは大おほ戸との邊べ 引いん力り守よくる生いく杙ぐひ神かみ

凝かたまる力ちからは須す比ひ地ぢ根ねの神かみ 引いん力り守よくる生いく杙ぐひ神かみ

弛力を守る角杙神

合力守る面足神

分ける力は惶根の

御稜威を以て世の中の

すべての物に與へまし

天と地との靈をば

神の大道に依らしめ玉ひ

日の神國を治し召す

神伊邪那岐の大御神

月の神國を治し召す

神伊邪那美の大神は

天津御神の神勅もて

天の瓊矛をとりもたせ

千五百の秋の瑞穂國

千足の國や浦安國と

完全に委曲につくりなし

遠き近きの國々に

國魂神を生み玉ひ

産土神を任せまして

青人草を氏子とし

各も各もに持ち分けて

親しく守らせ給ひける

大御恵を謹みて

仰ぎ喜び奉る

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

人は神の子神の宮

とは云ふものの何時となく

曲津の神の曲事に

相交こりて日に夜に

罪や穢に沈みつつ

憂瀨に沈む憐れさを

愍み玉ひ嚴御靈

瑞の御靈の大神は

綾の聖地は云ふも更

黄金山やウブスナ

珍の眞秀良場云ふも更

青垣山を周らせる

下津岩根の此山に

現はれまして世の人を

教へ導き天の下

四方の國々平けく

いと安らけく治めます

其御惠の萬分一

報いむ由もなけれども

能ふ限りの赤心を

盡して神と君の爲

生命の限り仕へなむ

愍れみ給へ惟神

神の御前に平伏して

謹み敬ひ願ぎ奉る

天地初發の其時ゆ

隱身玉ひし國の祖

大國常立大神の

御前にハルナ謹みて

畏み畏み願ぎ申す

清き尊き天が下 四方の御國に生り出でし

青人草の靈等に 授け玉ひし御分靈

直日の靈を照らしつつ ますます光り美はしき

伊都能賣魂となさしめよ もしたまさかに過ちて

醜の曲津に精靈を 汚し破らる事も無く

四魂五情の全けき 其働きによりまして

皇大神の天業をば いと安らげく平らげく

仕へ奉らせ玉へかし 如何なる災禍來るとも

よく耐え忍び人たるの 尊き品位を保たせて

神の玉ひし玉の緒の 生命も長く家の業

いやますますに富み榮え いと美はしき天地の

花と現はれ光となり 天地の御子たる身の本能を

發き上げしめ玉へかし 仰ぎ謹み願はくば

皇大神の御心に 叶ひ奉りて現世の

靈みたまに罪つみも穢けがれなく いみじき過あやまちあらしめず

神かみの賜たまひし精靈せいれいを 守まもらせ玉たまへ惟かむながら神

すべての事業なりはいを營いとなむも 恩みたまのふゆ頼さちを幸さちはひて

いと善よき事ことや正行まさわざは 破はちく竹いさの勇いさみを振ふり起おこし

益ますます々すす進すすみ全まきの 域さかひに到たうたつ達たつせしめまし

朝あさな夕ゆふなに神かみたちを 敬ゐやまひ奉まつりわが君きみを

尊たふとみ御言みことに違たがふなく 國くにの司つかさや國くに民たみの

務つとめを全まく遂とげ完をふせ 普あまねく世よびと人と親したしみて

争あらそひ狂くるふ事こともなく 身みの過あやまちは詔のりなほ直ほし

善言みやびのよごと美詞たてを楯たてとして 神かみと人ひととを和なごめつつ

天てんち地に代かはる勳功いさをしを 堅かきは磐ときはに常とき磐ときに立たてさせよ

愛めぐみも深ふかき幸魂さちみたま 生いきとし生いける萬物ばんぶつを

損そこなひ破やぶる事ことも無なく 生せい成せい化くわ育いくの大道だうだうを

畏かしこみ仕つかへ奇魂くしたまの 光ひかりによつて曲まが神かみの

教をしへの眞理しんりに狂くるへるを 完全うまらに委曲つばらに悟さとるべく

直日なほひの靈幸みたまさちはひて 理非曲直りひきよくちよくを省かへりみつ

誠まこと一つの信仰しんかうを 勵はげませ玉たまへ言靈ことたまの

助けに神かみの御心みこころを 覺さとりて心こころを練ねり鍛きたへ

吾わが身みに觸ふるる許々ここと多久たかくの 罪つみや穢けがれも村肝むらきもの

心こころに思おもふ迷まよひをも 被はらひ退やらはせ玉たまへかし

ビクトル山さんの永久とこしへに ビクとも動うごかぬ其その如ごとく

ライオン河がはの其流そのながれ いや永久とこしへに清きよき如ごと

動うごかず變かはらず息長おきなく いと偉大たくましくあらしめ給たまへ

世よの長人ながひとよ遠人とほひとと 生命いのちを保たもち健全まめやかに

五倫ごりん五常ごじやうを守りつつ 公共こうきのために美うるはしき

功績いさをを萬世ばんせに相傳あひつたへ 天地てんちの御子みこと生うまれたる

務つとめを盡つくさせ玉たまへかし ああ惟かむながらかむながら

すべての感謝かんしゃとわが祈いのり 神世かみよの昔高天むかしたかまにて

千座の置戸を負ひ玉ひ

大和田原のいつ島

退はれ玉ひて天津罪

國津罪咎許々多久の

穢を被ひ玉ひたる

現世幽世の守り神

國常立の大御神

豊國主の大御神

嚴の御靈の大御神

瑞の御靈の大神の

御名に幸はひ聞し召し

諾ひ玉ひ夜の守り

照る日の守りに幸はへませと

神の御前に平伏して

頸ね突抜き願ぎ奉る

ああ惟神々々

御靈幸はひまませよ

カルナ姫は又歌ふ。

右守司の妹と なりて生れしカルナ姫

今日のよき日のよき時に いとなみ玉ひし御祭り

謹み敬ひ祝ぎ奉る 神の守りしビクの國

思ひがけなきバラモンの 鬼春別や久米彦が

數多の軍勢引率れて 短兵急に攻めよする

右守の司の吾が兄は 卑怯未練に腰ぬかし

見す見す敵に本城を 蹂躪されし悔しさよ

吾が背の君と諸共に ヒルナの姫に従ひて

寄せ來る敵に打向かひ 獅子奮迅の活動を

試みたれど如何にせむ 雲霞の如き敵兵を

支ふる由も無きままに 忽ち一計案出し

巡禮姿となり代り わざとに敵に擔がれて

兩將軍の陣營に 送られたりし其時の

心を思ひ廻らせば 劍を渡りし心地なり

ああ惟神々々 かかる危き離れ業

守らせ玉ひ拔群の 勳功を立てさせ玉ひたる

皇大神ぞ尊けれ
一旦敵は退却し

ヤレ嬉しやと思ふ間も
あらせず右守の叛軍は

三千餘騎を従へて
再び謀叛の旗を擧げ

旗鼓堂々と攻め来る
一つ免れて又一つ

如何はせむと城内の
守將は案じ煩ひつ

わが背の君は全軍を
指揮して防ぎ戦へど

勝に乗つたる叛軍は
退く由さへも見えざりき

かかる處へ久方の
天の八重雲かきわけて

下らせ玉ふ三五の
神の使の宣傳使

治國別の一行が
生言靈の幸ひに

心汚き右守司
ベルツを始めシエールまで

威勢に打たれて顛倒し
身動きならぬあさましさ

ヒルナの姫に従ひて
駒に跨り猪倉の

峠を後にカツカツと
蹄の音も急がしく

歸りて見れば城内は 修羅の巷と成り果てぬ
 おもてもん 表門には宣傳使 裏門よりはヒルナ姫
 わらは 妾と共に攻めよせて 敵を残らず追ひ散らし
 ふたたび 再び天下太平の 曙光を仰ぎし有難さ
 あさひ 旭は照るとも曇るとも 月は盈つとも虧くるとも
 たとへてんち 假令天地は覆るとも 誠の神の御恵み
 いくちよまで 幾千代迄も忘るまじ ヒルナの姫の願ひにて
 このせいぢやう 此聖場に宮柱 太しき立てて大神を
 いつまつ 齋き奉りし嬉しさは 天國淨土が目の當り
 ひらそ 開き初めたる心地なり ああ皇神よ皇神よ
 みたまのふゆ 恩頼を垂れ玉ひ ビクの御國の刹帝利
 もも 百の司は云ふも更 萬の民を平けく
 やす いと安らげく永久に 守らせ玉へ惟神
 みまへ 御前に謹み願ぎ奉る

龍彦たつひこ 天地あめつちの皇大神すめおほかみの宮柱みやばしら

太ふとしく立たちし今日けふぞ嬉うれしき。

天地あめつちの神かみも諾うべなひ玉たまふらむ

百ももの司つかさの誠心まことこころを。

古いにしへの神代かみよの儘ままのビクビクの國くに

立直たてなほしたる今日けふぞ嬉うれしき
』

萬公まんこう 千代ちよ八千代やちよ萬代よろづよ迄までと祈いのるかな

ビクビクの御國みくにの榮さかえまさむを。

治國はるくにわけ別神かみの命みことに從したがひて

今日けふの祭まつりに會あふぞ嬉うれしき。

ビクビクの國くに治をさめ玉たまへる刹帝利せつていり

君きみの誠まことは神かみもめでなむ。

君は今七十路の坂を越えませど

萬代までと祈る萬公。

萬年の生命を保ちビクの國に

臨ませ玉へ刹帝利の君

治國別 千早振る神の御稜威の高くして

仕へ奉りぬ玉の宮居を。

ヒルナ姫助け玉へるビクの國は

夜なき國と榮えますらむ。

暗の夜も治國別の神司

ビクの御國の萬代祈る

斯く各祝歌を奉り目出度く遷座の式を終り、次いでホーフスに於て大直會の宴

を開かるる事となつた。

(大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 外山豊二録)

第二章 鼻向(一四〇七)

治國別一行は刹帝利の催したホーフスの直會の會に臨み、盛大なる酒宴を終り一夜をここに明かした。朝未明よりビクトル山の神殿に王を始め一同は初詣をした。龍彦は忽ち神懸となつて云ふ。

龍彦「吾は天教山の木花姫命である。汝治國別、最早ビクの國は風塵治まり後顧の憂ひなければ、一刻も早く西に向つて出立せよ。汝が徒弟道晴別は玉木村の里庄チームスの娘スミエル、スガールの兩人が、バラモン軍のゼネラル、鬼春別、久米彦一派に奪はれたるを救はむとして、却て、岩窟内の深き穴に墜し入れられむとして居るから、一時も早く猪倉山に立向ふべし。時遅れては一大事、松彦、

龍彦、萬公も共に救援に向ふべし

と宣らせ給ひ神上がり玉うた。

治國別は此神勅を聞いて吾徒弟の晴公が道晴別となり憐れなる女を救はむが爲に敵の術中に陥りたる事を覺り、此由を刹帝利に告げて時を移さず出立する事となつた。

治國「只今お聞きの通り神勅が下りましたから、長らくお世話に預かりました、之でお暇を致します」

刹帝「長らくお世話に預かりましてお禮の申上様もムいませぬ。併し乍ら此儘お別れ申すのは實に本意無うムりますれば、兔も角一度ホーフスにお歸りの上、袂別の杯を取交し度うムります。あまり廻り道でもありませんからお寄り下さい。

又お急ぎとならば馬の用意も致さねばなりませんから

治國「然らば折角の思召、此まま徒歩で急ぐよりもお馬を拜借すれば非常に便利が宜しうムいます。然らば今一應お世話になりませう」

と一行四人は刹帝利以下の役員と共に急ぎホーフスに歸つた。左守司は部下に命

じ名馬を四頭選り出して、一行が出立の用意を急いでゐる。刹帝利は別れを惜み涙を流し乍ら、自ら杯をとつて治國別に渡し、酒をなみなみと酌いで袂別の式を擧げた。

刹帝利 何時迄も君の御影を拜まむと

思ひし事の水泡となりぬる。

さりながら君の残せし勳功は

萬代迄も朽つる事なし。

かねてより斯くある事と知り乍ら

今更の如悲しかりけり

治國別 七十路を越えさせ玉ふ身なれども

健やかに在す御姿ぞ嬉しき。

村肝むらきもの心こころを後あとに残のこしつつ

進すすみて行ゆかむ神かみの大道おほぢに。

ヒルナ姫ひめ治國はるくに別わけは只今ただいまゆ

君きみに別わかれて旅たびに出いでむとす。

願ねがはくば國王こきしの君きみを朝夕あさゆふに

心配こころくばらせ守まもらせ玉たまへ

ヒルナ姫ひめ「なつかしき治國はるくに別わけの神司かむつかさ

別わかれむとして涙なみだこぼるる。

吾君わがきみの身みに附つき添そひて朝夕あさゆふに

守まもり守まもらむ神かみの恵めぐみに。

治國はるくにの別わけの司つかさよ松彦まつひこよ

龍彦たつひこ萬公まんこう健まめやかに在ませ

松彦まつひこ 〇千代八千代動うごかぬビクの國柱くにはしら

立てさせ玉たまへ神かみを祈いのりて。

いざさらば吾師わがしの君きみと諸共もろともに

駒こまに鞭むちうち別わかれ行ゆかなむ 〇

タルマン 〇天地あめつちの神かみの力ちからを身みに受うけて

進すすませ玉たまへ月つきの御國みくにへ。

治國はるくにの別わけの命みことは神かみにませば

如何いかなる曲まがもさやらざるらむ。

吾君わがきみは云いふも更さらなり此國このくにの

司つかさや民たみは如何いかに嘆なげかむ。

さり乍ながら心安こころやすけく思召おほしめせ

君師わがしの教厚をしへあつく守まもれば 〇

治國別はるくにわけ「有難し別れに臨み一言のありがた わか のぞ ひとこと」
言の葉こと はさへも出でぬ悲しさ。い かな
さり乍ながら神の賜かみ たまひし魂たましひは
これの御國みくににとどまりて守るまもる」

左守さもり「治國はるくにの別わけの命みことよ心こころして

進すすませ玉たまへ醜野しこのヶ原がはらを。

バラモンの又またもや醜しこの軍人いくさびと

拂はらはむとして出いでます君きみよ。

健氣けなげなる教をしへの司つかさの首途いでたちを

見送みおくる吾われぞ涙なみだこぼるる」

治國別はるくにわけ 大神おほかみの厚あつき恵めぐみに抱いだかれて

進すすみて行ゆかむ心安こころやすかれ〇

右守うもり 常暗とこやみの世よを照てらしします神司かむつかさ

今は果敢いまあへなく別わかれむとする。

今いま暫しばし輿ひつぎを止とどめ玉たまへかしと

頼たのむ甲斐かひなき今日けふの首途いであし。

君往きみゆかばこれのホーフスは忽たちまちに

火ひの消きえしごと淋さびしくならむ〇

治國別はるくにわけ 假令たとへ吾われビクの御國みくにを去さるとても

神かみましませば淋さびしからまじ。

願ねがはくば右守うもりの司かみよ國王こきしの君きみに

誠心まごころ捧ささげ仕つかへ玉たまはれ。

三五あななひの神かみの大道おほぢを夢ゆめにだに

忘わすれ玉たまふな夢ゆめにも現うつつにも

龍彦たつひこ「いざさらば君きみの館やかたを龍彦たつひこも

神かみのまにまに別わかれ行ゆかなむ。

刹帝利せつていり百ももの司つかさの人々ひとびとに

袂たもとを分わかち行ゆくぞ悲かなしき。

さり乍ながら道みち晴はる別わけを救すくはずば

神かみの司つかさの道みちが立たたねば

右守うもり 龍彦たつひこの神かみの司つかさの御言葉おんことば

聞くきにつけても勇ましきかないさ

萬公まんこう 萬代よろづよもいと健すこやかにましましてと

祈いのるは誠心まことこころなりけりい

ハルナ 吾國わがくにの艱難なやみを拂はらひ吾君わがきみを

助たすけ玉たまひし人ひとぞ尊たふとき。

萬代よろづよも御側みそばに仕つかへまつらむと

思おもひし甲斐かひなく別わかれむとぞする。

願ねがはくば三五あななひけう教かむつかさの神司かむつかさ

ビクみくにの御國みくにを忘わすれ玉たまふない

治國別はるくにわけ 『いかにして神かみのまします神國かみくにを
神かみの司つかさの忘わすれるべきかは』

カルナ姫ひめ 『大神おほかみの恵めぐみの露つゆに霑うるほひし

人ひとの悉ことごとさぞや嘆なげかむ。

吾われも亦また今日けふの別わかれを何なんとなく

涙なみだぐまれぬ惜をしまれにける』

斯かく互たがひに歌うたを取り交かはし、早はやくも刹帝利せつていりより賜たまはつた駿馬しゅんめに跨またがり、轡くつわを竝ならべて四よに
人んの師弟していは別わかれを告つげ鞭むちを上げ一いち目散もくさんに大原野だいげんやを驅かけり行ゆく。後見送あとみおくつて一同いちどうは
兩手りやうてを合あはせ感謝かんしゃの涙なみだに聲こゑを曇くもらせてみた。

治國別はるくにわけの一行いっかうは

神かみの御言みことを畏かしこみて

ビクの國王や司等に

暇を告げて潔く

心盡しの駒に乗り

轡を竝べ夏々と

青葉茂れる露の道

初夏の微風に面をば

なめられ乍ら進み行く

瞬く間に五十里の

原野を踏み越え猪倉の

魔神の籠る峰續き

シメジ峠の麓まで

早くも無事に着きにけり

ここに四人は蹄をば

とどめて大地に飛び下りつ

馬首をば東に差向けて

一鞭あつればさしもの名馬

もと來し道へ引返し

名残惜げに嘶きつ

一目散に歸り行く

治國別の一行は

シメジ峠の急坂を

エンヤラヤツと登りつめ

暫し汗をばいれ乍ら

四方の景色を打眺め

繪に見る様な風色に

旅の疲れを癒やしけり

少時ありて一行は

立板なせる坂道を

行進歌をば歌ひつつ
注意し乍ら降り行く。

萬公は先に立ち一歩々々調子をとつて歌ひ出した。

萬公「バラモン軍の將軍と 威張り散らした兩人が

ビクの國をば退はれて 命からがらドツコイシヨ

卑怯未練に猪倉の 山に漸う落延びて

土龍の様な穴住まひ 三千餘騎を引率し

さも強さうに構へる その權幕と反對に

僅か四人の神司 打出す嚴の言靈に

恐れて逃げ出す卑怯さよ いざ之よりはフサの國

玉木の村に立向ひ 始終の様子を探索し

吾師の君に従ひて 魔神の住まへる岩窟に

一大騒動起すべく 進みて行かむ楽しさよ

ア、ウントコドツコイ危ないぞ 松彦さまよ、龍彦よ

貴方は足が弱い故 用心なさが宜しかる

これこれ御覽この坂は 一方は斷岩屹立し

一方は千尋の谷の底 岩石起伏の間をば

飛沫を飛ばす水の音 見るさへ膽が寒くなる

命あつての物種だ 必ず怪我が無い様に

大神様に太祝詞 唱へ上げつつ下りませ

ア、ウントコドツコイドツコイシヨ これ程難所が又と世に

如何してあらうか親不知 子不知峠を行く様だ

命知らずの宣傳使 とは云ふものの肉體が

なくては神業勤まらぬ 人の體は神様の

御使用遊ばす傀儡だ 此傀儡を何處までも

立派に保護し奉り 大黒主が三五の

教の道に服ひて 誠心に復るまで

大必要の此體 守らせ玉へ惟神

神の御前に願ぎまつる 朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも 假令大地は沈むとも

神の任しの使命をば 果さにやおかぬ益良夫の

赤き心を嚮し 猪倉山は云ふも更

黄金山や大雲山 寄り來る曲津を言向けて

太しき勳功を萬代に 立てさせ玉へ惟神

龜の齡の萬公が 眞心こめて願ぎまつる

ウントコドツコイ ドツコイシヨ 皆さま氣をつけなさいませ

シメジ峠で第一の ここが難所と云ふ事だ

足許大切に頼みます ア、ウントコドツコイ、アイタツタ

あんまり歌に氣をとられ 注意を與へた萬公が

第一番に轉けよつた アイタツタツタこれや如何ぢや

お尻の皮が剥けた様だ これも全く神様の

私の體に降り來る

大厄難を小難に

見直しましたお蔭だる

ああ惟神々々

御靈幸はひましませよ

治國別一行は交る交る宣傳歌や進行歌を歌ひ乍ら、漸くにして玉木の里のテームスの館に着いた。邸内は老木鬱蒼として際限もなく廣く、立派な建物が澤山に立並んでゐた。されども何處ともなく此館の内に憂事が包まれて居る様な氣配がしてゐる。

萬公「もし先生、ここが木花姫様がお示しになつた、玉木の村の里庄テームスの館と見えますな。二人の娘が捕はれて居るので心配があると見え、立派な家の棟までが何だか力無げに俯向いて嘆いてゐる様に見えますな。何時も先生は人の家の屋根を見たら其處の宅は榮える家か、衰へる家か、喜びがあるか、悲しみがあるか、分るものだと仰有いましたが、如何にも其通り、何とはなしに家迄が心配にしてゐるぢやありませんか」

はるくに 治國「萬公、こんな處で左様な事を云ふものでない。之からチームスの館へ行けば決して喋つてはいかぬぞ。治國別が命令する迄普通一般の挨拶だけしたら黙つてゐるのだ。脱線だらけの事を喋り立てると却てお前の人格を軽く見られ、ひいては私迄が恥しい目をせなくてはならぬから屹度慎んでくれよ」

萬公「はい、慎みます。萬口と云へば萬の口ですから一口づつ云つても萬口竝べ様と思へば、随分量が多うなりますからな」

松彦「アハハハハア先生の御言葉の通り、これから萬口ぢやない、嵌口令だと云ひ乍ら表門に立ちトントンと拳を以て訪れた。

（大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 北村隆光録）

第二章 凱旋（一四〇八）

頻りに門戸を叩く聲にチームスの僕二人は又バラモンの雑兵が、何か徴發に來

よつたに違ひない、うつかり開けてはならぬと、目と目を見合せ、何程叩いても
ウンともスンとも云はずに、門のした大門を御叮嚀に中から支へて居る。治國別
は止むを得ず邸内に聞ゆる大音聲にて宣傳歌を歌ひ出した。

治國別 高天原に現れませる 皇大神は御心を

千々に悩ませたまひつつ 天地を造りたまひしが

天足の彦や胞場姫の 神の教に背きしゆ

其罪咎は邪氣となり 凝り固まりて鬼となり

八岐大蛇や醜狐 百の魔物となり果てて

地上に住める人々の 靈を曇らせ汚しつつ

神の御子と生れたる 尊き人の體をば

曲津の住處となしにけり バラモン教の神柱

大黒主の曲神の 願使に従ひ産土の

珍の聖地に攻め来る バラモン教の大軍は

河鹿峠の要害で

三五教の宣傳使

治國別の言靈に

打ちやぶられて遁走し

浮木の森やビクトルの

山の麓に陣をはり

悪虐無道のありだけを

盡しみたりし折もあれ

神の使の宣傳使

治國別の一行が

又もや此處に現はれて

醜の軍を追ひ散らし

ビクの國家を救ひたり

鬼春別や久米彦は

三千餘騎を従へて

雲を霞と逃げ散りて

猪倉山の岩窟に

住所を構へ遠近の

人家を掠め人を取り

悪虐無道の振舞を

爲せしと聞くより吾々は

世人の害を除かむと

木花姫の神勅もて

此家の娘兩人や

道晴別を救はむと

此處迄急ぎ來つれども

間拔きつたる門番が

吾等を敵とあやまりて

力ちから限かぎりに拒こぼみつつ 開かい門もんせざるぞうたてけれ

此この家やの主あるじテームスよ 三あななひけう五せん教でんしの宣せ傳ん使し

治はる國くに別わけに相さう違みない 唯ただ一ひと息いきも速すみかに

この門もん開ひらき給たまへかし ああ惟かむ神む々々

神かみに盟ちかひて偽いつはりの なき言こと靈たまを宣のり傳つたふ

この歌うたに二ふたり人の門もん番ばんは顔かほを見み合あせ、半はん信しん半はん疑ぎの雲くもに包つまれ乍ながら、一ひとり人は門もんを守まもらせ置おき、一ひとり人はテームスの居ゐ間まをさして進すすみ行ゆく。

テームス、ベリシナ夫婦ふうふは三あななひけう五せん教でんしの道みち晴はる別わけが、番ばん頭とうのシーナと共ともに二ふたり人の娘むすめを救すくひ出ださむと勢いきほひ込こんで行いつてから今日けふで三みつ日かめ目めになるのに、何なんの音おと沙さ汰たもなしの頻しきりに神かみを念ねんじたり、神かみ籤くじを引ひいたりして心しん配ぱいして居ゐた。其そ處こへ慌あわただしく門もん

番ばんのビクが走はしり來きたり、

ビク「旦だん那な様さまに申まを上しあげます。表を門もんに當あたつて敵てきか味み方かたが存ぞんじませぬが、三あななひけう五せん教でんしだとか治はる國くに別わけだとか、此こ處この娘むすめを助たすけに來きたと云いつて大おほきな聲こゑで歌うたつて居ゐますが、如いか

何致がいたしませうか。うつかり開あけて又またもやバラモンの奴やつだと大變たいへんだと思おもひ、拒こばむだ
け拒こばむで見みましたが、私わたしではとんと善惡ぜんあくが分わかりませぬ。どうぞ旦だんなさま那樣さま、貴方あなた御苦ごくら
勞うさま様さまながらお調しらべ下くださいますまいか」

テームス「何なに、三五教あななひけうの治國はるくにわけ別さま様さまが見みえたと仰おつしや有あるか、それは閒違まちがひはあるまい。
何なには免ともあれ門口かどぐち迄まで行いつて考かんがへて見みよう」

とビクを先さきに立たて、大刀だいたうを腰こしに挟はさみ、すたすたと現あらはれ來きたり大音聲だいおんじやうにて、
テームス「唯ただ今いま吾わが門前もんぜんに佇たたずみ歌うたはせたまふ御仁ごじんはいづくの何人なにびとでごさいますか。御み
名なを聞きかせて下くださらば、此門このもんを開あけるでごさりませう」

萬公まんこうは此聲このこゑを聞ききつけ大聲おほこゑにて、

萬公まんこう「吾われこそは三五教あななひけうの宣傳せんてん使し治國はるくにわけ別さまの家來けらい萬公まんこうでごさる。一時いちじも早はやく此門このもんをお開あ
けなされ」

治國はるくに「拙者せつしやは治國はるくに別わけと申まをす者もの、決けつして怪あやしき者ものではごさらぬ。木花このはな姫ひめ様さまの御神勅ごしんちよくに
依より、拙者せつしやの徒弟とてい道晴みちはる別わけが、當家たうけの二人ふたりの娘御むすめごをバラモン軍ぐんに攫さらはれ給たまうたのを
取とり還かへさむため猪倉山いのくらやまに向むかひし様子やうす、拙者せつしやは一同いちどうの命いのちを救すくはむ爲ため、取とるものも取と

り敢ず此處迄参つたものでゐる。一時も早く此門をお開けなされ」

チームスは門内より治國別の聲を聞いて、どこともなしに威嚴のある言葉、さうしてどうしても偽りとは思へないので、靜に門をばづし、門扉をパツと開き、怖々覗けば四人の宣傳使が立つてゐる。チームスは打ち喜び叮嚀に辭儀をしなから、

チームス「是れは是れはお慕ひ申て居りました治國別様でゐいますか、誠に失禮を致しました。サア何卒お入り下さいませ」

治國「ハイ有難う、然らば御免蒙りませう」
と一行四人は大門を潛り入る。

チームス「これビク、何時バラモンの奴が来るかも知れぬから此門を確り閉ぢて置くのだ。さうしてお前はここを守つて居るのだ」

と言ひつけ一行の先に立ち奥に導き行く。治國別は夫婦の居間に請ぜられ、茶を薦められながら挨拶もそこそこにして、

治國「承はれば當家のお嬢様はお二人迄猪倉山のバラモンの巢窟に拐されてお出

になつたさうですな」

テームス「ハイ有難うムいます。實の所は三日前に治國別の徒弟だと仰有つて、道晴別と云ふ立派な宣傳使がお出で下さつて、番頭のシーナと共に軍服姿に身を窶し、二人を取り返して來ると言つてお出なさつたきり、今に何の便りもムいませぬので、夫婦の者が心配致して居ります。何卒貴方の御神力によつて助けて下さるわけには参りますまいかな」

治國「アア其事について急ぎ参つたのでムいます。餘り愚圖々々致して居れば、何だか深い陷穽に放り込まれて居るさうですから、命が危うムいませう。拙者はこれより時を移さず猪倉山に立ち向ひ、千騎一騎の言靈を發射し敵を歸順させ、四人を立派に救ひ出して歸る心算です。私に確信がムいますれば必ず必ず御心配なされますな」

テームス、ベリシナの兩人は、

「ハイ有難うムいます」

と兩手を合せ涙に聲も得あげず泣き伏して居る。

これより治國別一行はチームスの門を出で足にまかせて、日の西山に春き給ふ頃、足を速めて進み行く。

谷を飛び越え岩間を傳ひ、漸くにして、晝猶ほ暗き森林を神の恵に守られて黒白も分ぬ闇の道、却てこれ幸と息を凝らしながら漸くにして岩窟の前に辿りついた。夜分の事とて、數多の兵士は何れも武装を解きテントの中や假小屋の中に轉がつて居た。馬は彼方此方の木に繋がれ盛に嘶いて居る。治國別一行は其處邊に脱ぎ捨てある軍服を手早く闇を幸ひ身につけ、素知らぬ顔をしながら、足音を忍ばせ、四邊に氣をつけ、長き隧道を辿つて行く。不思議にもこの時計り神の御守りで暗夜の道がよく目についたのである。

傍の岩窟の中に何だか人聲がするので、岩壁に耳を當て考へて居ると、鬼春が久米彦其外の幕僚を集めて、ひそびそ相談會を開いて居る。

鬼春「久米彦殿、折角の美人を無雑作にあのやうな所へ放り込むと云ふ事があるか、何とかして助けやうが無いものかなア」

久米「到底駄目でせう。今日で二日目ですから屹度死んでゐるでせう」

鬼春「貴殿にも似合ぬ残酷な事を致すぢやないか。貴殿は、カルナ姫に説き立てられ未來が怖ろしいと云うて、ビクトリア王迄も救うて、置いた身でありながら、人の命を取るやうな、なぜ残酷の事を致さるのか」

久米「實の所は四人の體の周圍に鐵板を廻して放り込みましたから、怪我は致して居りますまい。さうしてその鐵板は桶のやうになつて居り、太い綱が通してあります。何程深い井戸の底でも綱さへ手操れば容易に救ひ上げる事が出来ます。幸ひ此處には岩より湧き出る起死回生の薬がありますから、これを含ませれば二日や三日息が絶へて居ても回復は大丈夫でせう」

鬼春「何と貴殿も腹が悪いぢやないか。よもや貴殿が左様な殺伐な事は致すまいと睨んで置いたのだ。サア一時も早く四人の者を救ひ出し此處へ連れてムれ」

久米「それに先だつて將軍に一つ相談がムります。外でもムらぬが、きつとスガールを拙者にお渡し下さるでせうなア」

鬼春「アハハハ又しても左様な我慢な事を云ふものではありませぬぞ。久米彦殿はスミエルで暫く御辛抱なされ、スガールは拙者が世話を致すでムらう。オイ、

スパール其方は早く、男は兔も角も女二人を救ひ出し、スミエルは久米彦殿の居間に送り置き、スガールの方を此方に連れて来い。鬼春別が手づから氣付を遣はし呼び生けてやらう」

スパールは、

「ハイ承知致しました」

とドアを押し飛び出さうとするのを久米彦はグツと襟を掴み、

久米「アハハハ拙者が隠して置いたる以上は、これだけ澤山の陥穽貴殿が何程氣張つた所で、見當ることはムらぬ。やつぱり拙者が放り込んだのだから拙者が行かねば駄目だ。まづ氣を落付けなされ、そのかはり先づスガールは屹度拙者がお預り申す」

鬼春別は氣を焦ち、

鬼春「オイ、スパール、久米彦の言葉を聞くに及ばぬ。サア早く救ひ出して来い。久米彦殿スパールの襟を放しておやりなさい。上官の命令をお聞なさらぬか」
久米「然らば拙者が救ひ上げて参りませう。オイ、エミシ某に續け」

と云ひ乍ら、ドアを押し開け飛び出した。隧道の所々には肥松を焚き乍ら明をとつてある。パツと寫つた四人の顔、久米彦は聲を尖らし、
久米「ヤア其方は番兵ではないか、最前から吾々の話を立ち聞き致して居つたのだな。不都合千萬の奴だ。サア一時も早く彼方に立去れ」
治國「拙者は三五教の宣傳使治國別の一行でゐる。拙者の徒弟道晴別を初めシーナ、及スミエル、スガールが大變なお世話になつたさうだ。一言お禮を申さなくてはならないと思ひ、態々お尋ね申しましたのだ。アハハハハ」
久米「イヤ、これはこれは治國別様でゐいましたか。何卒言靈は一寸暫くお見合せを願ひます。唯今直にお渡し申しますから、一寸此處に待つて居て下さいませ」
治國「イヤイヤ決して決して左様な御心配は入り申さぬ。拙者が自ら救ひ出さねばならぬ義務がゐる。貴方はマア悠りと御休息をなされませ。四人の所在はビクトル山から既に靈眼で見えました」
久米「イヤどうも治國別様の慧眼には恐れ入りました。今日限りバラモンの將軍職をやめますから、どうぞ命計りは御救助を願ひます」

萬公「先生、こんな事云つて又計略にかけるのですよ。四人放り込みやがつた穴

へ鬼春別も久米彦も何奴も此奴も放り込んでやりませうか、アハハハハ、面白い

面白い、エヘン。どんなものだ、鬼春別、久米彦兩將軍、この萬公が現はれた以

上は到底駄目だぞ」

松彦「萬公、何を云ふのだ。お前は嵌口令を布かれて居るぢやないか」

萬公「萬公未代云はない心算だったが、あまり【むかづく】のでつい口がにりま

した。それよりも早く四人を救ひ出さうぢやありませんか……これや久米彦、貴

様が放り込んだのだから貴様が救ひ出して来い。萬一人でも命がなくなつて居

たら、先生が何と仰有つても、この萬公が承知せぬぞ。ヘン馬鹿にして居やがる、

將軍も何もあつたものか。先生の前に來たら猫に出會つた鼠のやうな鹽梅式ぢや

ないか。醜態を見やがれ、イヒヒヒヒ」

松彦「萬公さま又忘れたのか、エエ久米彦殿早く案内なされ」

萬公「これや早く案内を致さぬか、何を愚圖々々して居るのか、そして鬼春別は

どこに居るのか」

と虎の威をかる糞喰ひの狐のやうに無暗矢鱈に噪いで居る。龍彦は此の間に天眼通により四人の所在を知り、手早く一人々々を穴の底から引き上げ、鎮魂を施し、漸く四人共息を吹きかへさせた。

茲に鬼春別、久米彦兩將軍は土下座をしながら、慄ひ慄ひ治國別に罪を謝した。治國別はいろいと誠の教を説き諭し、且つ鬼春別、久米彦、スパール、エミシの高級武官に一人づつ態と背負はしめ、凱歌を奏しつつ一先づ玉木村のチームスの家をさして神恩を感謝しながら歸り行く。

(大正一二・二・二三 舊一・八 於龍宮館 加藤明子録)

(昭和一〇・六・一三 王仁校正)

附録 神文

是の幽齋場に神術を以て招請奉る、掛巻も畏き、獨一眞神天御中主大神、従ひ

賜ふ千五百万の天使等、一柱も漏れ落る事無く、是の齋庭に神集ひに集ひ玉ひて、
正しき人の御靈々々に、奇魂神懸らせ玉はむ事を乞祈奉る。天勝國勝奇魂千憑彦
命と稱へ奉る、曾富戸の神亦の御名は、久延毘古の神、是の幽齋場に仕へ奉れる、
正しき信徒等に、御靈幸へまして、各自各自の御魂に、勝れたる神御魂懸らせ玉
ひて、今日が日まで知らず知らずに犯せる、罪穢過ちを見直し聞直し、怠りある
を宥させ給はむことを、國の大御祖の大前に詔らせ玉へ。伊怯く劣在き吾等は、
出口大教祖の御勳功に依り、神國の神典と、大神の御諭を、讀み窺ひ奉りて、天
地の御祖の神の御勳功を覺り、國祖大國常立尊が、伊邪那岐伊邪那美の二柱の天
使に、是の漂流る地球を修理固成せと、天の瓊矛を事依さし賜ひしより、その沼
矛を指し下ろし鹽コヲロコヲ口に掻き鳴し給ひて、淤能碁呂島を生み、之を胞衣
となして、天の御柱國の御柱を見立て給ひ、八尋殿を化作たまひ、妹兄の二柱所
就たまひて、大八島の國々島々を生み、青人草等の始祖等を生み萬の物を生み、
青人草を恵み撫で愛しみ給はむが爲に、日月國土を生み給ひて、各自各自其の神
業を別け依さし玉ひ、萬の事を始め玉ひて、爲しと爲し勤しみ玉へる事毎に、天

津御祖神、國津御祖神等の大御心を御心として、青人草を恵み玉ひ愛はしみ、彌益に蕃息榮ゆべく、功竟へ玉ひしを初め、天津御祖神其の御神業を受持ちて、天津國を知ろしめし、五穀物の種を御覽して、此のものは現しき青人草の食て活くべき物ぞと詔りて、四方の國に植ゑ生したまひ、天の下の荒振神達をば神拂ひに拂ひて、語問ひし岩根木根立草の片葉をも語止めて、幽り事は、神素盞鳴命の御子杵築の大神に言依さし治めしめ、皇御孫命を、天津日嗣の高御座に坐せ奉りて、よろづちあきながいほあきおほやしまの國を安國と平けく治め玉へと、天降し依さし奉り萬千秋の長五百秋に、大八島の國を安國と平けく治め玉へと、天降し依さし奉り顯明事、知ろしめさしめ玉へる時に、神漏岐、神漏美の命の御言依さしませる、天津祝詞の太祝詞に依りて、皇御孫命の御代々々、天津神社國津神社を齋ひ、神祭り専らとして、天の下四方の國を治め、大御田族を恵み撫で給ふ事なも、天津御祖の神、國津御祖の神の傳へ玉へる道の大本にして、其の御任のまにまに、天津神國津神達受持ちて世の中の有りとの有りの悉は、皇神の大御業に漏るる事なく遺る事無く、廣く厚く恩賴を蒙りて、有る縁由を確に窺ひ得て、戴に尊み辱なみ、赤誠を以て仕へ奉るべきにこそ、青人草の勤めならめ。然るに中津御代より、

邪さの教説ども傳はり來たり吾等が祖先たち世人諸共に、心は漸く邪神の風習に
移るひ、異しき卑しき蕃神を専らと齋き奉りて、高く尊き天地の御祖神等の、嚴
の御靈の幸ひに依りて、惟神の大道の中に生れ出で、食物衣服住む家等爲しと爲
す事毎に大御恵を蒙りつつも、然は思ひ奉らず、神の道を粗略に思ひ居る人々ど
もも多く出で來り神に仕へ奉る事も追々に廢れて、天津神社國津神社も衰へ坐せ
るに依りて、皇神等は彌放りに放り坐し、神の稜威も隠るひまし、邪神は所を得
つつ、大神を潛めおきて世人を欺き美はしき神の御國を亂したるこそ憤うるしく
慷慨く思ふの餘り、大本皇大神の御教を能く説明して、世人に普く大神等の御恵
みの辱き尊き、大本の由緒を説き諭す神の御柱となるべく、この幽齋場に在る信
人、又其の守護神に聞しめさへと宣る。信人よ、守護神よ、此時この砌り、各
自々々靈の柱立て固めて、嚴の御靈瑞の御靈の教を以ちて、猶この行先も、如何
なる異しき思想論説ども蔓り來るとも、相交らひ相口會ふこと勿れ。
辭別けて天地の大神等、三千歳の長き年月天地を清めて、安國と平けく知らしめ
すべく、世に隠れて事計り給へりし、國の大御祖大國常立大神、亦教の柱なる惟

ながらまみちいやひろおほいつきくになおひぬしのみこと
神眞道彌廣大出口國直靈主命の、神隨の御教のまにまに、幸へまし荒振神等御靈
等は、皆御心を直し和めまして、善しき心を振り興しませ。中津御代より、人の
心の隨々何事も行はしめて、大神等も神習と宥め給ひて、用ひしめ玉へる蕃國々
の事どもの、天地の神の大道に甚く違へる非事は神より糺し改めて退けしめ給へ。
天地の大神等、神代の隨の大稜威を振り起して、各自々々掌分たまふ功德の任に
任に、相宇豆那比相交こり相口會へ玉ひて、今迄に神の大道を知らず、惟神の大
本を、辨へずして、過失犯せる雑々の罪怠り穢を被ひ退け、神の子たる道に天の
下の人草を導き給へ、亦人草の今も猶ほ日に夜に過失犯す事の在らむをば、神直
日大直日に見直し聞直し宥め許して清めしめ給へ、神の神典は更なり大本の國之
御祖の御神諭は、漏らす事無く過つ事無く、正語を正語と覺らしめ給へ、亦た教
司等の説き誤りあらば、次々に思ひ得て、疾く改め直さしめ玉へ、足は歩まねど
も、天の下の事どもは悉に神の靈德によりて知らしめ給へ、外國の教にもあれ、
正語は正語としてひらひ得さしめたまへ、高天の神祖の神の産靈に造り給ひて、
尊き神靈を分賦り與へ玉へる、神の宮居として神懸り玉ひて、神の大道を好む良

き信人と爲さしめ玉へ、二度目の天の岩戸を開かむ道に仕へて、御代の太き御柱の教に入れしめ玉へ、掛巻も畏けれども、吾々青人草の靈魂は乃ち神の分靈にしあれば、幽り事神事をも知らるる限りは知らしめ玉ひて、此世ながらに神にもまみえ奉り、亦生ける神とならしめ玉ひて、世の爲め道の爲に祈りと禱る事ども爲しと爲す術ども、悉に神術なす伊都速き驗しあらしめ玉ひて普く天の下の亂れを治め、世人の災難を救ふ尊き人となさしめ玉ひて、所在邪神どもも形隠し敢へず恐ぢ怖れしめ給へ、吾無く一向に大神の道に仕へ奉る身は是れ奇魂千憑彦の命に等しければ天地の大神等、殊に大國常立大神、豊雲野大神たちを初め、諸々の正しき御靈等、青人草と生れ出し、之の幽齋場の人々の請願奉るまにまに、靈幸へ坐し神懸りまして、其の御威徳に似えしめ玉へと大神の大前に祈り奉る。幸に皇神等の御靈の御稜威に由りて、神の世界の尊き廣き美はしき、状況を伺ひ得て、神と吾等と相親しみ、睦み、神の御子たる身魂に立復りて邪神の教の佞け曲れる徒の邪さ説は次々に問和し言向けて、惟神の大本の正道に趣かしめ、同じ心に神習はしめ玉へ、若し大神の教と御國の法に歸順ずして四方四隅より、荒び疎び來

る妖鬼枉人は、速に追ひ退け罰めて、例のまにまに黄泉國に逐ひ下し、大神の御
稜威と天皇の御光りを世に炳じるく知らしむべく神力を與へ給ひて、花々しく世
の爲人の爲に、立働かしめ給へ。常世の暗を照し清むる大神の神諭を、普く廣く
滞る事なく美はしく、世に説き明かし、世人の悉正しき直き清き廣き惟神の大本
の教に復らしめ、吾等が神國に盡す麻柱の誠を、最高き雲の上にも、世を政りご
ちます公邊にも、伊吹擧げ吾等の御國を思ふ赤誠を、徒には捨てず採り用ゆべく
思はしめ給へ、吾等信人が神世の由縁を畏み、大神の御神勅を仕へまつりて、本
宮の山に宮柱太敷く立て、千木高く仕へ奉れる如く、古の神の政に建替へ立上げ、
永遠無窮に親と子の中は彌睦びに親び榮えしめ給へ、此の功績を以て罪怠穢犯し
有るをも宥め恕し玉ひて、大神等の御恩に報ひしめ玉ひ、立替立直しの神業に加
はりて、人の勤めの功爲し了へて、現世を罷れる後の魂の往く方は、神の定め
まにまに、産土の神の執持ち玉ひて、大本大神の御許に参り仕へ奉らしめ給へ、
大神の御後に立ちて、高天原に復命曰さしめ玉へ、彌益々も正しき直き太き心を
固めて動く事なく、天地の有らむ限りの後の世の次々も、現世に立たむ功績のま

にまに、大神の教を世人に幸へしめ玉ひて、邪さの道を糺し辨へ、伊吹拂ひ平げ
退くる神業に仕へ奉る御靈と成らしめ玉ひ、又子孫の家の者ととも朋友親族教子等
の萬の枉事罪穢を、拂ひ清めて病しき事なく、煩はしき事なく睦び親しみ、諸々
の義理に叶へる願事は幸へ助けて、大神の大道を説き弘むる身魂と生かし助け、
天翔り國翔る仙人等御靈等を率ゐて、世を守る奇魂千憑彦の御魂と成らしめ賜は
む事を、高天原の大本の廣庭に齋廻り清廻りて、天つ御祖の大神國の大神祖の大
神、大本教の教御祖の御前に、慎み畏み請のみ奉る。惟神靈幸倍坐世（完）

靈界物語 第五四卷 眞善美愛 巳の卷

終り